ながしシスター

人春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ながしシスター

【Ｎコード】
Ｎ２５２９Ｓ

【作者名】
人春

【あらすじ】
弟の名前は球磨川禊。おねぇちゃんの名前は球磨川流。「私の人生は、過負荷の少年少女を愛するためにある」平凡な大学生活を送っていた青年は、理由も分からず与えられた『めだかボックス』の世界にて転生する。そう、球磨川禊の双子の姉として。不定期更新、遅筆、それでも良いなら覗いてってください

0、（前書き）

なんか人気っぽかったので書くことにしました

更新不定期ですがよろしくお願いいたします

0、

トラックに轢かれて俺は死んだ
そして神様とやらに会い、転生することになった
貰った能力（？）とやらは使い方が分からない。そもそも、どんな能力を貰ったのか分からない。とりあえず黄金率Ａとやらがあるのだけは分かったが
腹の中で無意味に時を過ごす事一年近く。俺は、必死で腹の中に留まることで自我を保っていた
産まれたくないのだ
産まれたくないのです
産まないでください
愛しい愛しいお母様。どうか俺を産まないでください
このまま揺りかごのような子宮の中で、呼吸をすることもなく緩やかに殺してください
産まないでください
お願いですから
産まないでくれたなら俺は、今すぐ自殺するから

そんな想いとは裏腹に、脈動する子宮は緩やかに俺を地獄の中へと吐き出していく。必死でろくに動かない手足を使って産道に留まろうとするが、未だ産まれてすらない胎児はいともたやすく体外に吐き出された

「うわぁあああああああああっっっ！？」

悲鳴。俺のではない。産婦人科の医師のモノだ。

その瞬間、俺は、産まれた

世界に嫌われた、《過負荷》として

助けてくれる者も

手を差し伸べてくれる者も

愛を囁いてくれる者すらもいない地獄へと、産まれ落ちた

産まれながらの過負荷に救いはない。

そんな諦念と共に俺は、産声を上げずに緩やかな死を目指す

すでに産まれ、臍の緒を切断された俺は、呼吸しなければ死ぬ。産まれたばかりで大した過負荷に目覚めていない俺なら、そのまま死ねるはずだった

その産声を聞くまでは

俺は、双子だった

俺の次に産まれた弟もまた、過負荷だった

でもそれに気付きもせず、この地獄のような世界に産まれ落ちたことを精一杯喜びながら、悲しみの涙を流す弟の姿が、俺のぼんやりとしていた意識に深く刻み込まれた

そして理解した。

俺が何故産まれたのかを

過負荷の少年少女を助けましょう

過負荷の少年少女に手を差し伸べましょう

過負荷の少年少女に愛を囁きましょう

過負荷の少年と共に遊び過負荷の少女と共に寄り添い過負荷の男性のために奉仕し過負荷の女性のために尽くし過負荷のために過負荷を愛し過負荷のために全てを捨て過負荷と共にあるために過負荷と育む人生を歩むために過負荷の全てを受け入れ過負荷に全てを差し出し過負荷のために過負荷を担い背負い尽くし食べて食べさせて愛して恋してメチャクチャにしてメチャクチャにされて全て全てをメチャクチャに返し過負荷のための過負荷による過負荷のためだけの過負荷が行う過負荷キャンペーンを始めるのです

それが俺の《愛し恋し／ラブアレルゲン》

俺の名前は球磨川　流／ナガシ

愛しい恋しい滅茶苦茶可愛くてラブリーでちょっぴり素直じゃない弟の名前は球磨川　禊。

愛称はみーくん

私の名前は球磨川　流

みーくんのためにみーくんを愛して恋して滅茶苦茶になるまでメチャクチャにする、ちょっぴりお茶目で冒涜的なおねぇちゃんです

――――――――――とりあえず

みーくんの初恋の相手（なんだかロリィな診療外科の女医さん）を埋めてこようと思います

0、（後書き）

過負荷って書きすぎてゲシュタルトブレイカー

－1　江迎怒江（前書き）

パンチってか毒が足りん

作者は単行本派なので情報源が足りません

Ｗｉｋｉｐｅｄｉａも読んだがわかんねーっ！

一1　江迎怒江

あの人に出会えたのは偶然でした

わたしはいつものように看護婦さんに着替えさせて貰い、顔を洗って貰い、ご飯を食べさせて貰い、それに甘えるしかない腐った自分にふて腐れながら診察室に向かっていた

色んな人からたくさんのものを貰い、たくさんのことをやって貰い、けれど腐らせることしか出来ない自分。こんな腐ったような人生にどんな意味があるんだろう、わたしの産まれてきた理由が全く分からなくて、もしかしたらわたしの人生の理由を教えてもらえるかもしれない、なぁんて結局誰かに頼ることしか出来てない腐った根性を腐った人格なりに発揮してわたしは診察室に向かっていました

その途中――病院の窓の外から、ざくっ、ざくっ、なぁんてまるで真夜中に深ぁいお山の中で腐った死体を埋めるために泣きながら穴を掘っている時によく聞くような音が聞こえて、わたしは足を止めました

死体でも埋めてるのかな？というか死体を埋める以外に穴を掘る理由ってあるのかな？工事？あれは重機使うから別なの。やっぱりスコップ使って穴を掘るときは死体を埋めるときだけだよね。なぁんて考えながら窓の外を見てみたら、とっても変な光景が視界に飛び込んできました

「『おねえちゃん、これってもしかして家庭内暴力じゃないかな。あるいは精神的陵辱？そう言えばぼく、ひたすら穴を掘って埋めてを繰り返す拷問があるって聞いたことあるよ』」

「んー、んー？拷問だって愛があればそれは許されるんだよ？それに掘って埋めてはしないのよ？あのロリババア埋めて終わりだもーん。ってかおにいちゃんだから間違えたらメッ」

「『気分で性別変えるのやめない？』」

…なんだろう。何してるんだろう

わたしと同じくらいの年頃の男の子が、同じくらいの年頃の女の子をおんぶしながら、プラスチックのスコップでザクザク穴を掘ってた。２人とも貼り付けたみたいな笑顔を顔に浮かべていて、正直スゴくキモチワルイ

「『おにいちゃんぼく疲れた。あと人吉先生埋めるのやめようよ。好きな人埋めるとかどんなプレイ？ああ、顔だけ出して』」

「はい、そのさきはダァメ。んー、んー、別に私はね。みーくんが誰かを好きになるなら別にいいのよ。でもね、アレはダメ。見た目的にダメ。生理的にダメ。あとみーくんの童貞は私が貰うから駄目。あとおねえちゃんだから間違えたらメッ」

「『近親相姦属性は無いなぁ。おねえちゃんが幼児体型な間はありだけどね。ぼくはロリコンで熟女趣味だけど姉萌え属性はないんだよね』」

？？？？

会話の内容は理解した。出来なかったけど、とにかくこの２人が姉弟で変態なのはわかった！

「あらぁ？」

ぐりんっ！とおんぶされてた女の子の視線がわたしに突き刺さる。ゾクゾクゾクゾクゾクゾクした。それくらい、キモチワルイ動きだった

前に見せて貰ったエクソシストって映画みたいに、首が１８０度回転したみたいな違和感。実際には９０度も回ってないのに、ドロドロドロドロドロにとろけ腐った糞尿みたいな視線に胸がドキドキしたいっ！」

「あらあらあらあらあらあらあらぁ！？可愛いっ！みーくんみーくんあの幼女欲しいな！捕まえて箱に閉じ込めて標本にしたいっ！」

「『おねえちゃんのわるいびょうきだー。にげてー、そこの幼女にげてー』」

棒読みで言われても逃げる気がさっぱり湧いて出ませんでした

そのままのたのたと必死で足を動かしてこっちに向かってくる男の子。あとその背中で目をドロドロ輝かせている女の子

よくよく見れば、２人の顔はそっくりでした

ドロドロに腐ったような目と、昆虫の死骸みたいな透明な目。あと女の子の方がちょっと垂れ目かな？髪の毛の長さ以外の違いはそれくらい。…あとは表情かな？男の子が貼り付けたような笑みを顔面に張り付けているのに比べて、女の子は心の底から楽しそうに笑っていた

「私！球磨川！くまがわながし！なっちゃんって呼んでね禍負荷ちゃん！」

「『おねえちゃんそれその辺の看護士さんに看護士さんって話しかけてるのと変わらな…あれ？いいのかな？その辺どう思うリボンが可愛いお嬢さん』」

「とりあえずあなたたち人見知りしない人だなぁって思う…」

なんなんだろう、キモチワルイ

キモチワルイのに、離れたくない

笑顔で話しかけられることが凄く嬉しいのに

今すぐ逃げ出したいような気持ちになる

キモチワルイ

「んー、んー、んー？幼女ちゃん幼女ちゃん自己紹介！流おねぇちゃんが自己紹介したんだから次は幼女ちゃんの番だと思うの！」

にこぉ、と腐った石榴の身が内側から破れて弾けたみたいな真っ赤な笑みを浮かべる流おねぇさん（？）

腐った太陽

ふと、わたしの胸にそんな言葉が浮かぶ

ああ、成る程、と思った
普通の太陽はわたしには眩しすぎるけど
この暖かくも生臭い太陽なら、わたしに相応しいかもしれない
「わたし…むかえ。江迎怒江。腐らせることしか出来ない腐ったような過負荷です」
そう言えば、流おねぇさんはびしっ！と男の子の頭に手刀を落とした。男の子は笑顔のままのろのろと流おねぇさんを背中から下ろす。すたっ！と地面に立ったおねぇさんに、「こんな人でも、歩けるんだ…」なんて失礼な感想を抱いた
「『おねぇちゃん、高い』」
「んー、んーんー、んー？登って？私の身体にグサグサ爪立てて登って？」
「変態さんだ…」
「誉められたー！」
「『誉められたねー』」
今度はおねぇさんの背中に男の子がおんぶされる。男の子が嬉しそうに笑うおねぇさんの頭をくしゃくしゃ撫でて、おねぇさんはわたしに抱き付いた
…抱き付いた？

「…おねぇさん、離れて？」

下手に触ったら腐っちゃうから突き放すわけにもいかない。だからそう言ったのだけど、おねぇさんはぐりぐりと一層わたしを抱き締める。人肌の暖かさに、なんだか胸がドロドロする。二人分の重さがわたしに乗り掛かって、足下がぐちゃぐちゃするような気がした

「――『愛し恋し／ラブアレルゲン』・『割れない卵／コロンブスエッグ』」

ぼそっ、と耳元でそんな声。そうしたら、おねぇさんはわたしの手を取った

っ取を手のしたわ

た
？

「っだめっ！」

じゅうっ！と予想通りの腐る音。肉が腐った甘ったくも生臭い匂いが鼻に届き、反射的におねぇさんの手を振り払う。今さら遅いことは確定的に明らかなのにそれでもこうすれば「わたしは腐らせようとなんか考えていなかった」という言い訳になるから

でも、おねぇさんの手は振り払えなかった

ぐじゅぐじゅと肉を腐らせながら、黒煙をあげるおねぇさんの手。だというのにおねぇさんはニコニコ口元だけで笑ってた

「むかえ、むかえんー、んー？んー、んー…。むーちゃんかな？むーちゃんだねっ！わたしのことはおにぃちゃん、お兄様、あにぃ、おねぇちゃん、おねぇさん、お姉様、姉さんねーたんにーたんなっちゃん流ちゃん流様流くんの中から好きなの選んで呼んでね！ゆっくり選んでいってね！」

な
ん
で
？

な
ん
で
？

「なんで？」

「んー、んー？」

「なんで腐らないの？」

そっと手を伸ばす。おねぇさんの頬に触れた手は、じゅぅ…と肉を腐らせる。腐った肉が黒く染まらない。爛れない。痛がらない。なんで？なんで？なんで？なんで？わたしの『荒廃した腐花』で腐らないの？意味わかんない。意味が分かんない

「…なんで？なんで腐らないの？腐れよ。なんで腐んないのよ。あんたも腐りなさいよ」

「腐ったりしないわ？だった手に触れられるだけで腐ったりなんかしてたら、貴女のことを愛せないじゃない」

いま、なんていった？

愛する？誰を？わたしを？なにそれ？新手のギャグ？アハハ面白ごめんやっぱむりキモチワルイなにこいつキモチワルイ腐れよやっぱ腐りなさいよふざけてんじゃないわよ腐りなさいよっ！

「ポッと出てきて「わたし腐らないからあなたを愛せます？」ご都合主義の腐った二次創作じゃあるまいし…。ふざけたこと言ってな

いでさっさと腐ってくれません？」

肉の腐る匂いはする。肉の腐った音はする。だけで手のひらに触れる感触は柔らかい初めて触れる肉の感触で、いつの間にかわたしは泣いていた

「…んー、んーんー、んー？あらあらあら？読み違えちゃった？貴女の幸せって誰かを腐らせることだったりした？だったら存分に腐らせていいよー！」

ぐじゅ、と

いつものように、腐った肉に指が沈んだ

「…ぇ」

腐らないんじゃ無かったの？

腐らないから腐らせようとしたんじゃない。いつものように。いつものように。わたしが今まで歩んできた人生のために。目の前の女にわたしの過去を壊されないように、わたしのたった2年しか送ってない人生を壊されないように、いつものように腐らせようとしたんじゃない

…それって、もしかしてわたし。

わたしの幸せを自分から腐らせようとしたんじゃない？

「――――――

そこで、わたしの意識は途切れました

目が覚めた時には女の子はいなくて、ただ男の子だけがわたしの顔を覗き込んでいた

「『おにぃちゃんの過負荷は『ラブアレルゲン』。ジャンプ風に言うなら【肉体操作系】の禍負荷さ。おねぇちゃんが【愛したい】と思った対象に肉体的接触をした瞬間、おねぇちゃんの身体は対象を【愛するための肉体】に変化するんだ。例えば君が相手なら【腐らない身体】に、僕の『却本作り／ブックメーカー』が相手なら決して【劣化しない身体】に。応用範囲高い過負荷だと思わない？ずるいよねー。四天王クラスの能力だよ。弱くてズルくて頭が悪い僕と同じ遺伝子のはずなのに神様って負平等だよね。所詮僕みたいな雑魚キャラにはポジション：テリーマンがお似合いってことかな？』」

「…よく、しゃべるんですね」

っというかあの人腐ってたじゃない。…ああ、皮膚一枚分だけ腐ってたとかそういうオチ？なにそれ笑えない

「『わ、あんな大声出してたのに喋れるんだ。てっきり喉つぶれてると思ってたよ』」

「…貴方、嫌いです」

「『僕は自分が大好きですっ！』」

「…」

嘘憑きだ。この子

過負荷／わたしたちが自分のことを好きなわけ無いじゃない

「『ああ、でもっておねぇちゃんから伝言』」

「ん…」

「『人肌愛しくなったら抱かれにきなさいっ！』」

「ぷっ…」

意外と…

意外と、だけど

あの人、好きかも

馬鹿みたいに愛してくれそうだから、ちょっとだけ…凄くキモチワルイけど…好きかも…

「『あともう一個』」

「ん…？」

男の子は、ニコニコしながら言った

「『腐らせたいなら、私を腐らせてね？』」

好き、かもしれないけど

あの人に付いていったら、ダメになると思う

一1　江迎怒江（後書き）

次
回予告

流＞『荒廃した腐花』によって乙女の命たる顔を腐らせてしまった
球磨川　流おねぇちゃんっ！

流＞けれど例え世界が彼女を嫌っても、黄金率Ａを持つ彼女をお金が嫌うわけは無かった！

流＞現れたのは顔に傷を持つ世界最高の無免許医！

流＞次回！新世紀ナガシオネェチャン第二話！

あ
っ
ちょんぶりけっ！

流＞来週もぉ～サービスサービスゥ！

ＢＪ「お代はいかほどいだけるんで…？」

禊＞『パチモンじゃん』

※次回予告は本編に一切関わりありません

ちなみに『愛し恋し』の弱点

↓相手の過負荷や異常が『愛』の妨げにならない場合、身体は変化しない

↓『普通』相手にはむしろ平均以下の運動能力しかもたない普通の女の子。ただし『過負荷』なため凄くキモチワルイ

↓『特別』相手にも一切意味がないので鍋島相手にも殴り負ける。でも『過負荷』なため触るのもいやになるほどキモチワルイ

↓『異常』の場合はタイプ別。『解析』や『改造』相手にはなんとも…。だけど五感が捉える全てがキモチワルイ

↓ぶっちゃけ対『過負荷』専用『過負荷』

一2　志布志　蛾々丸（前書き）

…んー、んー…んー、んー…ん？誰だっけ？

過負荷には、好かれる方が致命的とか失礼なこと言ってくれたの

それなら、あらゆる過負荷を愛してる私とかどうなっちゃうのよぉ

――球磨川　流

一2　志布志　　蛾々丸

目に映る範囲には、瓦礫しかなかった
瓦礫の山の中、ぽつんと残った空間で
ぐちゃ、と水っぽい音がする
びくん、と小さな影が跳ねた
楽しそうに、それはそれは楽しそうに悲しそうに嬉しそうに怒りながら彼女はもう一度ぐちゃりする
びぐっ、と小さく跳ねた影
数は、2つ
年端もいかない少女の上に、やはり少女が馬乗りになり、片や血塗れで、片や傷まみれで向かい合っていた
やがて、1人の少女が口を開いた
「――♪～～――～♪～ー♪」
歌詞も無ければ歌もない、ただメロディラインをなぞるだけの歌声
そうして、ぐちゃ、と音がなる
「――♪～ー～ー♪～ー♪西尾維新先生のアニメ化フェア万歳っ

♪ってことでここは１つ」

にぱっ、と晴れやかな笑みを浮かべながら少女は意味のわからない言葉を繋ぐ

そうして、ぐちゃ、と音がする

「――♪～ー～～ー♪刀語と化物語はいいよねぇー、名作だよ名作。私、アニメしか見てないケド」

色々な方面からにわかとか怒られそうな台詞を吐きながらも、彼女に悪意は無い。というか何も考えていない。ただただ思ったことをそのまま口に出しているだけだ

悪意も無ければ思考もなく、何も考えずに彼女は手に持ったドライバーを振り下ろした

ぐちゃ、びくん

先端だったらまだ楽だったかもしれない

鋭い先端は容易に命を奪っただろうから

けれど彼女は、丸いプラスチックの柄尻を振り下ろす

ぐちゃ、びぐっ

「私、アニソンしか聞かないからレパートリー少ないのよねー。みーくんはアニメ見ないしぃ、あの子ったらジャンプ大好きでねぇ？アニメ見てもほとんど原作がジャンプなのよ。ジャンプのどこがい

いのかしら？少年ジャンプはやっぱり少女な私には理解出来なかったりするのかなぁ？どう思う？」

ぐちゃ、…びく

「あら？志布志ちゃん？…しぃちゃん？しぃちゃん大丈夫？あらあらあら？」

ぐちゃ。ぐちゃ。ぐちゃ。

「…んー、んー？あれ？終わり？だったらもう帰っていいかな？さっきも言ったけどみーくんのご飯作らなきゃならないの」

…ざくっ

「というわけでみーくんが大事にしてたお人形見つけてきたよ！」

「『うわっ、なつかしー。3歳くらいの時だっけ？お姉ちゃんが初めてお人形作ったの』」

「そうそう！みーくんのために前世ですらやったことのないお人形作りに挑戦しました！褒めて褒めて舐めて愛して抱いて！」

「『うんそれ無理。返り血浴びてるけどどうしたの？』」

「あ、コレ全部自分の血だから大丈夫っ！新しい過負荷ちゃん見つけたの！人を傷付けるのが大好きな娘さんでした！」

「『顔面の皮膚3分の1くらい剥がれてるけど？』」

「んー、んーんー、んー？その過負荷ちゃん用の『愛し恋し』・『絶刀・鉋／サムライブレード』がね！『決して折れない身体に曲がらない心』でさー。人を傷付けるのが大好きなあの娘には邪魔でしょ？だからそのまんま攻撃され続けてたら剃刀でスパッてね？」

「『凄いや。お兄ちゃんのきれいなピンク色の肉がばっちり見えてるよ？…なんかムラムラしてきた。はっ！まさか僕7歳にして性の

目覚め！？』」

「マジカッ！？っととやばいやばいテンション上がりすぎて口調崩れちゃった。んー？んー？んー、んー？どうするの？どうしたいの？お姉ちゃんに何したいの！？」

「『とりあえず口に螺子を螺子込んでいいかな？いいよね？』」

「あがー」

「『螺子をくわえた幼女。…新しいジャンルだね』」

「あがー」

「『そういや話変わるけどこのウサちゃんどこにあったの？家中探してもなかったんだけど』」

「がりっ…ごぐん。箱庭総合病院ってとこ。もう、みーくんったらドジッ子さんっ！多分めだかちゃんに出会えたショックで忘れてきちゃったんだね！」

「『…ふーん』」

「んー、んー、んー、んー、んー？……みーくんみーくんみーくんはさー…。振り向いてくれない相手への恋なんて無駄だと思うー？」

「『うん。』」

「そっか」

「おい」

振り向き様に、少女の頭がアスファルトに叩き付けられた

ぐしゃっ！と凄まじい音がして、アスファルトと共に血の花が咲く

声をかけた少女が、金属製のバットを再び振り上げた

「この前はアレだ。足りなかった。あたしの覚悟が足りなかった。こんなんじゃいつまでたっても他人の不幸を喜べる人間になんかなれやしない。だからこの1週間で覚悟を決めた。徹底的にアンタを潰して崩して砕いてあげるよ」

ぐちゃ、ぐちゃ、ぐちゃ、ぐちゃぐちゃぐちゃ

悲鳴があがる悲鳴があがる悲鳴があがる悲鳴があがる悲鳴があがる悲鳴が悲鳴が悲鳴が悲鳴が悲鳴が悲鳴が悲鳴があがががががががががががががががががが

そして

「……♪…～♪……――――♪～～～～♪」

歌声が、あがる

ゆらり、と立ち上がる少女…球磨川　流の姿に、志布志　飛沫は気圧とされた

「ああ、しぃちゃんかぁ…ごめんねぇ…今ちょぉっと気分悪くてねぇ…んー、んー？あれ…なんか…ごべっ」

ごぱっ、と流の口から鮮血が溢れた。それに目を見張る志布志。つい1週間前、どんなに攻撃してもダメージらしいダメージを受けなかった球磨川　流が血を吐いた

「え、ちょ、おいおい。これ肉弾バトルの流れだったろどうしたおい血ぃ吐くなよあたしまだ『致死武器／スカーデッド』使ってねーけどぉ？」

「ごべ…っちょ、ごばぁ」

「ギャグマンガみてぇに吐血で滝作ってんじゃねーよ。あーもー何してんですかぁ？おらこっち来い！お前も手伝ってくださいお願いしまぁーす？」

ズリズリと崩れ落ちた流を引き摺りながら、志布志は大声で同類を呼ぶ

「志布志さん、本当にこんなのに『引き分け』たんですか？僕でも勝てそうですけど」

ひょこ、と物陰から顔を出す蝶ヶ崎　蛾々丸。モノクルを指先で押し上げ、眉間にシワを寄せて倒れた流を見下す（みくだす）

「るせェーなぁ…。とりあえずこいつ助ける。手ぇ貸してくださいお願いしまぁすぅ…」

「…ま、いいですけどね」

出会いとしては、分かりやすかった

たまたま襖が口に出した、『昔持っていたウサギのぬいぐるみ』

それを探すために、球磨川　流は箱庭総合病院を訪れて
いつものように過負荷の少女――志布志　飛沫に笑顔で話しかけ
「上から目線で偉そうに笑ってるのがムカついた」から殴り飛ばされ
「この過負荷ちゃんが殴るのが好きなら、愛ゆえにその攻撃の全て
を受け入れましょう」となり
志布志の限界まで全ての攻撃を受けきった流が
「ごめんなさい、許してください。みーくんのご飯作りに帰らなき
ゃならないの」
と、『降参』したのだ
産まれて初めて味わう勝利に、志布志　飛沫は呆然として
そこからは『八つ当たり』だ
志布志　飛沫は今までの不満を全て『敗者』である球磨川　流にぶ
つけ
球磨川　流はその八つ当たりを耐えきった
そうして――志布志　飛沫は空っぽになった
今も志布志　飛沫は空っぽで
空っぽな容器の内壁にに僅かにこびりついた不満不幸不運だけが今

の彼女を支えている

それは――蝶ヶ崎　蛾々丸にとって許していい事態ではなかった

『不慮の事故／エンウンター』と呼ばれる過負荷は、他人に自分の負の感情や痛みを無理矢理背負わせる過負荷である

もし、もしも――

自分から我々の負の感情の捌け口になるという者がいるのなら

必死で過負荷であることから逃げ出すために得た過負荷が、過負荷であることから逃げ出すために過負荷に堕ちるという重荷を背負ったまま生きることを選んだ自分が馬鹿みたいではないか

無意味で無価値で無責任である過負荷だが

過負荷は唯一、自分のことを背負う。より正解に近いのは、『過負荷は自分のことを背負うから他の何も背負わない』のだ

簡単に言えば、自分以外はどうでもよくて

自分が良ければそれでいい

でも自分が最悪になるのは嫌だから

最低限自分の面倒は自分で看るのだ

だからだろうか

背負うべき『自分』を奪われた志布志さんが、なんとも言えず『薄っぺらく』見えるのは

だからだろうか

目の前で目から耳から鼻からから口からドロドロした真っ黒い血を垂れ流す球磨川　流が

どうしようもなく、魅力的に見えるのは

ぶつけてみたい。自分の過負荷の全てを

預けてしまいたい。自分の過負荷の全てを
抱き締めてもらいたい。過負荷である自分を
愛してもらいたい。過負荷である自分を
それが毒であると知りつつも
ふと気が付けば
『毒』の少女が、自分の足に触れていた
「『愛し恋し』・『毒刀・鍍／サムライブレード?』」
ニィイイイイイッ…っと、つい先程まで限界近く追い詰められていた球磨川　流は笑みを形作る
「あらあら困った子見ぃつけたぁ…。うふひはは?みーくんの事で悩んでたけどどうでもいいよねぇ、よく考えたら私に…お姉ちゃんでお兄ちゃんな流さんに出来ることなんて愛して恋してメチャクチャにしてメチャクチャにされることだけだもの。考えてる暇があったら独りでも多くの過負荷を独りでいっぱい愛してあげることだけだものねぇ。んーんーんー?いいよいいよいいよぉ?お姉ちゃん、ぜぇんぶ面倒みてあげる。まずは片眼鏡が気障可愛い君の名前が知りたいなぁ」
そしてアナタも愛してあげる
心の底から骨の髄まで愛して恋してメチャクチャになるまでドロドロに甘やかしてあげる

頭から口からだらだら血を流しながら、包帯がほどけピンク色の新皮を覗かす顔を、満面の笑顔に変えて

今日も、球磨川　流は独りの過負荷を口説き落とす

「……」

蝶ヶ崎　蛾々丸はしばし無言で球磨川　流を見下ろし

「ありがとうございます」

駄目だと分かっていたのに全部ぶつけた

そうして彼も空っぽになった

一２　志布志　蛾々丸（後書き）

次回予告

流＞予告編クイズーっ！

禊＞『クイズー！』

流＞はぁいよゐこの皆さんこんばんにゃ！過負荷のお姉ちゃんでお馴染みな流お姉ちゃんだよっ！

禊＞『今回はそうゆうノリなんだね』

流＞予告は３０秒しかないからちゃかちゃか行くよ！では本日の問題は！

禊＞『問題は！』

流＞２６歳ネトゲオタなヒッキーを外に出すにはどうすればいいかなっ？

禊＞『また怒らそうな問題だっ！』

流＞答えはｗｅｂで！

禊＞『既にｗｅｂだけどね』

2人＞『次回、ながしシスターまいなす3、安心院なじみ』

流＞マジレスするなら家に火ぃ点ければ外には出るよね？

禊＞『割りに合わないにも程が』

一3　都城　なじみ（前書き）

え？　微妙に予告と違うって？

…ぇっとぉ

お兄ちゃん、過負荷な子以外との約束は基本無視するよ？

球磨川　流

一3　都城　なじみ

彼――都城　王土は自他共に認める王の器を持っていた
彼の有する異常性――『支配』を支配するために、良心のために両親と離れ世界を平和にし民衆を幸せにするために。ただそれだけのために己の支配性を封印し続けた7年間。誰よりも他人のために己のことだけを実験台にし続け、彼は己の異常性を帝王学を磨き築き組み上げた
そしてついに、その日が来た
中学校の入学式。話題の新入生として代表の挨拶を任された彼は、
『そこ』こそを王の出発の場と位置づけた
よりよく生きろ
家族と友を思いやれ
幸せになれ
そんな命令を口にするつもりで
都城　王土は産まれて初めて言葉を口にした
「跪け。」
「ふざけんな」

なんのことはない

7年間の努力やがんばりもむなしく

結局彼は、己の異常性を支配することなどちっともできてなかったらしく

『最愛の過負荷』と名高い球磨川　流を相手取るには、少しばかり役不足だった

ただ単に、それだけの話だ

「んー、んー、んーん～…？つまんなぁい。みーくんがさぁ、みーくんがさぁ？こう言ったの。『お姉ちゃんとは毎日家で会えるんだから、学校の時間は少し離れていようよ。いやむしろ違う学校にしよう』って。当然反対したよ。嫌だよお姉ちゃん、みーくんと離れたくない離したくないずっとずっとずっと一緒にいるって決めたのに愛してるのに何で離れなくちゃならないのイヤイヤイヤイヤって何度も何度も何度も何度も言ったよ？でもでもみーくんがさぁ、『離れているからこそ実感できる愛が知りたいなぁ。ずっと一緒にいたから倦怠期に入っちゃいそうだし』なぁんて可愛いカワイイきゅんきゅんしちゃうようなこと言うんだもんきゅんきゅんっ！ここはお姉ちゃんらしく愛が深い所見せてあげなきゃってみーくんが言う通りに違う学校つまりここね？に入学したのはいいんだけどさぁ、ふざけないでくれない？なにそれなにそれ気持ち悪い。跪け？厨二病かにゃぁん？他の人たちもなぁんで従っちゃうのかなぁ、意味わかんなぁーい。あーヤダヤダ。っていうか凄いね都城ちゃん本当に言ったよ！？原作読んでたころからねーよって思ってたけど本当に凄いね都城ちゃん！あはっ、カーワーイーイーッ！ばかわいい！あらあらあらあらなぁにぽかんとしてるのぉ？あ、もしかして過負荷

のお姉ちゃんお兄ちゃん見るのは初めてかにゃん？あらあらあらなぁにそんなに恐がってるのぉ？うん？『支配』？『言葉の重み』ぃ？アハハハハハざぁんねぇんでしたっ！アナタ騙されちゃったのよ！アハハハハハ似てた？似てた？うふふアレ？見てないコードギアス。あーさーもよーるもこいーこがれてーってやつ。アハハハハ睨まないでよ冗談よ冗談。だってその支配っていうの人間用の支配でしょ？過負荷相手には聞かないよー。過負荷に効果のある『言葉の重み』とか使いたかったから『完成／ジエンド』修得したほうがいいよ？うん？『完成』の修得方法気になるぅ？黒神めだかと会えば分かるよ。アハハハハハなんでさっきから喋んないの変な都城ちゃん。王様の癖に無様に尻餅ついちゃってさぁ。みぃんな土下座してるから見られてないけど王様失格ぅー。うふひゃひゃひゃひゃ、そぉんながたがたがたがた震えないでよ踏み潰したくなっちゃうじゃない。しぃちゃんとかヨロコンデ潰しに来ちゃうよぅ？うん？何か言っ――やん、いきなり胸に触るとかえっちぃ。うん？どぉしたのぉ？顔色ヤバいよぉ？…あ、もしかして『理不尽な重税』かな！アハハハハハ無理だよっ！だってそれ『異常』用の技じゃん！しかもそれも本来『完成』と合わせて使うべきだし！１０割使える力を十全に使いこなせるようになってからが『異常』の本番なんだよぉ？『理不尽な重税』なら『知られざる英雄／ミスターアンノウン』も『完成／ジエンド』にジエンドれるからね！にゃっははは！お・ば・か・さぁん。所謂黒神めだか強化パッチでしかないくせにお姉ちゃん相手にしようなんてお間抜けさんっ。ん？んー、んー？もしかして聞こえてない？こりゃまた失礼、気絶しちゃってるよ。まぁしょうがないかあ、お姉ちゃんの『愛し恋し／ラブアレルゲン』を鷲掴みにしたようなもんだもんねぇ。仕方無いなぁ、保健室に運んであげるよ。…ぁ、新しい『愛し恋し／ラブアレルゲン』・『否定姫／アンダーライン』ゲット。でもお姉ちゃん、『異常』嫌いなんだよねー。使うところないよぅ。んー、んーんー、んー…みーくんといちゃいちゃしたいなぁ」

保健室で目覚めた都城　王土はそっとその学校を去り、
以後数年間、姿を消すことになる

入学式を終えた夜、流は珍しく机に向かっていた。熱心にノートに何事か書き込む姉の姿に違和感を覚えた祓が声をかければ、流はシャーペンを放り投げて振り向いた

「『姉さん、なにやってるの？』」

「んー、んー？べんきょー。今日王様に会ったからねー、ちょっと思い付いたことがあって」

「『うん、それはまぁいいんだけど、どうしてにじりよってくるのかなって』」

「ん？んー、んー…私が総理大臣になって姉弟間で結婚出来るようにするからさぁー、前払いしてぇ？」

「『あ、僕学校に忘れものしちゃった』」

「私が取ってきてあげる！ＷＡＷＡＷＡ忘れ物～♪」

「『そう？ならお願い。一年三組だから。机は僕のしかないから多

分すぐ分かるよ。中に入ってるエロ本１４冊全部お願い』」

「分かった！あと姉モノのエロ本買い足しておくから使ってね！」

「『うん、見知らぬ誰かのプレゼント用にするよ』」

「…んー、んー？…これが倦怠期？」

「『晩御飯にケンタッキーのフライドチキンが食べたいなぁ』」

「分かった！お姉ちゃん本気ダッシュで買ってくる！」

そして、

エロ本を回収し、ケンタッキーで２バレルほどチキンを買い込んだ帰り道

…ふぅん、と流は声を漏らした

「こんにちわ」

「こんにちわ」

と声をかけあう。にっこりと笑みを向け合う。流が拳を突きだし、彼女は顔面でそれを受け止めた

なのに、砕けたのは流の拳だった

「…ズルしたでしょ？」

「おいおい、非道いことを言う人だな。初対面でいきなり殴られて驚愕してる女の子にいきなりズルとか…。そもそも貴女は誰なのかな？あ、敬語使った方が良いかな？僕は１２歳、今年中学校に入学したんだけど…、貴女は何歳かな？」

う～ん、と首を傾げる艶やかな長い黒髪を持つ清楚な少女。流はそんな彼女に苛立ちながらガリガリと頭を掻く。つい最近志布志と蝶ヶ崎に割られた傷が開き、ドロリと血が額を伝う

「わっ、大変だ。血が出ているよ？良かったら治療させてもらってもいいかい？僕の家はすぐ近くなんだ」

にこり、と優しげで人の警戒心を解くような笑みを浮かべる清楚な少女――安心院　なじみに、流はギロリとドロドロした視線を向ける

「…『愛し恋し』・『真本格派魔法少女／リストカットガール』」

「お？」

づんっ、と。流が剣のように構えた既製品より１ｍは長い＋ドライバー。その尖端が、なじみの脇腹に突き刺さった

「…へぇ、僕の８０００兆近くの『異常』と５０００兆近くの過負荷、合わせて１京を超えるスキルを相手にダメージを通すんだ。…クズの割には中々だね？…ああいけないいけない。僕もまだまだ猫かぶりが下手だなぁ。まぁ、君ごときに知られた所でどうということはないんだけどね」

にこり、と微笑んだなじみは手刀でドライバーを切断。ずるりと抜き、逆に流の胸に突き刺し、そっと脇腹を撫でる。血の付いた制服も身体と制服に開いたはずの穴もそれだけで治る。治してしまう

「…ふーん。まだスキルの数を数えるスキルは持ってない、と。んー、んー…？でもこの娘も過負荷、なんだよねぇ。そっかぁ…うーん、でもなぁ…」

がさっ、と流が大事そうに抱えていたエロ本の束とケンタッキーの袋がアスファルトの地面に落ちる。流もまた、胸に突き刺さったドライバーを抜き、ぽいっと投げ捨てた。だくだくと流れていた血は、いつの間にか止まっている

「…うん、やっぱ無理。まだだってことは理解ってるよ。でもね、こーゆーのって理屈じゃないんだよねぇ。何で貴女なのかなぁ、何で貴女だったのかなぁ、何でアンタが一番最初にみーくんから本音を引き出せたのかなぁ。ごめんねぇ、貴女も過負荷でもあるから、愛せると思ってたけど…やっぱ無理。そりゃそうだよね、愛する過負荷よりも大嫌いな異常の方が多いんだもん。ごめんね、ごめんね？愛してあげられなかったよ…。しかも大部分が嫉妬だなんて…ははっ、自分で自分が信じられない。馬鹿じゃん私。…馬鹿じゃん。

お願いだから死んで？お願いお願い。お姉ちゃん、何でもしてあげるから死んで？」

「あはは…」

ふらふらと上体を揺らしながら、なじみにすがり付くように手を伸ばす流。その手を、そっと両手で包み込むなじみ

そうしてなじみは、そっと小さな唇を開いた

「台詞、長いよ」

ぽたり、ぽたりと雨が降りだした

真っ暗になった景色。ぼんやりと大の字に寝そべりながら雨で溶け出した血の塊を指先で弾いた

「――『負けた』ことは何度もあったけど…『負かされ』たのは初めてだなぁ…」

ぺっと顔を横に向けて血の塊を吐く。むくりと起き上がった流は、目眩を感じて頭に手を当てる

「…これだからジャンプは嫌なのよ…都合よくラスボスに出会い、都合悪く完全に負けて、都合よく演出状必要な雨が降って…」

「『都合よく、迎えが来る、かな？』」

すっ、と流の頭上に渡される傘。ぼやけて見えない視界に、呆れたように眉を八の字にした襖の笑みが映る

「…ん、そうだね。ついでに言うなら、あっさり恋愛フラグが立つことも…かなぁ…」

「『最近のジャンプに出てくる女の子は惚れっぽいから仕方無いよ。江迎ちゃんとか男の子に手を差し伸べられただけでポッしちゃいそうだしね』」

「アハハ…。ありそ…ん？あったような…ヤバいなぁ、あんしんいんちゃんに原作知識半分くらい持ってかれちゃったよ…」

「『原作知識ってなに？』」

「おねーちゃんのイケない秘密その1…。ヤバいなぁ、男性意識も殺されちゃったい…。でもおねーちゃんはおにーちゃんでもあるんだぜぇー。だから諦めたりしねぇぜぇ…。オトコの娘だぜぇー。みーくん好き好きちゅっちゅしてぇー…」

「『本格的に頭イカれてるね、ほら、おんぶするから乗って乗って』」

「ん…。みぃくん…」

「『うん？何かな？』」

「…私、弱いのヤダ」

「『でもどうしようもないからねぇ。諦めるしかないよ』」

「…ひっく…うぇ…うぇえええん…ぅぁあああああ…うぇぇぇ…なんで、こんな…よわ…うぇえええん…つよ、すぎ…はんそく、ズル…だよ…過負荷、はともかく…なんで、あんな異常…ズルだよ…ひぃん…ぅぇ、…えええん…」

「『お姉ちゃんお兄ちゃん』」

「ひっく…ひっく…うぇえええん…ぅう…あ、ぅ…な、に…？」

「僕、頑張るから」

一3　都城　なじみ（後書き）

禊＞『禊です。今回はお姉ちゃんが本気で凹んでるので次回予告はおやすみです』

※『愛し恋し』

ＮＥＷ↓『過負荷』と『異常』を持っている人間相手には、『過負荷』しか対応出来ない

そのため、過負荷の部分相手には勝利できる身体にはなるが、基本スペックが低いため『異常』の部分に負ける

流＞まぁ、ぶっちゃけ『あんしんいんさん』に勝てるわけないとは思ってたけどさぁー…。あーやだやだ。我ながら嫉妬のあまり暴走するとか中2かよって。まだ中1だけどさ…

閑話　球磨川姉弟（前書き）

流＞今さらの話なんだけどね？

流＞私の名前、『曲／マガリ』とか『枕／マクラ』とかにしとけば良かったなって思うの

褄＞『いきなりどうしたの？』

流＞そうすれば私たちの人生が物語だったとしたら、タイトルが

『嘘憑きみーくんと恋するまーちゃん』

で成立したんだよ？

褄＞『皆さん本当にごめんなさい』

流＞みーくんが謝った…っ！？わ、わたしなんかわるいことといったかな？

褄＞『僕は悪くない。誰がなんと言おうと悪くない。悪いのは全部お姉ちゃんだ…っ！』

閑話　球磨川姉弟

みーくんが大怪我して帰ってきた

みーくんが大怪我して帰ってきた

みーくんが大怪我して帰ってきた。

みーくんが大怪我して帰ってきた？

「よし殺そう」

「『お姉ちゃん、ちょっと待った』」

「止めないでみーくん。待っててねみーくん。今箱庭学園行けば『白虎』は売ってるはずだからそれ盗んできてーついでに『アラクネ』とかあればなんとかなるかなー場所はタイマンになるようにうちの学校に呼び出してー人吉ちゃん人質に取ってー乱神モードが問題かなぁーいざとなれば切り札切るよ私は。あんしんいんちゃんには効かなかったけど黒神めだかにはこうかはばつくんだ！」

「『はい落ち着いて』」

「はひゅん」

きゅ、と抱き締められて流の身体がへにゃへにゃと力無く禊の腕の中に収まる

「『よく分かんないけど原作知識とかいうのでこうなることは分かってたんでしょ？暴走しないって約束したじゃないか』」

「んー、んー！でもでもだってだって理屈じゃないのぉー！あの腐れ魚類兄妹ぶっちぶちにぶち殺しカ・ク・テ・イ・ネってあ、あ、あ、アーッ！ダメダメ駄目頭撫でないで和む和む和んじゃあ、あ、あ、やぁあああああー……ふぅ…ぅんまぁ仕方無いよねぇ…そーゆー運命だったわけだしぃ…？」

和んだらしい

和んじゃったらしい

ちなみにくじらは魚類ではなく哺乳類である

ぽすん、と自分より頭半分小さい姉を胡座かいた体勢で自分の足の上に乗せる禊。そこかしこに巻かれた包帯が痛々しく、それを目にする度に流の目に危険な光が宿るが、その度に禊の手がくしゃくしゃと随分伸びた髪をかき混ぜる。そうすれば、なんとも言えずほにゃん、と表情を緩ませる流。そこだけ見ればとても過負荷だなんて思えない、普通の少女だった

「みーくんみーくぅん…。そ、そろそろ頭以外の部分も撫でてほしいなぁ…なんて…」

「『ん？どこ？』」

「おっぱい」

投げ捨てた

「待って待ってよみーくぅぅぅんっ！！違うの違うの違うの私が言い出したことじゃないの性的なアレじゃないの親愛とか忠誠とかそんな意味なのぉーっ！」

「『親愛とか忠誠とかそんな意味で胸を触るなんて頭悪いこと聞いたことないなぁ。あ、もちろん僕は（頭も）悪くない』」

「ホントだもんホントだもんあらあらきちゃんとキスショットくんがやってたんだもーんっ！あらあらあらきちゃんはちゃんと頭もおっぱいも触ってたもん撫でてたもーんっ！」

おっぱいは触ってねーよっ！と世界のどこかで突っ込みが発せられたとかなんとか

「みーくんお姉ちゃんのおっぱい触りすぎっ！とか私も言ってみたいんだよぉー！」

「『…大丈夫だよお姉ちゃん、僕がどうにかして頑張ってお姉ちゃんを大丈夫にしてみせるから』」

「みーくんに良いこと言われたっ！？ぇ、お姉ちゃんこれから倒されるのっ！？」

球磨川　禊の本番は良いこと言ってから。「あぁでもでもそれはそれでアリ！SでもMでも対応出来るよお姉ちゃんはっ！」テンション高いなお嬢さん

閑話休題

頭を撫で殺して流を落ち着かせた禊は、いつもの底の見えない笑みを浮かべながら1つ1つ傷を消していく。流はそれをキラキラした目で見つめる

「んんーんー、『大嘘憑き／オールフィクション』…半端じゃなく容赦ないスキルだねぇ。使うのに神経使うでしょ？」

「『まぁそうだけど。でもまぁ仕方ないんじゃない？因果率を操る過負荷、なんてレア中のレアだしね。僕の『却本作り』を奪われたのは痛いけれど、それ以上に異常な過負荷は簡単に僕らの異常を見せつける事が出来る。僕たちは弱いからね、こっちのペースに引き込まないとなんだかんだで負けちゃうから。そういう意味では『大嘘憑き』ほど対象に嫌悪と恐怖と得体の知れなさを魅せ付ける過負荷は存在しないとも言えるね。『却本作り』はどうしても地味だし、使われた本人しか自分の身体に起こった異常を認識しないっていう欠点がある。そうなると、弱い奴が集まって群れた僕たちは、強い奴等が結ばれて生まれた集団には勝てない。僕は1人で集団を相手どれる、みたいな力を見せ付ける必要があるわけだ。一応、球磨川　禊プレゼンツ過負荷ファミリーのボス、って立ち位置だからね』」

「んー、んー…。説明台詞くどいよ？あと言ってて恥ずかしくなぁい？」

「『…』」

「痛い痛い痛い痛いいーたぁーいぃぃぃぃあああああーっ！！」

無言で流の耳を引っ張る禊。いつもは無条件で重すぎるほど想い思いをぶつけてくる流が反抗してくるのが気に食わなかったらしい。

それにしてもこの弟、ノリノリである

「あれでもちょっと気持ち良くなってきたかも…っ！？」

「『秘技、章変えリセット』」

「なんか今回無理矢理誤魔化すの多くない？」

「『僕は悪くない。全部テンションが妙に高いお姉ちゃんが悪い』」

「んー、んーんー、んーむぅ？。だってだって黒神めだかに復讐…でなくて報復…でもなくて八つ当たりさせてくれないんだもん。みーくんが悪いよ、なんで止めるのよぉ」

「『僕は悪くない。なんか今回僕のこの決め台詞多くない？まぁいいけど。真面目な話するとね？』」

「んー、んー？」

「『僕たち2人とも受験生だよ？特にお姉ちゃん。ただでさえ成績悪いのに、他校の生徒に喧嘩売りに行っちゃ駄目だよ。雀の涙ほどの役にしか立たない内申点が悲惨なことになるよ』」

「――本当にマジレスが来るとは予想外デス」

「『僕より頭良いくせに授業真面目に受けないから…』」

「私、保健室登校だし。保健の先生追い出したけど。同じ学校に過負荷の子もいないし。都城ちゃんならいたけど消えたし。むしろまともにテスト受けてあげてるだけ感謝してほしいデス。一応全教科９０点代キープしてるんだよ？カンニングしてるけど」

「『僕なんて全教科満点だよ？テスト前に先生から問題盗んでくるけど』」

それにしてもこの双子、救いようが無い

「みーくんってばそんなことしてたの？そんなのでよく生徒会長になれたねー。んー、んー、んー…？みーくんどこの高校行くんだっけ？」

「『お姉ちゃんがいない高校かな』」

「…あれ？あれあれあれあれ？まだ倦怠期続いてるみたいな？んー、

んー？デレ期は？デレ期どこにいったーっ！？」

「『三年くらいデレたからそろそろツン期に入ろうかなぁって』」

「ｏｈ……」

「『そもそもデレてもなかったけどね』」

「みーくんの括弧つけ野郎…。もっともっとお姉ちゃんとラヴィしようぜぇー…？つうかいい加減デレろよちくしょう。ちくしょうみーくんちくしょう」

「『そもそも姉弟間でラブラブしてどうするのさ。何度も言うけど僕は好きな人いるからね』」

「よし殺そう」

「『わぁ、話が最初に戻った』」

「きゃふぃん」

対処法は変わらない。頭を撫でて抱き締めればそれで良い

「うぅ、真面目な話したほうがよいのでしょうか神様…！このままではわたくしの心臓がもちません…っ！」

「『さっきは気付かなかったけどすっごい心臓ドキドキしてるね。顔も真っ赤だし』」

「ぁーぅー…んー、んー！さ、さてさて何の話でしたかな？」

「『お姉ちゃん、たまに可愛いね。ついでに傷痕消しておこうか。ばんざーい』」

「にゃぁあああああっ！ちょ、たんまたんま！みーくんの意地悪ぅうぅううううっ！お姉ちゃん初めてなの優しくしくして――縛られてるっ！？何故に！？あ、ちょ、脱がせてもいいけどなんで足まで縛られ…そうゆう趣味っ！？よし覚悟完了！バッチコイ！」

「『いや、僕は悪くない。今回本当にこの台詞多いなぁ、うっわ傷だらけ。痛々しいなぁ。ただでさえ中身が痛々しいのに。生意気にブラジャーなんかしちゃって』」

「お姉ちゃん中三なんだけどっ！？生意気にブラジャーって生意気にって！興奮しちゃうじゃないっ！」

「『ちなみにこの光景は安心院さんに生中継されています』」

「よし殺そふにゃんっ！？ちょ、何故にスカートまで脱がせ――ちょ、本当にやめてやめて心臓ヤバい過呼吸ヤバいヤバいヤバいヤバいからお願いするなら部屋の電気消して…っ！」

「『はい終了。産まれたままの綺麗な身体になりましたよー』」

「ばーぶぅー。…んー、んー？そこはかとなくほっとしつつも残念なような思いがしつつ、精神的ホモにならずにすんだ安心感と共に襲ってくる「もしかしてみーくん私のこと嫌い…？」というがっくり感…まさに過負荷なお姉ちゃんに相応しい感情が私の中でギュルギュルしてるんですケド…」

「『まっさかぁ。僕はお姉ちゃんのこと…』」

「わくわくどきどき！」

「『…で、通う高校についての話なんだけど』」

「…にょろーん」

どっかで見たような顔でがっくる肩を落とす流に構わず、禊は言葉を繋げる

「『箱庭学園から動かないでくれる？転校は勿論廃校もしないようにね』」

「んー、わか…んんー？どゆこと？」

「『お姉ちゃんは過負荷を片っ端から駄目にしちゃうからね。過負荷メンバー集めは僕に任せてくれていいよ』」

「んー、んー…駄目になんかしてないよ…？」

「『お姉ちゃんに関わって正気を保ててるメンバー。1、江迎ちゃん、ただしお姉ちゃんは露骨に避けられてる。2、志布志ちゃん、3、蝶ヶ崎くん、ただしお姉ちゃんを出会い頭にボコボコにしないと会話にならない。4、安心院さん、ノーコメント。あと僕。安心院さんはメンバーじゃないけどね』」

「…はぁーい」

不満そうだが、基本的には従順な流である。禊にお願いされた以上、

箱庭学園に入学するのは勿論退学廃校しないように無駄な努力を重ねるだろう

「『ちなみに明日から僕は旅に出ます』」

「…ぇ？」

「『旅に出ます。過負荷メンバー探しのために』」

「…ぇ？」

「『というわけで色んな学校巡ってくるよ。お姉ちゃんには悪いけど、3年くらい独り暮らし頑張ってね？』」

「…ぇ？」

「『その代わり今日は一緒にお風呂に入って一緒の布団で寝てあげる』」

「了解！今すぐお風呂とお布団の準備してくるっ！」

「『単純だね』」

翌日

「何故に目先の欲望に負けたし…」

綺麗にみーくんの痕跡の消えた家の片隅で項垂れる人がいたとかいないとか

閑話　球磨川姉弟（後書き）

次回予告

流＞はぁい、来週のながシスはー！？

禊＞『禊です。作中ではまだまだめだかちゃんの入学からそこまで時間がかかってない…大体6月くらいなんですが、そろそろ衣替えの季節ですね

下手にシャツ一枚なんて格好してるとお姉ちゃんが平然とそのシャツ強奪してクンカクンカしたりモフモフしたり裸ワイシャツしたりするので皆さん油断したりしたら駄目ですよ』

禊＞『では、次回のながシスは

日之影、初めての挫折

屋久島、黄金率Ａに破れる

真黒ちゃん、変態（同類）に会う

の三本です』

流＞それでは、じゃーんけーん、ポンッ。ウフフフー

―４　箱庭学園新入生（前書き）

流＞みーくんみーくん私のビジュアルイメージ知りたいってメールが来たよ！モテ期？モテ期？お姉ちゃんモテ期かなっ！？嫉妬した？嫉妬した？みーくんカワイイーっ！

禊＞『いや、わりとどうでもいい』

流＞みーきゅん冷たい…。んー、基本的な顔のイメージは女体化みーくん垂れ目ｖｅｒ。髪型はツインテールかな。中学生のころのめだかちゃんに対抗してみました。髪止めは普通の髪ゴムです。スタイルは悪いよ！身長もただでさえあんま身長高くないみーくんより頭半分小さいし。みーくんがロリコンだって信じてたので胸もあんま大きくないし。不知火ちゃんよりはあるけどね！一番体型近いのは…『１３組の１３人』の『上峰書子』くんかな？もう一回り大きいケド、

ちなみに髪は降ろすと腰まで届くよ

禊＞『なんで胸について説明が一番長いかな…』

一4　箱庭学園新入生

一目見ただけで通じあった
相手のことを理解した。
相手の思想を理解した。
相手の理想に共感した。
相手の夢幻を称賛した。

どちらからともなくそっと歩み寄る。周囲がやかましいが気にしない。そんなことよりも今はこの出会いを祝福しよう

「僕の」「私の」

「思想は」「理想は」

「妹・妹・妹っ！」「弟・弟・弟っ！」

「「イェーッ！」」

ぱしぃん、とハイタッチ。その際に『愛し恋し』・『死線の蒼／デッドブルー』を取得したのはご愛敬

だが、2人はハイタッチと同時に跳びすさり、相手を真正面から睨み付ける

「妹ぉ？あんな糞生意気で萌えの欠片もない媚び媚びキャラのどこがいいの？思春期過ぎたらスカートやたら短くして甘えたりお金巻き上げたりする時だけ良い顔して擦り寄ってくるし、いずれは見知

らぬ誰かに股開くことになるのよ?そんなののどこが良いのかしら」

「ふっ、馬鹿なことを…。それは妹愛が足りない愚者が妹の育成に失敗した場合のみだよ。大体スカートを短くする?ご褒美じゃないか。妹がスカートを短くするなら僕はピッチピチの革のパンツを履こうじゃないか。そしてお互いに視姦しあう。最高だ。甘えるときだけ擦り寄ってくる?かわいいじゃないか。ツンデレだね。妹はいい、清楚ツンデレヤンデレ無邪気エロ変態勇敢強気ツンツンクーデレあらゆる属性に対応出来る。だが弟はどうだい?ツンデレ弟。まぁこれはいいさ。ヤンデレ弟無邪気弟エロ弟変態弟…不協和音にも程がある!」

「見知らぬ誰かに股開く辺りはスルーしたわね…!それに家のみーくんならあらゆる属性に対応可能なんだから!ツンデレみーくんヤンデレみーくん無邪気みーくんエロみーくん変態みーくん!…ごめん、ちょっと、ちょーっと待って。興奮してきた。おトイレ行ってくるから5分待って」

「…いいだろう。僕もトイレに行ってくる。5分待っていてくれ」

5分後

「…うん、そうだね。妹もいいね…。考えてみればむーちゃんもしぃちゃんも妹みたいなものだし…?」

「…あぁ、その通りだ。妹は良い。だが弟もいい。…中学生なら弟だって妹さ…」

「賢者ってんじゃねーよ」

ずびし、と巨大な手によるチョップが2人の頭に突き刺さる。この際『愛し恋し』・『人類最強／ミス・レッド』を取得したのはどうでもいい話

「「誰だっ！？」」

「おぅ、1年13組の日之影　空洞だ。一応、学級委員やらされる予定になってるからよ、気さくに好きなように呼んでくれや」

そこで入学式の場で、他の生徒や教師の視線すらまったく意に介さず変態的な思考をペラペラ喋りまくっていた2人は我に返った

「申し遅れました、私はみーくんのお姉ちゃんで1年10組（特別普通科）の戦場ヶ原　流です。名字呼びは慣れてないので気軽に流ちゃん、流さま、流くん、流さん、流ちゃまのどれかから呼んでください。ちなみに名字は偽名です」

「うん、僕は黒神　真黒。くじらちゃんとめだかちゃんの唯一無二にして絶対的なお兄ちゃんだ。呼ぶときは愛を込めて御兄様と呼んでくれ。ちなみに既に僕は16歳だから君たちは既に年下。つまり僕の妹だ。勿論君だってそうだよ、日之影くん？」

「正気かっ！？」

「当たり前だ！さっきも言ったが中学生までなら弟だって妹…っ！つまりつい先日まで中学生だった君だって妹だっ！いや、むしろ僕より後に入学してくる子は全員まとめて妹さっ！そして君たちは既に僕の脳内では全裸だっ！」

「…駄目だ、俺にはこいつは救えねぇ…」

がくっ、と膝を付く日之影。彼とて中学生のころは『知られざる英雄／ミスターアンノウン』と呼ばれず、一部の薄ら暗い業界では有名にならなかったほどの男だ。そんな彼が初めて味わう挫折、苦悩、あまりの変態的な『異常性』が2つ、それを目の当たりにして、今や日之影　空洞という男の強靭なメンタルは折れかけていた

だが、そんな彼の肩にぽんっ、と優しく手が置かれる。視線を上げれば、酷く優しい目をしている戦場ヶ原　流の姿

「変態を救えないなら…貴方も変態になれば良いじゃない」

「いやその理屈はおかしい」

そんなパンが無ければ～みたいな口調で言われても無いものは無い。嫌な事に「ノー」と言える強さっ！それこそが日之影　空洞の『異常性／アブノーマル』…っ！

「んー、んー？なんか間違ったかな？あ、そうだ」

ぽんっ、と拳で手のひらをを打つ使い古された表現に呆れ眼を向ける日之影。そるに構わず、流はニコニコ笑いながら言う

「日之影ちゃんが『過負荷』に堕ちれば――」

「ごほんっ！」

流の言葉を遮るように咳払いをする不知火　袴理事長。しばし壇上の理事長と流の視線が交錯し、やがて流はにこりと笑顔

「とりあえず日之影ちゃんが脱げばいいと思うよ？」

「ねーよ」

「ごほんごほんっ！あー…いい加減入学式初めてもいいかね…？」

「「いいともーっ！」」

「お前らなぁ…」

変態どもの元気な返事に頭を抱える委員長がいましたとさ

「さて、さてさて皆さんこんにちわ。ここで皆さんには改めて『過負荷』というものを理解して貰おうと思うの。んー、んー？過負荷は『過負荷』だって？そんな一言で片付けてもらいたくないなぁ。まず第一に『過負荷／マイナス』と『異常性／アブノーマル』の違いについて知ってもらいたいわ。最近のお嬢さんお坊っちゃんっていうかどっかの大財閥の長女くんとかは『過負荷』を過小評価して

くれちゃってるわ。やっぱり『過負荷』と『異常性』の違い、それはやっぱり精神、あるいは心、人格ね。『過負荷』はただの狂人じゃないわ、破壊衝動に殺人衝動、そんなものはただの『異常性』よ。『過負荷』の真骨頂は『終わってる』ことなのよ。成長も無ければ進化もしない、前に進む事も出来なければその場で止まってることも出来ない。『前向きに全力で後ろに全力失踪。』誤字じゃないわよ？それが過負荷よ。過負荷は産まれた時から成長しないし、過負荷は成長しながら若返ってるもの。付け加えて言うのなら、『過負荷』は…より性格に言うのなら、うちのらぶらぶふぉーりんキュンキュンみーくんは『異常性』や『天才』といった『エリート』を潰す、なぁんて言ってるけど…

私は、『普通』こそを潰したいと思います。

以上、戦場ヶ原　流先生による『過負荷』講座その1を中止します。続きはありません」

ぱたん、と出席簿を閉じた。

「んー…んー…私のせいじゃないもん…」

そのまま膝を抱えて教卓の下に潜り込む。誰も咎める者はいない。というよりも…

人自体、いない

時刻は9時を巡った頃。入学式の翌日、1年『14』組で独り寂しく先生ごっこしていたのには訳がある

わりと単純で、『過負荷』はいるだけで『特別／特例（スペシャル）』や『普通（ノーマル）』に影響を与えてしまう。入学式の時点で流の『過負荷』に当てられて1年10組の生徒が不調を来したために、隔離されたのだ

普通（ノーマル）にしていただけで、『特例（スペシャル）』に影響を与える。恐らく隔離がもう少し遅ければ、10組の生徒の70%は退学していたことだろう。

『球磨川姉弟』クラスの過負荷はそれだけ影響力が高い。そのため、彼女には担任教師すら付けられずにひたすら自習中なのだ。といっても基本的に転生者である彼女は高校でする履修科目は一通り理解しているのだが

「んーんーんー…私ぃ？私が悪いの？みーくんに怒られるぅ…嫌われるぅ…ぅぅぅみーくんみーくんみーくん会いたいよぅ…怒ってよぅ、駄目なお姉ちゃん怒ってよぅ…。みーくんみーくん大好き好き好き好き罵ってください」

「変態がいる…」

「!?」

聞き覚えの無い声に慌てて教卓の下から這い出て見れば、全裸の少年が呆然とこっちを見ていた

全裸の少年がこっちを見ていた

全裸の少年が流を見ていた

全裸の少年ぷらんぷらん

「変態がいるっ!?」

「変態に変態って言われたのか…」

感慨深い、とか呟きながら少年はやたらぴちーっとした水着を履いた。「これがいわゆる深夜番組的な水泳大会~ポロリしかないよっ!~…なのっ!?侮れない…!?」とか戦慄する流。基本的にアホである

「…ま、アレだな。とりあえず金くれや」

「んー?」

「女の裸を男が見たら慰謝料だなんだって金払わねーと駄目だろ?男の裸を女が見たって金払わねーと駄目だろ。男女平等なんだからな」

ならこんな所で脱ぐなと突っ込みたい流だったりしたのだが、彼女はコレで一応真っ当な『過負荷』のメンバーである。常識的な発言したら敗けだ

「…ちなみに俺がこんなところで着替えてたのは現在競泳部が部活として認められてねーから部室なんかない、当然更衣室なんか使わせて貰えねーから空き教室で着替えてたんだ。別にこうやって難癖つけるために全裸になったわけじゃねぇ」

「…そういえば表札出してなかった」

1年14組は急遽作られたクラスだったので当然表札なんか作られてなかったりする。というか不知火理事長も私に関わりたくないんじゃね?と大正解な推理

「んー、まぁいいや。好きなだけ持ってっていーよ」

ひょい、と通学鞄を少年に投げ渡す流。少年はあっさり自分の要求が通ったことが不思議だったが、とりあえず貰えるものは貰っておこうと鞄を開け――絶句した

「足りる?全部持っていっていーよ?それで目の前から消えてくれるなら」

邪気のない笑顔でにこりと笑う流に、思わず少年――屋久島は流の鞄を掻き抱いた

鞄の中には金がいっぱいに詰まっていた

今にも飛び出さんばかりに詰め込まれた札束、金の延べ棒に何故か

小判、テレビで見たことあるようなデザインの大粒の宝石は勿論、何故かどっかの博物館にでも寄贈されてそうな年代物の短刀まで入っている

「…ほ、本当に…貰っちまうぞ…？」

震える声で訪ねる屋久島に、流はどうでもよさそうに「んー、いいよ？」と返す

思わずぶるり、と身体を震わせる屋久島。人間、大金を前にするとまともな思考が出来なくなるモノだ。まして彼は、人一倍『大金』というものを神聖視している。これだけあれば孤児院に仕送りして種子島と喜界島に新しい制服買ってやってガキ共とまとめて美味いもん食いに行って――いやいや待て待て落ち着け俺罠だ罠だよだってありえねーじゃん。と思考がぐるぐるぐるぐる堂々巡り

そんな中、ぽんっ、と流が手を叩いた

「みーくんいなくて寂しいし、暇潰しには丁度いいかも。みーくんの真似するだけだけど」

にこにこ笑う流は、未だに金を抱えたまま呆然と流を見つめる屋久島に笑顔を向けた

「ねぇ、君。またお金あげるからさー、私の言うこと聞いてくれない？」

「！！」

またお金あげるから。その言葉は屋久島の心にぐさりと螺子込まれた

「あのねー…

破壊臣って知ってるぅ…？」

一４　箱庭学園新入生（後書き）

神＞平凡な大学生を転生させた神です

神＞…せっかく与えたチート能力をまったく活かして貰えません

神＞ちなみに与えたチート能力はこれです

？、黄金率Ａ

作中で唯一使われてるスキルです

流＞お陰で破壊臣ごっこできまーす

神＞？、『型月のあらゆる魔眼を使える程度の能力』

流＞…型月って何？

神＞型月知らんとかまじ無いわ。

？、ラカンの５０倍の気、ナギの５０倍の魔力

流＞魔力（笑）気（笑）

神＞まったく信じてもらえてねー件

？、道具作成Ａ

流＞はっ！このスキルがあるから私は1歳の頃から料理が出来たんだね！

神＞それ道具じゃねーから

？、超壊れ性能なリリカルなインテリジェントデバイス

流＞…？んー、んー、んー…？あ、分解して萌えるゴミに出した。みーくんがＡＩ萌えに目覚めたら困るもん

神＞ｏｒｚ

流＞神様が落ち込んだところで恒例の次回予告ーっ！

屋久島＞なんで俺がここに…

流＞みーくんいないから。独りで喋り続けるとか無理。次回のながシスはーっ！？

屋久島＞…ぇ

流＞うん？

屋久島＞じ、次回マイナス5、フラスコ計画

流＞…ぇ？

屋久島＞ぇ？

流＞…あれ、あと3年後じゃないの？まだめだかちゃん入学まで時間あるよ？

屋久島＞いや知らんよ

―5　フラスコ計画（前書き）

流＞フラスコ計画始まったよーっ！

流＞まぁ私には関係ないケド

流＞それより質問のお便りが来てるよ！

『現在の【愛し恋し／ラブアレルゲン】のバリエーションのスペック教えてください』

だって！

いいよいいよー、お姉ちゃん教えちゃうよー

『愛し恋し』・『否定姫／アンダーライン』

他人からの肉体干渉を否定出来る身体になる

都城ちゃんの圧政も暴政も通じないから対等な関係を築ける訳だね！

『愛し恋し』・『真本格派魔法少女／リストカットガール』

あらゆる未来の可能性から、その時必要となる身体にジョブチェンジ出来るのだ！

あんしんいんさんは過負荷一杯持ってるからね

『愛し恋し』・『死線の蒼』

解析不能…というか理解不能になる

過負荷の少年少女は元から理解不能だけどねっ！

『愛し恋し』・『人類最強／ミス・レッド』

『日之影　空洞』と全く同じレベルに強くなる。ただし心は『過負荷』のまま

同じくらいの実力者だったら『知られざる英雄』相手でも目を剃らしたりしないのよ？

流＞以上が現在のお姉ちゃんの過負荷でしたー

流＞本編には関わってこないけどね！

流＞あとおまけー

『愛し恋し』・『毒刀・鍍／サムライブレード？』

過負荷をぶつけたくなる身体になる

蛾々丸くんたら甘えん坊さんっ！

15　フラスコ計画

英雄ごっこ、と
彼女はそう言った
毎月お金をあげるから、苛めの主犯格や不良を片っ端から潰せ、と
彼は金のためなら何でもする、とは言ったものの、誰かを傷付けたことなんかなかった。例え傷付けたとしても、それは自分だった。
『人間の命は金より軽い』。その持論に、他人の命までカウントしたことはなかった
あくまで過去形だ
悪魔で過去形だ
悪魔に唆されて、過去形になった
彼は正直、喧嘩は苦手だった
だから引きずり込んだ
自分の土俵に
水中に
何人も溺れさせた。

種子島と喜界島の顔が、見れなくなった

何人も窒息させた。

孤児院の仕事がずっと楽になった

何人も絞め落とした

孤児が増えた。金が足らない

英雄ごっこ

何のためにやるのか分からない金持ちの道楽

けれどそれは、確実に屋久島を追い詰めていって

ある日、限界を超えた

「2年11組の屋久島だな?」

見上げる程の巨体。押し潰されそうな程の威圧感。凄まじい、と思った。思っただけだった。それ以上に嬉しくて、それよりも恐かった

「――これより日之影　空洞による生徒会を執行する」

屋久島は、笑ってソレを受け入れた

英雄ごっこ

あくまで屋久島が――彼女がやりたかったのは、『ごっこ』遊びだ

彼女の弟がやったのは『破壊』。だったら『救済』してみようか。

と。対して深く考えたわけでもなく、右の反対は左、みたいな単純な思考で極々自然に彼女は屋久島に『救済』を命じた。

「ちょっぴり偉くなったような気分でわくわくっ！みーくんの視点で色々やってみよーっ！」等とたわけたことをほぞきながら、彼女は金を屋久島に渡す

彼女は屋久島が『英雄』になれるなんて欠片も考えてない。暇潰しだ。暇潰しのために、大金をばらまいた

だが、『英雄ごっこ』で救われた者たちから見れば、間違いなく屋久島は、英雄だったのだ

しかも、『知られざる英雄』とは違う。忘れられることもなければ、

疎まれることも、無視されることもない、実在する英雄だった

それは――少なからず、生徒会長になったばかりだった日之影　空洞の胸に楔を打ち込んだ

時期も悪かったのだろう。丁度その頃、唯一と言ってもいい『目の前にいれば何となく日之影　空洞の存在が感じ取れる』存在だった黒神　真黒がフラスコ計画のために、ほとんど学校に来なくなっていた

『英雄』は孤独だった

英雄よりもより多くの人間を救い助け護り戦ってきたというのに、『英雄』は孤独だった

英雄が『英雄』によって討たれ倒れたとき、皆が悲しんだ。中には直接入院した英雄を見舞いに行ったものもいる

『英雄』が傷付き倒れたとき、『英雄』はたった独り、心だけを支えに己の身を奮い立たせた

英雄が英雄をやめた時、英雄を支持するものたちは喜んだ。もう彼が傷つかなくてもいいのだと

『英雄』が『英雄』をやめるとき。彼は全ての人から忘れられ、より一層孤独になるだろう

日之影　空洞の『異常性／アブノーマル』は常識はずれの『強さ』

けれど、彼のメンタルは…あまり『硬く』ない

彼女は、メンタル的にも『強い』彼がゆっくりと腐っていくのを、
楽しそうに見ていた

まぁ

所詮暇潰し、だが

「りんるらら～♪るりるらら～♪ぼっちぼっちの日之影くぅ～ん♪らんらんるー♪」

歌いながら傘をクルクル回す。ちなみに天気は雨――ではない。快晴だ。輝く太陽に青葉が生い茂る。流は楽しそうに笑いながら、手の中で藍色の傘をくるくる回す。ついでに自分もくるくる回る。くるくるくるくるくるくる。長めのスカートの裾がふわりと持ち上がり、白い肌と肌に張り付く濃紺のスパッツをチラ見せする。見る人間もいないが

場所は箱庭学園の時計塔、の屋上。フェンスどころか手摺もない危険な屋上で、目を瞑ったままくるくるくるくる。実に楽しそうくるくる回り――

「――うェ、酔った」

一周どころかくるくる回って阿呆だ

しばらく「おぇー…うぅ、スカ趣味ないのにぃ…」とか踞っていた流だったが、ふと視線を感じて振り返る。誰もいなかった。アレ？

首を傾げつつ立ち上がり、もう一回くるくるくるくる。傘と一緒にくるくるくるくる

「ひーまーまんまんまー♪ひままーまー♪古賀いたみはガチレズー♪ひままーんまー」

「今凄い失礼なこと言われたね！」

ぴょんっ！と屋上の端から飛び上がってくる１年１３組の古賀　いたみ（百合）

「レズじゃないよっ！名瀬ちゃんへの愛は愛だけど恋愛感情は…恋愛感情は…恋愛感情は…？」

「んー、んー？気持ちは分かるよ？私も血の繋がった実の弟に恋愛感情抱いてるし」

「あんまり聞きたくなかったかなっ！？やめてよそんな気軽なノリでレディコミみたいな設定暴露するの！」

恋愛感情はない、言い切れなかった古賀が悪い

「私は２年１４組の戦場ヶ原　流でーす。気軽にお兄ちゃんって呼んでね？ちなみに名字は偽名よ？」

「性別がおかしいっ!?あと平然と偽名って言うっ!?偽名にしてもなんでそんな物騒な名字つけ――」

言葉の途中で古賀はがちり、と口の中に発生した硬い感触に驚愕。恐る恐る視線を下げれば、口の中にはホッチキス

「ガハラさん馬鹿にするとファンの方にガチャコン、ってされるわよ?」

きょとん、とした表情で、「私今どこからホッチキス出したんだろ…?」とか首を傾げる流。古賀は「なにこのひとこわい」とか考えながらこくこく頷く

「うんうん、それでよし。で?貴女は誰かしら?無駄におっぱい大きいゲチャクソムカ（ガチャコン、）つくお嬢さんは?」

「～～～～～ッッッッ!!」

「あ、ごめんね?巨乳見るとつい…。志布志ちゃんも育ち始めたころはよくギチギチしたなぁ…。今はもう諦めたけど」

ばっ、と地面を蹴って距離を取る古賀。涙目で針が折れたホチキスの芯をぶちぶち引っこ抜き、全力で憎しみを込めて流を睨む

「痛ぅ～…。やっぱり必要以上に接近するんじゃなかった!なぁにが『フラスコ計画最大の障害』よ!あんたなんか大っ嫌い!なんだったら今すぐ私が今ここで潰してあげ…って話を聞けぇえええええええっ!!」

「ほぇ？」

くるくるくるくる回っていた流がぴた、と動きを止める。長いツインテールがくるくる、っと慣性に従い彼女の身体に巻き付いた

「なんなのよアンタ！昨日から観察してたら学校来ても歌うか踊るか寝るか散歩するか…１３組のあたしが言うことじゃないけど学校に何しに来てんのよ！？っていうか何がしたいのっ！？何のために生きてんのよっ！？」

古賀の怒りの声に、流は首を傾げた

「――ごめん、言ってる意味が分からないの。そもそもさぁ、生きる意味ってなに？良いこと言ってあげるわ。人生に生きる意味を求めるのは間違ってるわ。人生を生きたからこそ、意味のある生になるのよ。だから私は人生の意味を『過負荷を愛した』ことにするために生きてるの。…で、貴女は一体誰かしら？…あ、名乗らなくても良いわよ？『普通／ノーマル』には興味ないもの」

良いこと（？）を言ったとか、意味が分からないとか、そんなことはどうでもよくなった

『異常性／アブノーマル』古賀　いたみは、『普通／ノーマル』から一歩踏み出すためにあらゆる普通を捨て、『異常』となった女だ

その古賀に向かって、目の前の女はなんと言った？

『普通／ノーマル』？よりにもよって『普通／ノーマル』？

そりゃ、確かにフラスコ計画は未だ中途で、完成も完結も見えてい

ない、お先真っ暗だ。だが、その成果は少しずつ出てきてはいる。
そのたびに彼女は苦痛を伴う『改造』を受けてでも『完璧な人間』
になろうと努力しているのだ

目の前の女は――今、古賀と、古賀の親友を侮辱した

「許さないっ！」

激昂をそのまま叩きつけるように――古賀　いたみは全力で戦場ヶ
原　流を蹴り付けて

当然のように、戦場ヶ原　流は屋上から落下した

「あれ？強…っ」

落下した

落下した

落下した

っつか、落ちた

「…へ？」

ぐちゃ

「…ぅわ、本気で死んでた?」

「『死んでた死んでた』」

「マジかー…。あんしんいんさんに会ってきたよー」

「…『…大丈夫?』」

「そぉんな恐い顔しないの。大丈夫大丈夫。『愛し恋し』も無事だし、原作知識も……アレれー…?んーっとんっと…駄目だ。8、9巻とちょっとしたシーンくらいしか思い出せない」

「『よく二冊分だけとはいえ守りきったね。偉い偉い』」

「やーんキュンキュンしちゃうっ!…ところで身体が動かないのって」

「『死後硬直』」

「わぁ、すってきぃ…。やっぱいくらいテンション上がってきた…っ！凄い凄い間接がみちみち言ってるぅーっ！！」

「『元気だなぁ。バラバラになった直後とは思えないよ。後で名瀬ちゃんにお礼言うんだよ？お姉ちゃんの身体を【人の形】に整えてくれたのは彼女だから』」

「了解！」

「『ちなみに伝言

古賀ちゃんに関わらないでください。古賀ちゃんを許してあげてください

だって』」

「どゆこと？」

「『古賀いたみさんだっけ？脳味噌改造してお姉ちゃんを殺した記憶消したんだって』」

「どうでもいいね。『異常もどき』は放っとくよ」

「『お姉ちゃんのそういうところ、嫌いじゃないよ』」

「――――――」

「『ん？お姉ちゃんどうし…死んでる』」

「またあんしんいんさんに会ってきたーっ！？なんかすっごいドキドキし過ぎて心臓止まったかと思った！あとなんかあんしんいんさんに呆れられた！ゴミを見るみたいな目で見られた！」

「『…身体は動かないでしょ？お風呂にいれてあげるよ』」

「マジか！？ちょ、やばいまたなんか心臓止まりそう…っ！！」

「『名瀬ちゃんちゃんと直してくれたのかなぁ…？どうせなら脳味噌も直してくれれば良かったのに』」

「くっ、今は別なこと考えて気をまぎらわせなければ…っ！…ってかなんでみーくんいるの？みーくん旅に出てたんじゃ？」

「『お姉ちゃんのお葬式のために帰ってきたんだ』」

「んー、んー…？白装束に着替えた方がいい？みーくんって和服の方が好き？そういや喪服でデートしてほしいんだっけ」

「『お姉ちゃんは好みじゃないからいらない』」

「…心臓、止まりそう」

「『じゃあ、お風呂行こっか』」

「心臓止まっちゃう！いやんいやんっ！お姉ちゃん血塗れで恥ずかしい！」

「『その内馴染むよ。駄目なら名瀬ちゃんに頼ろうね』」

「んー、んー？今度お礼しに行くー。あと箱庭学園に過負荷よりの『異常性』結構いたから目星つけといたー…ってちょっ！？お姫様だっこ恥ずかしいデス！」

「『いいから脱いだ脱いだー。ちなみにどんな子？』」

「やーんっ！孤独な日之影ちゃん。ぶっちゃけ切っ掛けあれば墜ちるかも。新入生では不幸受容な名瀬くんとぉー、自己緊縛の宗像ちゃん。名瀬ちゃんはあっさり適応しそうで、宗像ちゃんは一人殺せばズルズル堕ちてきそう。新入生にはあんまり期待出来ないかも。でも日之影ちゃん堕ちれば相当強い過負荷になるよー」

「『いらない』」

「そっか」

「『そんな心が強い人たちは、【過負荷／マイナス】だなんて言えないよ』」

「ごめんなさい」

「『うん』」

「嫌わないで」

「『うん』」

「大好き」

「『うん』」

「…ぎゅってして？」

「『その前にパンツ脱ごうか。お風呂入れないよ』」

「はぁーい」

―5　フラスコ計画（後書き）

流＞いやー、『異常もどき』にいつもの対応したらダメだね、『普通／ノーマル』に怒られちゃったよ、『愛し恋し』も起動しなかったし

流＞それはともかく次回予告！

禊＞『毎回毎回時間がポンポン飛ぶこの作品ですが、次回はついに原作突入』

流＞黒神めだかの参戦ですわくわくっ！

禊＞『僕が転校するまであんまりいじめないであげてね』

流＞とりあえずめだかボックスにえっちな本いっぱいつめとく

禊＞『悪質だね。では、次回―6、めだかボックス』

流＞次回も愛して恋しちゃうぞ☆

禊＞『決め台詞が欲しいのは分かるけど、無理しちゃ駄目だよ』

―6　第９８代生徒会長（前書き）

流＞またまた質問のお便りだよ！

流＞ふむふむ、気になる？気になる？

『流の原作知識はどこまであったの？現在刊行してる分しか無かったなら、あんしんいんさん原作知識持っていっても無駄にならない？』

とのことでしたー！

流＞答えは『過負荷』編終了まで、です。みーくんと黒神めだかの決着までだね。その後の後処理的なのは知らないの。何であんしんいんさんはそんなもの毎回持っていくのかなぁ？ぶっちゃけあんしんいんさんには意味ないよね。お姉ちゃんにも分かりません

なじみ。＞ははっ、変なこと聞く人だなぁ。そんなの簡単じゃないか

僕以外の人間／クズが、『神＝読者』視点で世界を見たことがある、だなんて…許せるわけないだろ？

まぁ、まさか黒神さんが本当に『ジャンプの主人公』だとは思ってなかったけどね

これ、本当に黒神さんを敵に回したら勝てないなぁ。ははっ

やっぱり流さんは馬鹿だね。勝てるわけないのに挑むんだから。救いようがない。ああ、過負荷を救おうっていうのが間違ってるのか。くくっ…

流＞…なんか凄い寒気する。どうにか『過負荷』編はある程度護れてるけど、もう原作知識は役に立たないんだよねー

流＞まぁ、むーちゃんの件とか…大切なことは忘れないよう、頑張るけどね

一6　第９８代生徒会長

『世界は平凡か？
未来は退屈か？
現実は適当か？
安心しろ。それでも生きることは劇的だ！
そんなわけで本日よりこの私が貴様達の生徒会長だ。学業・恋愛・家庭・労働・私生活に至るまで。
２４時間３６５日、私は誰からの相談でも受け付ける！』

なんてなぁんて『主人公・黒神めだか』宣言している体育館の屋根の上で、ぴしっ、と右手を頭の高さに、左手を腰より下げ、上体を倒した――有り体に言ってい天地魔闘の構えで静止している少女がいた

「私の本当の戦いはこれからだ…っ！めだかボックス…完っ！」

「お前は何を言っている」

すちゃ、と颯爽登場とかしちゃう銀河美〇年のポーズに切り替えながら彼女――戦場ヶ原　流は、くるりと振り向いた

「はぁい日之影ちゃん、ビフィズス菌採ってるぅ？」

「なんでビフィズス菌だよ…」

心底呆れたような顔をしながら、日之影は女豹のポーズに切り替えて胸元を開く流の頭にチョップ。こいつが誘ってるとか思ったら負

けなのだ。だって流は基本子供だから

それでも僅かに見えた薄水色と白のコントラストに顔が赤くならないように自制。『英雄』だって思春期なんだから仕方ない

「んー、んーんー、んーふふふふんっ♪」

「ご機嫌だな、どうしたよ」

「んー、んー？原作始まったからねー。あと…ご、ろく、なな…三ヶ月弱我慢すればみーくん帰ってくる！」

「ああそうかい。お前さんがブラコン暴走させないか今から心配だよ俺ぁ」

噂に聞く弟が、ねぇ。と嘯く日之影。雲仙姉弟の姉弟喧嘩を学校でやられた時の怪我を思い出してげんなり。げんなりしつつもコロコロ屋根の上で転がり出した流の首を掴んで止める

「残念だったね！誰も！誰一人もこの私を捕らえることが出来ないっ！遅い遅い遅すぎるぜハーハァッ！日之影ちゃんには――」

「ああはいはい。落ち着け落ち着け。いて、いてて。引っ掻くんじゃねーよ。妙にいてぇし」

「最後までクーガーさんやらしてよっ！痛いの当たり前なの！自分で自分のこと全力で引っ掻いてるのと同じだからね！…んー、んー？ところで最近よく遊びに来るけどどうしたの？」

その質問に言葉を詰まらせる日之影。言われる程自分は流に会いに

来ているだろうか。…いやいやそうでもないだろ。精々3日に1回…ってあれ、多くね？

「ぁあー…いや、ほら、生徒会長辞めただろ。だから時間が空いてな。暇だから問題児の面倒見るくらいはしようかと思ってな」

「ごろごろにゃー」

「聞けや」

手の中から逃げ出してじたばた暴れだす流を捕まえる

「ぅぅぅみーくんみーくんみーくん会いたいよー…なんで私の隣にいるのは筋肉なのよーあああもうみーくんのぷにぷにほっぺたにちゅぅーってしたいよぉー…」

「駄目だ病気だ」

しばらく写真（恐らく『みーくん』の物と思われる）に頬擦りしたりちゅーしたりぺろぺろしたりしてた流だったが、しばらくすると落ち着いたのか、ぐりん、と気味の悪くなる動きで日之影に視線を向ける

「ようするに寂しいから遊んで欲しいのね？」

「俺は犬か」

「しょうがないなぁー。　遊んであげるよ。まだ日之影ちゃんは過負荷とは言えないけど、今の日之影ちゃんならいずれこっち側に来るでしょうしね」

ああん?と首を傾げる日之影。いつも意味の分からない妄言をペラペラ喋りまくるから大抵の話は聞き流しているのだが――なんというか、今の流の言葉は無視できない何かがあった

「日之影ちゃん日之影ちゃん、『破壊臣』って知ってるぅ?前にもやった遊びなんだけど、結構楽しかったから日之影ちゃんも一緒に――って、あ」

ぴた、と流が動きを止めた。そして、じぃ…っと1点を見つめる。その口元が、にぃいいいい…っと嬉しそうにつり上がった

「ごっめん日之影ちゃん、私用事出来た!もしどうしても寂しかったらメールしてね!」

「ちょ、待てお前っ!」

ぴょんぴょん飛び跳ねるような足取りで、屋根の端に設置された縄梯子に駆け寄る流。「んしょ、んしょ、」と苦労して降りていく流を見送り、呆然とする日之影

「…お前、携帯なんか持ってたのか…」

あと降りたいなら俺が抱えて飛び降りてやったのに。とか考えながら日之影　空洞は人知れず3年13組の教室へと向かった

「――全長２６３，０メートル、高度６万フィートをマッハ２で飛行！インテル入ってうぼぁ」

「チビ可愛い『過負荷／マイナス』幼女ーっ！！」

とか叫びながら１年１組に突っ込んできた先輩は、不知火に抱き付きながら椅子と机を巻き込んでどんがらがっしゃんと転がった

「…なんだこれ」

ぽかーん、と目の前で起きた事態に呆然とする人吉　善吉。その後ろから、すっ、と不知火の薄い胸に頬擦りする女生徒に近付く少女

「ふむ、何事だ？」

「うぉっ！？お前いつの間にっ！？」

ご存知我等が主人公、黒神　めだかである。善吉を勧誘に来てみれば、とんだ場面に出くわした物だ。とめだかは扇子を閉じた

「いっつつぅ～っ！いったいなんだーっ！？ってか人吉助けろーっ！」

「ちっぱいちっぱい！私よりちっぱいだよ久々に見た！むーちゃんとかアレで意外と胸あるから嫉妬してたんだよねっ！あばらがほっぺにグリグリ当たるよー！」

「人吉助けてェーッ！！」

『あの』不知火が本気で助けを求めている事を察し、慌てて助けに入る善吉

「お、おう、あ、あんた何だ?不知火から離れ――っ！?」

だが――。不知火の胸（薄）から顔を上げた女生徒、戦場ヶ原　流の『顔』を見て、絶句した

「…むっ、」

同じく表情を凍らせるめだか。だが、同時に気付く。彼女は『女生徒』なのだ。『ヤツ』ではない、と

流は流で「あ、ヤベっ…」みたいな顔をして、不知火を抱き上げて教室の出口付近まで下がる。

そしてニヒルに笑い、

「ふっ、今はまだ名乗るときではない…。サラバだ」

がつん

扉にぶつかった

…両手で抱えられていた不知火が、そっと、無言で、扉を開けた

「…ふっ、今はまだ名乗るときではない。サラバだ」

（やり直した…だと…っ！？）

全員が驚愕する中、抱き締められていた不知火は、そっと、無言で、その腕から脱出する

「…あたしこれからお爺ちゃんに呼ばれてるんでェー…後にしてくれますぅ?戦場ヶ原セ・ン・パ・イ」

「……また来るから今度は遊んでね?バイバイ…」

とぼとぼと盛大に肩を下ろして去っていく流。チラ、チラ、と振り替えって不知火に視線を送るが、つーんっとそっぽ向かれる。「ぐすん」と涙目で鼻をすすりながら廊下の向こうに消えていく戦場ヶ原センパイ

『……』

なんだこの罪悪感

1年1組に気まずい沈黙が流れる。「…扉、閉めない方が良かったか…?」とか扉のすぐ近くにいた生徒が首を傾げる

「ごほんっ!」

そんななか、無敵の生徒会長は咳払い。びくっ、と全員がそんな彼女に視線を向ける中、凛っ!と書き文字を背負ってめだかは善吉に言う

「というわけで善吉!ああいう哀れな生徒を救うためにも生徒会に入らないか?」

(先輩を哀れって言っちゃったーっ!?)

「…仕方ねぇな。入ってやる」

（哀れな先輩の為に入っちゃったーっ！？）

驚愕する1組の生徒の内心はさておき

（…あの顔。間違いなく『ヤツ』の関係者だろ…。くそが、三年前に決着が付いたんじゃ無かったのか…？いや、んなこたぁ関係ねぇ。今度こそ俺がデビルかっこよくこいつ…めたかちゃんの身体も心も守ってやりゃあ良いだけだ）

人知れず決意を固める善吉。今まで散々嫌がっていた善吉があっさりと生徒会に入るのを了承したのを訝しげに思いながらも、めだかは嬉しさを隠そうともせず善吉に抱き付いた

「さすが善吉だっ！大好きだぞこの照れ屋さんめっ！」

「こ、このデビル恥知らずがっ！人前でぽんぽんぽん抱き着いたりアレしたりするんじゃねぇーって何回言やぁ分かるんだよ！？」

「何をいうか！我々の関係は何一つとして隠す必要もないほどに清廉潔白！見せ付けてやれば良いのだ！」

「うだぁーっ！！不知火っ！助けてくれぇーっ！」

「あひゃひゃ☆任せて人吉っ！撮影はしとくからさー」

「駄目だ悪化した！」

ギャーギャー騒ぎだした馬鹿共に呆れながらも爆笑し、携帯のムービー機能で撮影する不知火。無論最高画質だっ！

（…にしても予想より遥かに接触早かったなぁ…。隠しきる自信はあったんだけど…。『最愛の過負荷』は伊達じゃないってこと？んー、今の生活それなりに気に入ってんだけどねぇ…。人吉の反応も気になるしぃ）

不知火はイチャつく幼馴染みーズになんとなくもやもやっとした感情を抱きながら、とりあえず戦場ヶ原センパイにはご飯奢ってもらおう。と決めた

「黒神、自分の教室行け」

1年1組には、普通にＳＨＲがあります

「んー、んー…久々に会った過負荷ちゃんだったからはしゃぎすぎちゃったよー。…でぇもちょっと困っちゃったなぁ。不知火ちゃん、んー、んー？…んー…いーちゃん…ヤバイかな？半袖…はんちゃん…はーちゃん…いーちゃんでいいや。まさかいーちゃんがあそこま

で『普通／ノーマル』に近くなれるとわ…予想外だったなぁ…。うぅ、雰囲気とかもう普通に『普通』だったよ…。でもあの子も過負荷ー。あの子も『過負荷／マイナス』～…！！」

うんうん唸りながら自己催眠にかかる流。と、そこで携帯が鳴る。無機質なプルルル、という呼び出し音が、なんとも言えずアンバランス

「はぁい、もしも」

「『あれ？元気ないね』」

…思考停止すること二秒。つい先程まで憂鬱そうだったのに、背後に薔薇の花を咲かせながら嬉しそうな笑顔になる流

「みーきゅ（ぶつ）」

…リダイヤル。無駄に緊張しながらコール。コール。コール。１３回目にしてようやく繋がる電話

「…も、もしもし…ククク球磨川　にゃがしれふがみーくん（はぁとぷりぷりぷりてぃらぶ）ですかっ！？」

「『お姉ちゃん、相変わらず電話苦手なんだね。あと名前の後ろに不快な感じがしたんだけど』」

「ご、ごめんね。噛みました」

「『いいや、わざとだ』」

「かみまみた」

「『わざとじゃない…？』」

「噛んでいい？下半身。むしろ舐め」

「『だが断る。そんなことより今日めだかちゃん見たんでしょ？どうだった？』」

「…おっぱい大きい」

「『僕はお姉ちゃんの手のひらサイズにも需要はあると思うよ』」

「えっ！？うそっ！？それって間接的な夜のおさそ」

「『僕以外に』」

「…みーくんの意地わるぅ…これじゃ蛇の生殺しだよぉ…。中学３年のころから覚悟完了してるのにぃ…」

「『そんな覚悟ドブに捨てちゃえ。んー、でも、思ってたより冷静なんだね』」

「んー、んー？何がー？」

「『めだかちゃん前にしたら暴走するんじゃないかと思ってたから』」

「しないよー。精々めだかボックスに炸裂弾仕込んだくらい。雲仙くんの荷物から盗んできたヤツから私だってバレないよ！」

「『…遅かったかな？まぁ、めだかちゃんなら大丈夫か』」

「えへへ…」

「『？。どうかした？』」

「みーくんみーくんみーくんってば私のこと心配して電話してきてくれたんだよね！やんやん照れるっ！！これはもう結婚するしかっ！」

「『そりゃね。たった1人のお姉ちゃんだもん。心配くらいしたさ』」

「…へ？」

「『うん？ああ、またデレてるだけだから気にしなくていいよ。3年毎にデレ期とツン期があるんだ。じゃあね、お姉ちゃん。あ、この電話解約するからもうリダイヤルしても無駄だから。僕がそっち行くまで問題起こしたら駄目だよ。無駄に心配だから』」

ぷつっ、ツー、ツー、ツー、

空しい合成音を発する電話を耳に当てたまま

流は顔を真っ赤にしたまま、体育座り

膝に顔を埋め、耳から首から真っ赤にしたまま、

「急にデレないでよぉ…」

嬉し泣きしそうな声で、泣き言を溢した

－６　第９８代生徒会長（後書き）

次回予告

流＞…いやいやいや無理無理無理。今そういうテンションになれない

めだか＞ならば私の出番だなっ！（凛っ！）

流＞呼んでないしっ？！

めだか＞日々生徒会長として忙しい日々を送る９８代生徒会っ！

流＞勝手に進めやがるし！？スイートプ○キュアのピンクの方のポーズだしっ！？

めだか＞そんなある日！部費獲得水中運動会が開催されるっ！皆が思い思いに働く中、そいつはついに現れた！

流＞ちょちょちょっ！次回予告っていうかっていうかっ！！ネタバレっ！

めだか＞『生徒会』と『過負荷』が交錯するとき…今物語がはじまる！（凛っ！）

流＞乗っ取られたーっ！最後パクりだしぃーっ！スイートプ○キュアの白で金の方のポーズだしぃーっ！もーっ！だからこいつ嫌いぃいいいっ！みーくんに会いたいよぉーっ！！

めだか＞…そも一１の次回予告で貴様もパクっただろうに

流＞お姉ちゃんはいいのっ！

ー7　過負荷の運動会（前書き）

流＞……

禊＞『お姉ちゃん、どうしたの？』

流＞かわいい、とか、かわいそう、とか、初々しい、とか言われてます

禊＞『…言われてるね』

流＞……嫉妬した？

禊＞『流タソ俺の嫁ｗｗってコメントが来たらご祝儀いくらくらい包めばいいかな？』

流＞……なんでみーくんデレ期なのに冷たいの…？

禊＞『逆に聞くけど、僕がだだ甘やかしたら耐えられる？』

流＞過呼吸と心臓高鳴りすぎてキュン死ぬ

禊＞『ね？』

流＞それでもラブラブしたいよぅ…

ー7　過負荷の運動会

『優勝は鍋島猫美率いる柔道部チーム！おめでとうございますっ！』

「……は？」

『えー柔道部！生徒会と競泳部がごちゃごちゃ戦っている間に！なんとその他の全チームをきづかれないようこっそりと撃破！合計１０３ポイント分のハチマキを獲得しぶっちぎりのトップと相成りました！！』

（え～～？そんなのアリぃ…？）

「ククク！『綺麗な相手に汚く勝つ』！卑怯と反則。確かにウチの志貫かせてもうたわ！けどまぁ次こそは直にやろうで黒神ちゃん！顔を洗って出直してこいや！首を洗って待っとるわ！！」

（うわぁ…卑怯なのにかっこいい…っ！！）

こうして第一回水中運動会は幕を閉じた

閉じるはずだった

イレギュラーが介入する直前までは

『ピーッ！ガガガガガガ――ちょ…なり――をっ！？やめ――ガシャンッ！！』

「！？」

放送席からいきなり聞こえた怪音に、全員が足を止める。二階の放送席に視線を向ければ、姦ましく言葉を発していた阿蘇　短冊は勿論、不知火　半袖の姿すらない

「…なぁ、これも生徒会の仕込みなん？」

「いや、違う。生徒会が主催ならばもっと派手かつ緻密な演出で行う」

凛っ！とした立ち姿で宣言するめだかの眉間には皺。完全無欠の生徒会長ですら読めない不測の事態。うっすらと嫌な空気が漂い出したプールに、『ガガ…』とスピーカーから音が響く

『んーんー…あーあー、マイクテスマイクテス』

「女の子…の声、だよな」

「めだかさん…？」

本当に仕込みじゃないのか？と確認するような声に、首を振り、酷く面白くなさそうな顔で放送席を睨む

『えー…皆さんには、これから殺しあいを、して、もらいっまーすっ！』

「バト○ワかっ！！」

思わず突っ込む善吉に、『えへへ…』と照れたような声

『ごめん嘘。つい言いたくなっちゃったたたったたたいたいいたたた痛いっ！やめやめごめんなさい噛まないでお願いいーちゃん雰囲気が『普通』だから『普通』に痛いんだよ我慢できないいたたたたっ！！いたーいっ！助けて人吉ちゃんっ！』

「何で俺っ！？」

どうやら影に隠れていただけらしく、じたばた暴れる内にガラスに映り込む女生徒と不知火。不知火の口に女生徒の右手が手首まで入ってる気がするのはきっと気のせい

『だって貴方いーちゃんの夫でむーちゃんの彼氏でしょっ？！奥さんの手綱ぐらい握っててよ！うゃあああいいいたったたたいたぁいいいいいっ！』

「…善吉？」

「ひ、人吉くん…君ってやつは…幸せになるんだよ？」

「誤解だっ！？俺ぁ彼女いない歴＝年齢だよ畜生！」

自分で暴露しつつも目の幅涙を流す善吉。それはともかく、めだかはいきなりイベントに乱入してきた『ヤツ等』と同じ雰囲気を放つ女生徒を見つめる

『…そぉんなじっくり見ないでくれない黒神めだか。…ごめんごめんごめんなさいいきなり抱き付いたのは謝るからシリアスシーンだから噛まないでぇういたいぃ～っ！』

『し、不知火さんそれくらいにしてあげてくださいよ…。なんか始まったみたいですし…』

『…ペッ、くそ不味い。しらけちったしあたし帰る』

『ぇ…じゃ、じゃあ私も帰る…。ここ『普通』とか『特例』ばっかりで嫌だし…』

『何しに来たんですかっ!?』

思わず頭を抱える善吉。『ヤツ』とは違うベクトルで厄介だ。『ヤツ』はひたすら全てを台無しにしてしまうような『どうしようもなさ』があったが、あの女生徒は逆だ。『どうしようもないから』全部が台無しになってしまう。しかし、これで確信する。あの女生徒は今から「何かをやる」と。それも『ヤツ』と同じような、どうしようもなさすぎて救いがなくなってしまうようなことを

そんな時、

「っ!?や、屋久島さんっ!?顔色ヤベーッすよどうしたんすかっ!?」

「や、屋久島先輩…っ!?」

そんな声が、上がる。

喜界島を支えるように、柔和な笑みを浮かべていた屋久島が今――顔を真っ青にして、全身から油汗を吹き出しながら『がたがた』と震えていた

そう、まるで――球磨川　禊と相対した際の、人吉　善吉のように

『…ぶっちゃけいーちゃん落とそうと好感度上げてるだけダケド…。これって何の集まり？お金欲しいの？なら――』

「よせぇえええええええっ！！」

女生徒――戦場ヶ原　流の言葉を遮るように絶叫する屋久島。あまりのキャラにそぐわない行動に、全員が屋久島に――そして流に視線を向ける

『んーんーんー…？…あっ！君アレだ！英雄ごっこに付き合ってくれた子だ！名前覚えてないけどありがとねー。意外と楽しかったし。で、さっきの話の続きなんだけどさ』

にこっ、と流は邪気のない笑みを浮かべた

『札束のプール、あげるよ』

「…え？」「…あ？」

先に反応したのは、喜界島。そして種子島

「よせっ！聞くなっ！」

焦ったように2人の耳を抱き締めるように塞ぎ。自分の身体で流を見ないように視界を塞ぐ。それでも尚、スピーカーで増幅された言葉は脳裏に刻まれる

『お金欲しいんでしょ？いっぱいあげる。部費総取りだっけ？3倍だっけ？10倍でもいくらでもいいよ。好きなだけあげる。札束のプールの脳ミソも身体もふやけとろけるまで泳ぐといいよ。お金欲しくてこんな遊びしてるんでしょう。いくらでもあげるよお金の亡者さん。。だから――私のお願いを1つだけ聞いて』

誰も、何も喋れない。喋らない

あんまり、と言えばあんまりな言い草に、誰一人として言葉を返せない

『黒神めだかを【嫌わないで】。明日までにこの学校のあらゆる場所にお金を仕込んでおいてあげる。好きなだけ持っていくといいよ。その代わり、黒神めだかを【嫌わないで】。うふふ…頑張ってね、黒神めだか。足りない人は3年14組、戦場ヶ原　流の所においで？校庭に山が作れるくらいのお金の山で、登山出来るくらいのお金をあげるよ。うふふ、うふふふ…ああ、英雄ごっこの君、どのプールにお金いっぱい詰めとく？』

「いらないっ！いらないからやめてくれっ！俺から…俺達から夢まで奪わないでくれ！こいつらまで俺から奪わないでくれ！」

『…ま、いーけどね。いーちゃんいーちゃん、ご飯奢るから一緒に食べ――痛い痛い髪引っ張っちゃヤーッ！！なんでなんでなんでそんな怒ってるのいーたぁーいぃーっ！？』

彼女が喋っていた時間は、5分にも満たない

5分にも満たない時間で、明るく、楽しく、良い話で終わるはずだった水中運動会は、酷い空気になってしまった

そして、全員が視線を向けるのは――生徒会長、黒神めだか

この空気はお前のせいなのか？

と

この嫌な気分はお前のせいか？

と

あの嫌な奴はお前の関係者なのか？

と

その視線が語りかける

めだかには分からない。理解出来ない。何故、あんな風に敵意を向けてくる相手が自分を擁護するような発言をしたのかが

めだかには分からない。何故、今この場で猜疑と疑惑と好悪の入り交じった視線を浴びるのかが

不理解。不可解。不完全。ぐるぐると思考の迷路に陥っためだかの手を、そっと善吉が繋ぐ。気付けば、阿久根も背中を叩くように、あるいは子供をあやすように、めだかの背中を撫でる

「あー…よく分かんねぇ妨害？が入ったが…あいつは生徒会とはなんの関係もねぇ。ほれ、めだかちゃんも元気出しな。つぅわけで解散だ！あんな奴の言うこと真に受けて校舎内探し回ったりするんじゃねーぞ」

そう言い、その場を去ろうとするが――めだかは、それよりも、と顔を上げた

「――遊ぶぞ」

『…は？』

呆気に取られる。お前なに言ってんの？と、正気？この空気で？と

「こんな気分で業務ができるか！見れば屋久島三年生も気分が優れないようだな…。何！この場の皆で楽しく遊べば空気も変わる！さぁ皆の者！堅苦しいことはなしだ！今より好きに！楽しく！無礼講で好き放題に遊ぼうではないかっ！」

凛っ！とした声。元より好感度が振りきれているめだかだ。そのめだかの宣言に、皆恐々と、けれども少しずつ動き出す

屋久島も、動いた。「意味が分からない」そんな表情で固まっていた後輩２人を、綺麗な投げっぱなしジャーマンでプールに叩き込んだ

「屋久島先輩にめだかちゃんが移った！？」

「善吉？」

「…いや、他意はねーよ」

「ちょっ！！いきなりなんすか屋久島さんっ！？」

「いきなりは酷いです！」

「いや…嫌なこと忘れるにゃ身体動かすのが一番だ。付き合え後輩」

「ふむ競争だな屋久島三年生。私は泳ぎも得意だぞ」

「お前が本気で泳ぐとプールの水がなくなるから止めろ！」

「めだかさんっ！貴女が泳ぐと言うのなら僕はがばっ！？ひ、人吉クンいきなりなにするんだっ！？」

「あんた／変態がはしゃぐとろくなことにならねーんだよっ！」

「よし、喜界島。黒神と競争してこい。で、ダチになってこい」

「え、えぇ！？ハードル高いよ屋久島先輩っ！」

いつもの

いつもの気楽な箱庭学園だった

少なくとも、表面上は

「いーちゃんよくそんなに食べれるねぇ。お姉ちゃんそんなに食べたらお腹壊しちゃうよ」

「元から壊れてるくせにちゃらくせーこと言わないでくれませんー？あひゃひゃ、壊れてるから食えないのか。そりゃ残念」

「あとダイエット」

「…『過負荷』のくせにたまぁに普通のこと言うのやめてくれません？」

「みーくんにいつ見せても良いように、スタイルと下着には気を使ってるの」

「みーくんってぇと…あー、近親相姦の片割れねぇ。よくあんなん愛せるね。そこだけ尊敬しないでもないよ」

「貴女のことも愛してるわよ？」

「あひゃひゃ。キモい。…でさ、いつまで建前で会話すんの？キモいんだけど。食い潰すぞ」

「どうぞ？『愛し恋し／ラブアレルゲン』・『戯言遣い／ミッシング』。煮ても焼いても喰えない女とは私のことだよ」

「…ま、確かにね。『喰う気にすらならない』ってのは初めてだわ。…ホントキモい。噛み潰すぞ」

「それはいやぁ…痛いのいやぁ…。むー…やっぱりいーちゃんは『通常／スタンダード』な『過負荷／マイナス』じゃないよね。なんだか今までツンデレキャラを攻略してたはずなのに、１つの選択肢ミスってヤンデレルートに入った気分だよ」

「あひゃひゃ。…アンタラみたいなのと一緒にすんな」

「貴女が嫌なことはしないわ。…差し当たり、消えて欲しそうだから消える、わ…？…って、学生食堂で7桁分食べたの…？すご…」

真似出来ないなーっとか呟きながら伝票片手に去っていく彼女の後姿に、少女は吐き捨てた

「『通常』の『過負荷』、ねぇ…。アンタがそれを言うか、って話だよね」

けっ、と鼻を鳴らす少女のほっぺには、白くて甘いクリームが付いていた

「という感じで今日もまったく問題なかったよ！えへ、ほめてほめて！デレ期入ったお陰で毎日電話くれるみーくんに胸がじゅんっとするね！」

「『……』」

「…んーんー？どうかした？」

「『…僕、言わなかったっけ？』」

「んー？」

「『僕が行くまで、無駄に心配かけないようにしてって』」

「うんっ！言ったよ！ちゃんと録音してある！」

「『…ま、お姉ちゃんじゃ無理だとは思ってたからいいけど』」

「んーんー？そんなことよりも私は今日すごいことに気付いたよ！」

「『聞こうじゃないか』」

「昔は双子が産まれた時、先に産まれた方を下の方にしたという…つまりお姉ちゃんはお姉ちゃんでありながら妹属性と兄、弟属性を兼ね揃えていたのだよ！どうだ！」

「『まるで萌え属性のバーゲンセールだな…。あれ？お姉ちゃんが妹だと思ったらちょっと萌える』」

「ホントッ！？お兄ちゃん大好き大好き愛してる！」

「『…流、それでも僕は近親相姦属性がないんだ』」

「…そ、そっか。残念。…あ、あしたはやいからもうきるね」

「『え、お姉ちゃんから電話切るなんてどういう風の吹き回』」

電話を投げ捨て、ばくばくと高鳴る心臓を押さえ込む流

「いいいいきなり、名前で呼ぶな…っ！」

いや、慣れろ、と

ー7　過負荷の運動会（後書き）

次回予告

流＞みーくんのデレ期に本気でキュン死にそうな流です。黒神めだかが恐いので真面目に次回予告します

流＞

彼は己を磨き続けた。

王に二度の敗北はない、と

ただひたすら完璧を求め、完成を求めた

彼の、彼等の計画は今、動き出す

流＞次回、ながしシスター＋1。『フラスコ計画』

流＞真面目にやると凄い疲れるねコレ…

禊＞『おつかれー。ちゃんと出来たご褒美に2分だけハグしていいよー』

流＞…え、なに。私死ぬの？死ねと？みーくんの腕の中が死地だというのなら、それもまた本望

禊＞『はぐー』

流＞あ、だめだしぬ

＋1　フラスコ計画（前書き）

流＞…感想板からいい感じの『過負荷』の気配が…

禊＞『はーいストップ。噛み噛みモフモフされたくなかったら大人しくしようね』

流＞かみかみもふもふ…？……え、あ、うそ…き、気付いてた…？（汗だっらだら）

禊＞『どうかした？』

流＞ち、ちがっ！違うの！若気の至りなの！思春期だったの！性の目覚めだったの！ほら私ってば生理来たの１４歳くらいだったでしょ遅かったの！だからそのぶん性の目覚めが遅くてチャージしたぶんすっごい来ちゃったっていうかとにかくアレは違うのううん違うのとか言い訳だよね言い訳だけど違くてほんと信じてお願いみーくん私ほんと違うのっ！

禊＞『……なにやったの？』

流＞…あ、あれ？

禊＞『なにやったの？』

流＞…え、えへ？

禊＞『ちょっとお話しようか。僕の膝の上に座ってくれる？』

流＞遠回りにキュン死ねって言われたっ！？

＋1　フラスコ計画

球磨川　流には友人がいる

あまり数はいないし、そもそもそれが本当に友情なのかは分からない。だが、少なくとも彼女が『過負荷』と関係なしに笑顔を向ける、そんな相手を表す言葉は『友人』しかなかった

1人は『英雄』日之影　空洞

元々は授業を受けず、授業中でも平然と校舎内を散歩する流に、どうにかして授業を受けさせようと奮闘した結果だ

『知られざる英雄』という『異常』を持つ日之影を、『人類最強』という『過負荷』を持つ流が忘れなかった、というのもあるかもしれない

2人の関係は友人だ。友人だが、父娘のような、兄妹のような、どこか保護者と被保護者が定められた関係だった

1人は『モンスターチャイルド』雲仙　冥利

風紀委員である彼には、自由過ぎる彼女が許せなかった。許せなかったが――許さざるを得なかった

『過負荷』の流が一ヶ所に留まった方が、より風紀が乱れたからだ

仕方なく放置し、放置したままでいれば、挨拶を交わし、一緒に食事する程度の仲にはなった。互いに人間嫌いという点が似通ってい

たからかもしれない

果たして友人とカテゴリーしていいのかは謎だが、彼等はお互いを『変人』と捕らえ、少なくとも悪い感情は持っていなかった

何気に流は校則守る子だったし

そして最後に――

『変態』黒神　真黒

単純に変態友達だった

そんな真黒が、額に指を当てて考え込んでいた。

流が話しに来てくれる愛妹の情報は軍艦塔から外出出来ない彼の清涼剤だ。勿論黒神財閥選りすぐりの撮影班がめだかのことを２４時間盗撮しているが、流から聞ける情報は珍しいものばかりだ。興味深い

「校舎を引っ張って歩く、か。全盛期のめだかちゃんなら可能だろうね。『魔法使い』の妹であり、世界の中心でもあるめだかちゃんなら、地球だって動かせる」

勿論これは冗談だが、流には面白くなかったらしい。嫌そうな顔で話題を変える

そして――話を聞き、真黒は思った。目の前で顔を紅くしてもじもじと身体を揺らす流を見つめる。流はより一層顔を紅くして、真黒が淹れた紅茶をチビチビと飲む

「つまり――こういうことだね？」

こくこくと頷く流に、真黒は朗らかに笑い

「妹（弟）が可愛すぎて生きるのが辛い…っ！！」

「うん…っ！！本っ当に…っ！」

ぐぐっ…と力を貯める２人

「確かにその気持ちはよく分かるよ。僕も何度写真の中のくじらち

ゃんに会うために真剣に二次元の世界に入る装置の開発に乗り出したか分からない。正直第一期フラスコ計画に参加したのそういう側面もあってね。写真の中に入ればいつでも一歳のめだかちゃんや３歳のくじらちゃんにハグできる…！夢が広がるね！それにしても僕が今もあらゆるネットワーク使って居場所を探っているっていうのにくじらちゃんってば照れ屋だからずっとかくれんぼしているんだよまったく困ったモノだね。僕はくじらちゃんを見つけたらとりあえず二度と見失わないように全裸になって全裸に剥いて抱き締めてハグして僕の匂いを魂にまで擦り付けて見せるよ」

「みーくんが可愛すぎて生きるのがつらいっていうかもうねみーくんに何度かハートブレイクされてるのよ本当に。あまりにキュンキュンし過ぎて心臓止まってあんしんいんさんと会ってお茶して最近のジャンプの唐突な路線変更っぷりに熱く議論をかわしたり殺しあったりかめはめ波を本気で撃つ方法を議論したりってかあの娘かめはめ波撃てるんだけどね「嘘ぉっ！？」ううん本当。あと殴りあったりして落ち着いてきたら帰るみたいなサイクルが出来ちゃってるのよどうしよう。この間なんかねみーくんったらね、電話でね、わ、わたわた…私のな、ななな名前とか呼んじゃってさぁっ！お、おおおお姉ちゃんを名前で呼ぶとか酷いよね！み、みみみみそ、みそぎぃぃいうにゅあああああ……みーくんはっ！名前でなんか呼べるか恥ずかしい！こっちは思春期なのよっ！？男女の違いに一喜一憂よ！なんであんな平然としてるのようわーん冷静なみーくんかっこよすぎるっ！胸がきゅんとするーっ！」

「…くっ！どういう経緯だったかまったく分からないが妹（弟）から名前で呼ばれる…だと！？実の！血の繋がった！妹（弟）からっ！…くぅぅたぎる！ちょっと頬を紅く染めためだかちゃんが上目遣いで「真黒…くん…」…ぅおおぉぉおおみ・な・ぎ・っ・て・き・た・っ・！！げぐろばぁ」

「きゃあっ!?内臓ほとんど無いんだから無茶しないでよっ!あと黒神めだかがやるとしたら路上に吐かれた酔っぱらいのゲ○見るみたいな目で「…真黒三年生。ちょっと校舎裏来い」って感じだと思う!」

「我々の業界ではご褒美ですっ!想像したまえ君の愛しい弟が「…流さーん?ちょっと来てくれるー?」みたいなことを言うのを!」

「みーくんはっ!そんなこと言いません!もし言うとしたら…『やれやれ流ちゃん、流ちゃんってば本当に駄目だね。終わってるよ…っつうかさ、…ああ、やっぱいいや。帰っていいよ』…み、た、い、な、……ちょっとあんしんいんさんに会ってくる…」

「待て待て。これからが本番だよ。いいかい、その時みーくんとやらは君のことを『嫌っていない』。いいかい、嫌っていないんだ」

「…んー、んー?」

「つまり、本心隠した照れ隠しっ!本当は甘えたいんだけど敢えて冷たく接するっ!そうすることでお兄ちゃん大好きっ!という感情を必死で隠してるんだよめだかちゃんはっ!なんてったって黒神めだかの真骨頂その2はツンデレだからね!」

「…ねーよ。それはねーよ。…でも、でもでもみーくんが私に冷たくするのは私がキュン死しないためらしいし…?も、もしかして…もしかしてみーくんデレる前から私のこと結構心配して……やぁ~んっ!な、なんかドキドキしてきたっ!あ、熱くない?この部屋暑くない!?」

「暑いね！脱ぐか！」

「う、うん！脱ごうか！」

そうして2人は同時に上着に手をかけ、

「脱ぐなぁあああああああああっっ！！！！！」

部屋に飛び込んできた善吉に蹴り飛ばされた

「なぁにでっけぇ声でデビルやべぇ女とサタンやべぇ話してるんすか真黒さんっ!?展開的に考えて中ボス都城でラスボスその女でしょーがっ!?ラスボスエンカウント率デビル高ぇーよっ!っつうか見ろ!」

びしっ!と指差した先には四肢をだらりと投げ出し、完全に脱力しためだかの姿。せっかくしてきた三つ編みもどろりとほどけて床に散らばっている

「善吉…聞いてくれ…私の身体はアレと同じ遺伝子で出来ているんだ…」

「大丈夫だってめだかちゃんっ!元気出せよ!フラスコ計画どうにかするんだろっ!?」

「…え?あ、うん…そうだな…」

「やる気がデビル無くなってるっ!?」

コントを繰り広げる善吉とめだか。だらーんと倒れ伏しためだかのスカートの中身を凝視する真黒。善吉の蹴りで頭から紅茶を被り、きゅぅ~…っと星を飛ばして目を回す流。

「いたたっ…いやぁやあよく来てくれたねようこそだ。一年ぶりだぞマイリトルプリンセスシスターめだかちゃん」

「ほ、ほらめだかちゃんっ!頑張れ!笑顔だ!笑顔を魅せろ!」

善吉の応援によろよろと立ち上がっためだかは、すぅううう…と息を吸い込み

「ご無沙汰しておりますお兄様っ★」

その笑顔は

すっげぇ引き吊ってた

で、なんやかんやで

『Aコースッ！』

善吉とめだかの元気な声に、ぱちりと流は目を開けた。寝ぼけ眼できょろきょろ左右を見回し、禊の姿が無いのを確認して「ふぇ…」と泣きそうになる。禊が旅に出てからは毎朝のことだ

「お、戦場ヶ原ちゃん。悪いけどこれから我が愛しの妹達を鍛え直

さなきゃいけないんだ。今日はもうお開きでいいかな？」

「んー、んー…？りょーかい。また来るね～」

と、和やかに挨拶して扉を開け、

「「ちょっと待て」」

めだかと善吉に止められた。流は一瞬嫌そうな顔をするが、すぐさまにっこりと笑う

「真黒ちゃん、呼ばれてるわよ？」

「いいや、変態／お兄様ではない。貴様だ。…確か戦場ヶ原三年生だったな」

「違います。球磨川です」

「「「！！」」」

驚愕に目を見開く3人

…3人？

「「あんた／貴様もかっ！？」」

「い、いやずっと戦場ヶ原ちゃんって呼んでたし…。よ、よく見たら球磨川禊くんと顔がそっくりだっ！？」

「「今さらかっ！？」」

「いやぁ、顔なんかよりも変態性にばっかり目が行っていたし…。よく考えたらあの気味の悪い雰囲気くらいしか球磨川禊について覚えてないんだよね。そんなことに記憶領域を使うくらいならめだかちゃんのパンツのシワの数を記憶する（キリッ）」

「っ…！っっ…！！」

「抑えろ！頑張れめだかちゃんっ！今真黒さん潰したらパワーアップ出来なくなる！」

一瞬で乱神モードに入っためだかを必死に止める善吉

「…んー、んー？あ、安心していーよ。私、フラスコ計画には関わってないから。…んー、んー？もしかして真黒ちゃんに何も教えてもらってない？」

「…む。」

きょとん、とした顔の流にどうにか通常稼働に戻るめだか。ほっとしたのも束の間、善吉は流とめだかの間に割って入る

「信じらんねーな。あんたみたいな」「都城王土。『異常』・『人心支配』」

…あ？と口を半端に開けたまま停止する善吉。真黒が「げっ、」という顔をする

「行橋未造。『異常』・『受信感度』。名瀬夭歌。『異常』・『改造』。高千穂千種。『異常』・『反射神経』。宗像形。『異常』・

『殺人衝動』。古賀いたみ。『元普通』・『強い』。私が知ってるのはこれくらい。あと、名瀬夭歌には何か特殊イベントがあったような…？あとあとそれより強い『裏の６人』。改造人間とか液体人間とか食欲人間とか色々いたような気がしないでもない。行くなら怪我しないように頑張ってね」

ばいばーい、と手を振る流の姿を、ぽかーんと見送る三人。

めだかは、何故あの女生徒が自分を支援（？）しているのかが分からず、善吉は『ヤツ』と同じ顔と雰囲気を持ってるくせに意外と『いい人』（？）なことに戸惑い、真黒は（一応）友人が何故そこまで情報通なのかがわからず

とりあえず、鍛えながら貰った情報から相手の能力を推察するのだった

「みーくん久しぶりっ！９５３８時間１２分振りだね！会いたかった～っ！」

「『久しぶりだねお姉ちゃん。あれ？抱き付いてこないの？ちょっと意外だよ』」

「…ぇ、えへ？そ、そんなことより明日から転校してくるんでしょ？制服買いに行こう制服っ！みーくんはどんな服でも似合うからきっとかっこいいよ！」

「『んー？いや、いらないかな。どうせ夏休みの間に廃校させるし。それにこの学ラン意外と気に入ってるんだよ。似合うでしょ？』」

「すっごく似合ってる！惚れる！惚れ直す！」

「『あれ？抱いて！って言わないの？』」

「……あは？それはともかく、今日の晩御飯なににする？なににする？すっごく高いお店でもいーよ！美味しいの食べに行こうよ！」

「『久しぶりにお姉ちゃんの手料理が食べたいなぁ』」

「はぁうっ！？」

「『ん？僕何か変なこと言った？』」

「う、うぅん…にゃんでもないれふ…」

「『鼻血出てるけど』」

「萌血だから大丈夫。…あ、あの、あのあのね？お願いしてもいーい？」

「『簡単なことなら』」

「て、手とか繋いでもいーかな！？」

「『別にいいけど。ああ、でも明日から本格的に動き出すんだから死なないでね』」

「あいっ！」

「『単純だなぁ。…それにしてもめだかちゃんかぁ。明日かぁ…。うん、楽しみだなぁ。善吉ちゃんや高貴ちゃんも元気だといいけど』」

「…嬉しいのに悲しいよぅ」

「『はいはい泣かない泣かない』」

＋1　フラスコ計画（後書き）

今回は球磨川姉弟がラブラブ中のため次回予告はおやすみです

そのため

おまけ

「ま、まぁそれはともかくAコースを始めようか。善吉くん、めだかちゃん。脱いだ制服はこのカゴにいれておいてくれ」

「…何をするおつもりで？」

「出汁を取るだけだが？」（キリッ）

「…（くらりっ…）」

「…めだかちゃん。デビル頑張れ…ってあれ？俺も？」

「出汁を取るつもりだが？」（キリリッ！）

「…ま、真黒さんっ！？」（ズザザッ！）

「戦場ヶ原ちゃんと話している内に気が付いたんだ。…高校生男子の妹がいてもいいじゃないか。と」（キリリンッ！）

「…めだかちゃん。世話になったな」

「駄目だ！逃がさ…私と一緒にいてくれ善吉！私にはお前が必要なんだ！私はお前がいるから頑張れるんだ！1人にしないでくれ善吉っ！」（うるうる）

「無理だよ！恐いよ！デビル恐いよ！お母さん呼んできて真黒さん診察してもらうんだーっ！」（脱兎）

「「逃がすかぁーっ！！」」

「この兄妹サタンやべぇっ！！助けておかぁさーんっ！！」

＋5　『球磨川家』（前書き）

流＞きんぐくりむぞんっ！結果だけだ！時間は消し飛ばされ結果だけが残る！この世には黒神めだかが勝利したという結果だけが残る！

日之影＞…人いきなり呼び出して何のようだよ。いきなり叫びやがって。なんだ？ジョジョ談義か？付き合うぜ

流＞さりげなくジョジョ立ちしてる日之影ちゃんは嫌いじゃないわ。んーんーんーんー…握手して？

日之影＞…別にいいけどよ

流＞この時私が日之影ちゃんの手を握ったことでなんやかんやで雲仙ちゃんが大ピンチに！

日之影＞いや荒木理論はどうでもいいわ。っつーかまだ朝7時だぞ？こんな時間に学校来るのも珍しいのに…一体どうした？

流＞みーくんが家に帰ってきたんだけど、1つ屋根の下にみーくんの息遣い感じて落ち着かないからつい

日之影＞お前はどこまで初心なんだよ…

流＞だって久しぶりだし…。ちょっとずつ慣れてくもん。とりあえずみーくんのワイシャツ盗んできたから匂いに慣れることから始めるよ

日之影＞初心なんだが残念なんだなぁ…

＋5　『球磨川家』

高千穂との激闘

宗像との和解

名瀬、古賀の強襲

捕らわれるめだか

『裏の６人』の始動

助っ人にきた負け犬軍団

行橋による騙し討ち

めだかの洗脳

そして洗脳からの解放

それらあらゆる障害を乗り越えて――彼らは地下１３階に

都城の最後の勧誘

けれど――返ってきた答えは単純で、至極分かりやすかった

「完璧な人間なぞいるわけがない――貴様らが語っているのは、あり得ない夢物語だ」

真っ向からの、否定

故に、都城は薄く口元を歪めて笑い――激昂して今にも飛び出そうとする古賀を呼び止めた

「行橋、離れていろ。そして古賀――痛いぞ。我慢しろ」

「ぇ」

いくら、

いくら一声かけたところで、何も変わりはしない。心臓を貫かれた古賀は倒れ、名瀬は真黒に陥落し、そうして都城は『地に足つけて真面目に戦い』、それでもやはりめだかには勝てなかった

けれど、

だけれども、

「悪いことしたら――ごめんなさいだろ？」

ボロボロに打ち倒され、『完成／ジエンド』の徴税もままならず、あまりの『異常』に動揺している内に両足を破壊され、歩くこともままならない。あまりの動揺に古賀から徴税した『回復力』を使うための電力が集められない

だが、それでも

「――謝らん。謝れん。王とは相手がどんなに強者であろうと引かず、どんなに自分が卑小であろうとも媚びず、そして今までの行動

を省みん。偉大なる俺は偉大なる俺として、偉大なる俺のままで貴様の前に散ろう。黒神めだか」

「――そうか。残念だ」

すぅ――…っと、めだかの髪が白く、黒く、鮮やかに染まる。腰を落とし、左手は握り拳から親指だけ伸ばし、右腕は背中側に向けて反らす。更に腰には捻りを追加

（お、俺、参上！！…だとっ！？）

そうしてめだかは言葉を吐いた

「哀れなことだ」

ぴしり、と

都城　王土の心にその言葉はヒビをいれた

「貴様もかつては民を思い、民を信じ民に慕われるための努力をする幼き王だったのであろう、だが、偉大なる王となるための障害を前に挫折し今のように守るべき民をその手にかける狂王となってしまったのであろう」

「き、貴様――この、この俺に…っ！！」

震える声で、その声に憤怒を滲ませながら都城は次々ポージングを変えていくめだかを睨む

「ならば良かろう。私が修正してやる。矯正してやる構成してやる。

真なる意味での偉大なる王となるための教育を行ってやるっ！」

「この俺に――『上から目線』で行動するなぁあああああああっ！！！」

激情のままに都城はめだかに向かって飛び掛かり――

「『おっと、それ以上はやらせないぜ』」

その場に巨大な螺子で縫い止められた

『！！！？？？』

全員が驚愕し、動きを止める中

悠然とその男は歩みを進める

「『おいおいめだかちゃん。僕を倒したときのあの気合いは一体どこに言ったんだい？――君を倒すのはこの僕だ。この程度の相手に負けてもらっちゃ困るぜ』」

悠然と腕を広げ、まるでこの世界がジャンプなら、これから仲間になることが確定している元敵キャラのような台詞を吐く男――球磨川　禊の姿に、全員が動きを止める。思考を止める。理解を止める。

「王土！！」

そんななか、「がふっ」と血を吐いた都城に駆け寄る行橋。一目傷を見るなり、「ひ、ひどい…」と呟き、仮面の下からぎろりと球磨川を睨む

「お、お前――なんでこんなことをっ！？」

その言葉に、球磨川はむしろ不思議そうにこう答えた

「『決まってるじゃないか。…めだかちゃんを守るためさ。つまり――』」

「『僕は、悪くない』」

「なっ…！？」

息を呑むめだかに、けれど球磨川はにこにこと微笑みながら言葉を繋げる

「『大丈夫、めだかちゃんも悪くないさ。お姉ちゃんの忠告も虚しく全身ボロボロで洗脳されて自己洗脳。君が最初からフラスコ計画に参加していれば箱庭学園の生徒は犠牲にならず、フラスコ計画のおかげで生計を立てられてる人は幸せな老後を手に入れ、今尚『異常』のせいで悲劇に満ちた人生を歩んでる『異常者』は幸せになれて、『普通』や『特例』なんていうめんどくさいカテゴリーは無くなって皆ハッピーエンド【なんて】つまらないエンディングにもならず、最終的に『異常者』は『異常』として苦しみ続けそのために

した努力は失われこれからも『異常者』は悲劇に満ちた人生を送るけど大丈夫っ！君は悪くないさ！だって君は君の生徒会を！正義を執行しただけなんだから！そのためにボロボロにされて今までの苦労を全否定された１３組の人たちだってきっと分かってくれるよ！』」

「耳を貸すなめだかちゃん！そんなのアイツの勝手な解釈だ！」

球磨川の言葉を全否定し、善吉は、動揺を見せるめだかを庇うように立つ。阿久根や喜界島もそれは変わらない

「『お！久しぶりだね善吉ちゃんに高貴ちゃん。そっちの女の子は初対面だけど凄い格好だね！良い趣味してるよ』」

ボロボロ制服に水着、という妙な出で立ちだった喜界島は僅かに頬を染め、身体を隠すように腕を動かす

が、それよりも早く接近した球磨川が、その胸元を鷲掴みにした

「なっ！？」

「『でも僕にはちょっと刺激が強いなぁ。善吉ちゃんや高貴ちゃんは残念かもしれないけど、直しちゃおう』」

その言葉と共に『なかったこと』にされる制服の破損。肉体の損傷。呆然とする喜界島に、キスするのかと思うほど顔を近付けて球磨川は言葉／毒を吐く

「『お姉ちゃんから聞いてるよ？君、お金無いんでしょ？良かったね！これで高い制服買い直す必要もないよ！なんなら君のお母さん

の病気も治そうか?君の人生全てを修正して矯正して構成してあげるよ!』」

「――っ!?」

ぞっとする

先程のめだかの言葉を真似たその言葉に、自分の人生そのものが『なかったこと』にされたような、そんな絶望を感じた喜界島は絶句し、そして球磨川に追い詰められた喜界島を助けるために善吉と阿久根は動く

「『おいおい、先輩に向かって暴力とは感心しないぜ。いや、むしろ僕が先輩だから暴力を振るうのかな高貴ちゃん。さっすがぁ!何百何千何万人をたった独りで壊して破壊して終わらせてきた男はやることが違うぜ!憧れちゃうなー。ま、もっとも君が病院送りにした人も終わらせてきた人も『君なんか』のことは全部『なかったこと』にして今は幸せ/プラスな人生を送ってるんだけどね』」

「く…球磨川…さん…」

まず狙いを定めたのは阿久根の方だったらしい。善吉の蹴りをかわして阿久根の懐に潜り込んだ球磨川は、全力で阿久根の黒歴史を抉る。真っ黒く真っ暗く汚れた自分という存在を思い出し、同時に当時の恐怖を思い出した阿久根の身体は硬直する。

そうして最後は善吉だった。追撃をかけようと足を振り上げるも、その足に螺子を突き刺され、激痛に動きを止める

「『さっすがだね善吉ちゃん!君は僕が見てきた人間の中で最も努

力している人間だよ！でもなんで君はこんなところでそんなことをしているんだい？君は本当にそのままでいいのかな？…あははいやいやただの冗談だよ。君は君のまま、そのままでいい。そのままがいいんだ』」

ははは、と笑いながら軽く、本当に軽くぽんっ、と善吉の胸を押す。ただそれだけでかくん、と善吉の足から力は抜け、無様に尻餅を付く。善吉はあれほど「めだかちゃんを守る」と誓ったはずなのに、こうしてあっさりと座らせられた自分に驚愕し愕然し落胆した

「…球磨川」

「『うん？なんだいめだかちゃん？君が僕に話しかけてくるなんて…明日は雨かな？血の雨が降る気がするよ』」

「っ…そんなふざけた話をしたいのではないっ！！何故貴様がここに――」

「『ぁ』」

と、球磨川は上を向き

「『ごめん、雨が降るのは今からだった』」

びしゃっ、とバケツの中の水をぶちまけたような音。地下なのに？と思ったその場の全員が真上を見上げ、そして驚愕し、絶望した

鍋島、鬼瀬、高千穂、雲仙、雲仙（姉）、宗像

糸島、筑前、百町、湯前、鶴御崎、上峰

負け犬軍団、そして『裏の６人』が、全員螺子で天井に張り付けにされていた

ぽたり、ぽたりとその身体から溢れ落ちる血の雫が、雨となって生徒会執行部――そして都城、行橋、名瀬、古賀、黒神真黒の身体に降ってくる

「い…つの間に…っ！？」

「『今、さ。ね、お姉ちゃん』」

「はぁい」

すぅ――…と音もなく、球磨川の後ろから姿を表す球磨川（姉）。球磨川（姉）はその手にピンク色のミトンを付けていて、返り血を全身に浴びながらくすくす笑っていた

「やっぱ日之影ちゃん強いなぁ…。『人類最強／ミス・レッド』の応用性が高過ぎて困るよ」

肉体的接触を持って発現する『愛し恋し／ラブアレルゲン』。つまりそれは、他の『異常』や『過負荷』と肉体的接触を得ない限り、リセットされない

故に球磨川（姉）は『英雄』と同レベルの戦闘能力を有することが出来る『人類最強』を得たまま、時計台地下へと降り立った

「き、さま…っ！？一体何のためにっ！？何故こんなことが出来る

んだっ！？」

「『勿論めだかちゃんを守るため――なぁんてくだらない嘘は信じて貰えないだろうから正直なこと言うけどさ』」

へらっ、と軽薄に、球磨川は笑った

「『お姉ちゃんに付いてこい、って言われたから来ただけ。目の前で喧嘩してる人がいたから止めただけさ。だって【両方喧嘩するような元気がない】なら喧嘩なんかしないだろ？お姉ちゃん、これでも女の子だからさぁ、あんまり暴力シーン見せたくないんだよ』」

「やぁんみーくんの気遣いに胸がきゅんきゅんっ！でもって私がここにいる理由は簡単よ？『みーくんに良いところを見せたかった』。昔よりずっと強くて使い勝手のいいお姉ちゃんになったよ？ってみーくんに自慢したかった。フラスコ計画の要たる都城王土を潰すことで、私たちの計画の第一歩にしようと思ったの」

絶句する一同。だが、そんな中で1人の男が駆けた。徴税した『回復力』を全力で使い、身体を修復した都城はただ一点、球磨川（姉）を目指して駆ける

「んーんー？あ、久しぶりー」

憤怒の形相で駆け寄ってくる都城ににこり、と笑い、

「でもごめんねぇ。今は邪魔しないでね？」

ピンク色のミトンが視界を掠め、都城は吹っ飛ぶ。視界を埋めるスパコンを破壊しながら都城の身体と意識は彼方へと飛び去ってしま

う。同時に行橋ががくり、と膝を突く。先程までの螺子による攻撃はそこまでダメージが無かったのに、見た目小さな少女でしかない球磨川（姉）の攻撃の方が余程ダメージが大きかった

「さて、と。みーくんどう、どうどう？お姉ちゃんかっこよかった？男は背中で語るんだぜ的なこと出来た？」

「『そういう台詞は自分の力で戦ってから言おうか。ああ、そうそうめだかちゃん。理事長室ってどこにあるの？お姉ちゃん頼りにならないからさぁ、解んないんだよね。転校手続きしないといけないのに』」

にこにこ笑いながら聞いてくる球磨川（姉）に冷たく返し、球磨川はめだかに問う。めだかは球磨川が転校してくるということに驚愕し、冷や汗を流す。既にこの短時間で何度驚愕したのか分からない

「…くっ、教えてやる。だから早く行け。私は都城3年生たちの治療をしなければならんのだ」

「『ん、ありがと。じゃあね、めだかちゃん』」

「また明日とかっ。あと善吉ちゃん！むーちゃんもうすぐ来るから待っててね！」

「何をっ！？」

笑顔で去っていく両名に

その場にいる者たちは、戦慄を禁じ得なかった

＋5　『球磨川家』（後書き）

流＞実は制服の下にみーくんのワイシャツ着てるのは秘密です

禊＞『さぁ、次回のながシスはいよいよ過負荷編。お待ちかねのあの娘やあの人の出演さ。楽しみだなぁ人吉先生』

流＞スコップ買ってこなきゃ

禊＞『スコップはいいね。万能兵器だよ』

流＞切ってよし殴ってよし埋めてよし掘ってよし固めてよし、綺麗なままなら料理にだって使える！…『庭弄りの守護神』にだって負けないもん…次こそ…次こそ勝つもん…

禊＞『また返り討ちにあうオチが見えた所で。次回、－８　人吉怒江』

流＞結婚しちゃった！？

禊＞『これがやりたくてこうゆうサブタイにしたんだって』

流＞しかも人吉先生の方だしね

18　人吉　怒江（前書き）

流＞…質問のお便りが来ています

禊＞『早く答えてあげれば？』

流＞なら、１つ目

『みーくん、『過負荷／マイナス』的な意味でパワーアップしてね？』

愛の力でパワーアップだねっ！

禊＞『それはねぇよ。単純に色々環境が違うからかな。で、二つ目。【お姉ちゃんにモデルはいますか？】』

流＞んー…いる、といえばいるんだけど…ちょっとね

禊＞『というと？』

流＞２ちゃんとかＶＩＰの【姉「○○○」】みたいなスレの姉キャラに、『過負荷／マイナス』属性と『初心』属性、それから若干のロリ要素を加えると私になるのだった

禊＞『あー…』

流＞モデルって言えるのかな？

禊＞『難しいね』

流＞ね？

18　人吉　怒江

球磨川が色々準備を始める、というので、流はそのサポートに回ることにした。したのだが…基本的に頭の方がよろしくない流が球磨川の周りでうろちょろしていても邪魔にしかならず、結局「『お姉ちゃんはいつも通り散歩してて』」と言われてしまった。しかも見たこともないかわいらしい笑顔で

そのことで凹み――は、せず。むしろレア物の笑顔を脳裏に刻み込んだことをへらへら喜びながら校舎内をぷらぷらしていた流だったのだが――ふと、足下に連なる赤い点に気がついた

「…血、だね。しかも既に腐食してる？血が乾くより早く腐食するってことは…」

にぃい…とその頬がつり上がる。いい暇潰しを見つけたから、ではない。純粋に久し振りに会える彼女の反応を想像すると、自然と邪悪な笑みが浮かんでしまうのだ

そして駆け出す。血の跡は点々と続き、数分走ったところでようやく見覚えのあるリボン頭を発見。足音を消しながら走るとかいう妙な高等技術を使いながら接近し――

「乳揉ませーっ！！」

「うぇひゃあああああああっっ！！？？」

背中側から脇の下に手を突っ込んで思いっきり鷲掴みにした

そして驚愕する。――また、でかくなってやがるっ！？

「ちくしょーっ！！当て付けかーっ！リボンヤンデレ隠れ巨乳黒タイツエプロンで尽くすタイプとかなんて私得っ！嫁に来いよちくしょーっ！！大好きよむーちゃんっ！！善吉ちゃんにあげるのもったいなーいっ！！」

「キャーッ！キャーッ！！ぎゃーっ！？」

べりっ！と音がしそうな勢いで引き剥がす。その際にさりげなく手に持ってた包丁を捨てる辺り彼女――江迎はやはり『通常／スタンダード』の『過負荷／マイナス』とは言えないのかもしれない。まぁ、逆に『通常』の『過負荷』なのかもしれないが。『荒廃した腐花／ラフラフレシアン』的に考えて

ばっ、と涙眼で胸元を手で隠しながらバックステップで距離を取る江迎。流はにやり、と笑いながら手をわきわきさせる。江迎は焦る。流には『荒廃した腐花』が効かない。唯一効果のありそうな包丁は投げ捨ててしまった。エプロンの下から違う包丁を取り出すより流が胸を揉むスピードの方が圧倒的に早い…っ！！

「久し振りねぇむーちゃんっ。こうして会うのは…１８７３２時間ちょっと振りかな？」

「…２年でいいと思うんですけどお」

「そこはほら、キャラ作り的にね？」

「キャラ作りしてたんですかあっ！？」

驚愕の真実である

「…だって皆キャラ濃いんだもん…。露出とか恥ずかしいし…制服の下に水着とか恥ずかしいし…制服の下にジャージとか恥ずかしいし…制服違うっていう個性すらない私はどうやってキャラ立てればいいのよぅ…」

まぁ、

確かに流は外見だけならそこら辺のモブに混ざってもおかしくないくらい『普通／ノーマル』だが。元から箱庭学園の生徒だから制服も同じだし

っというか生徒会の服装を言ってやるな

「だから言動くらいは、って。水銀燈っぽくて良くない？会えなかった時間を時間単位で表すって」

「ややこしくなるからやめでください」

「あい」

「…ちなみにそれって」

「パッピーだよっ！」

「せめてジャンプキャラにしましょうよお」

水銀燈はジャンプだ。一応だが

コントが一段落したところで、一緒に歩きながら流は目的を聞くことにする。といっても、もはやほんの僅かしか残ってない原作知識から察するに軍艦塔を奪いに行くのだろう、と推測したのだが

「やることないので、プールにでも行こうかとお」

「…え？何でー？水着サービス？善吉ちゃんろうらくするの？」

「善吉ちゃんが誰か知らないですけどお」

くすくす、と笑い、

「プールの水全部腐らせたら、色々大混乱するでしょお？」

「成る程」

よくよく考えてみれば既に流が所属している『１４組』があるのだ。１４組は自分の教室を持たないが、空き教室なら好きに使っていい、と理事長から言われている。そのまま『１４組』が『マイナス１３組』になったと考えればいいだけだ

…ってあれ？

これって不味くないか？と流は首を傾げた

善吉×江迎フラグは確か軍艦塔絡みの何かで最初のフラグを立てなきゃ成立しないのだ。そして善吉×江迎にならなければ江迎は『愛されない』

流は全ての過負荷の少年少女を愛している

そして流は、『自分が愛する者たちは全員愛されるべきだ』と考えている

だからこそ無条件に『過負荷／マイナス』に嫌悪感を持つ『普通／ノーマル』や『特例／スペシャル』を毛嫌いしているのだが…

既にうろ覚えだが、善吉は江迎にプロポーズするのだ

プロポーズである。

プロポーズなのだ。

なんという甘美な響きだろう。それは勿論自分の愛する江迎が他の人間のモノになるなんて許せない。許せなくはあるのだが…不思議と、善吉ならいいか。と思ってしまう

「…まぁ、善吉ちゃんなら大丈夫だよね。この私に『あんなこと』言ってくれた子だし…」

「…？。流お姉さん…？」

「んーんっ！なんでもないっ！それよりむーちゃんっ！ちょっと軍艦塔行くの付き合ってよ！」

奇妙に沈んだ表情をした流の様子を変に思い、首を傾げる江迎。しかし流が顔を上げた時には、先程までの暗い様子は消えていた。むしろ余程ではないが楽しそうな表情で、江迎の手を引いて走り出す

「あ…」

誰かと手を繋ぐ、という経験が初めてである江迎は、それに少しだけ驚き、手のひらに伝わる暖かさに涙ぐみ、ちょっとだけびくつきながら、それでも嬉しそうに慌てて走り出した

…で、

「物陰からどーんっ！！」

「きゃあっ！？」「どあっ！？」

軍艦塔の周りの特別校舎は放課後、人なんか滅多に来ない。そのため、物陰の向こうから近付いてきた足音を善吉だと判断した流は、一切の躊躇も戸惑いもなしに思いっきり江迎を押し出した

そして、はたっ、と気付く

「パンくわえさせるの忘れた！」

「意味分かりませんよお！」

「っつつ…だ、大丈夫か…って球磨川（姉）っ！？」

流の姿を目にした途端。善吉は江迎の腕を引いて無理矢理立たせ、自分の背中に隠す。突然のことに目を白黒させる江迎

「そっちのリボンの娘は早く逃げろっ！こいつは多分デビルあぶねぇんだ！」

「ぇ、あ、あの…っていうか今、…ぇ、わ、わたし、男の子に触られ…？」

顔を真っ赤にしてぶつぶつ呟く江迎に訝しげな表情で振り返り、善吉は僅かに緊張した表情で、江迎に微笑みかけた

「へっ、安心しな。…あんたのことは俺が守ってやる。だから、逃げてくれ」

どきゅーん。

そんな効果音が聞こえた気がして、思わずガッツポーズを取る流。

びくっ、と身を震わせる善吉

すっ…と善吉の背後から伸びた腕が、けれど決して善吉に触れないよう、優しく善吉を抱き締めた

「…へ？」

ぽかん、とした表情をする善吉の耳に、江迎の言葉が届く

「好き好き大好きよ。今はじめて会ったばかりだけどそんなの関係ないよね今一生守ってくれるって言ったものね嬉しいわありがとう大好き！貴方が私のこと守ってくれるっていうなら私は家庭を守るわうふふ実はこれでも家庭的なのよ？私の両手がちょっとアレだから料理とかはあんまり得意じゃないっていうか正直家事とかほとんどできないけどこれから覚えるし、あ、勿論これは私がやりた

いから覚えるわけだから貴方は全然気に病まなくていいのよそうだっ！むしろ逆に私がお金稼いで貴方が主夫になるっていうのもいいよね！それでそれで２人で愛しい愛しい大好きな２人と２人の愛の結晶！そう愛の結晶！子供は何人くらい欲しい！？私？私はね３人くらい欲しいな女の子２人に男の子１人で球磨川さんたちみたいに仲の良い姉弟になってほしいな。それからそれから貴方は猫と犬ならどっちが好き？私はむしろ貴方専用のわんちゃんになりたいだなんてあはっ、これじゃ流お姉さん真似になっちゃうね。それに私はどっちかというと猫ちゃんだと思うの。自由きままににゃんにゃんって。だから貴方は私にしっかり首輪と腕輪してどこかに逃げないようにしっかり縛り付けてってああもちろん私は貴方一筋よどこにも逃げたりなんかしないわでもでも縛り付けておいてくれないと不安なの貴方の愛の鎖で私のことがんじがらめに縛り付けてほしいというか勿論私は貴方が縛り付けてほしいっていうならそういう属性にもばっちり対応出来るし大丈夫よ？」

「デビル恐いよっ！？」

「…あれ？反応違う？」

確かここで善吉ちゃんは笑顔で「勿論俺もデビル愛してるぜめだかちゃんごめん俺ＮＴＲされちゃったぜー」っみたいな台詞を吐いたような…。と首を傾げる流。断じて善吉はそんな台詞を吐かない

「あ、でねでねむーちゃんっ！！その子が善吉ちゃんだよー」

「…え？じゃ、じゃあやっぱり運命だったんだね善吉くんっ！私達の運命は周知の事実だったんだよ大好き大好き愛してるの結婚しましょう結婚して結婚してください！」

「っつーかなにこれっ!?何事っ!?とりあえず球磨川（姉）とあんたが関係者なことだけは分かったっ！」

最近こんなんばっかりだーっ!!と逃げ出そうとする善吉だが、包丁もなにも使わず、優しく抱き締めているだけの江迎に乱暴することも出来ず、背中に感じる柔らかさにドキマギしながらじたばたと暴れるしかない。その時、江迎の手が善吉の制服に触れる。腐臭を感じた善吉が騒ぎ出すより前に、流が江迎の手に触れることでそれ以上善吉の制服を腐らせることを止める

まぁ、

「ち、ちちち違うのよ本当に違うのよこれは違うのよだってだって私はみーくん一筋だもん善吉ちゃんにドキドキなんてしないもん。…あぁうぅうあああ男の子の匂いが固い筋肉があはぅあああ」

正面から抱き付く形で、だが。

普通に江迎の手を握ったら善吉が逃げてしまうだろうし、触れないように、なんて言ったら善吉が警戒する。だったら江迎の手を流の背中に回し、流が江迎の背中に手を回すことで善吉をサンドイッチにして拘束を…との考えである

「何事ォーっ!!??」

善吉、大混乱

ラスボスに抱き締められているのだから仕方ない。ブリーチなら一護が藍染に、ワンピースならルフィが黒ひげに抱き締められているようなものなのだから混乱するのも仕方ない。仕方ないったら仕方

ない。ベクトルが違う気もするが

「…流お姉さぁん？私達の超絶パッピーマリッジ的運命カップルの恋路の邪魔するんですかぁ？流お姉さんでも容赦しませんよお？」

「だ、大丈夫っ！ただの気の迷いだから！私はみーくんラブだしっ！」

目をぐるぐる回して混乱したように叫ぶ流。

と、そこで

「あーっ！いたーっ！善吉くん見ぃ…けっ…？」

母、登場

息子→美少女２人にサンドイッチ

美少女１→顔真っ赤。

美少女２→美少女１に嫉妬中（？）

母、理解

「そぉんな息子に育てた覚えはなぁーいっ！！」

「ご、誤解ダァーッ！！」

母の怒りの一撃に、息子の身体は宙を舞った

その間に顔を真っ赤にして逃げる流。それを暗い笑いを浮かべながら包丁片手に追う江迎

「『…ナニコレ？』」

偶然通りかかった球磨川が見たのは、正座させられて説教をされる善吉の姿だった

「だから誤解だってお母さんっ！向こうがいきなり抱き付いてきたんだよっ！片方は初対面だしっ！」

「どこの世界に初対面で抱き付いてヤンデレ全開にする女の子がいますかっ！そりゃあめだかちゃんにさっぱり相手にされなくて思春期の若いリビドーを暴走させる気持ちも分からなくもないけど二股とかは絶対にダメッ！もしどうしても我慢出来なかったらお母さんに相談すれば断腸の思いで面倒見てあげ」

「あんた何口ばしってんだっ！？」

「黙って聞きなさい！余所様の娘さんを傷物にするくらいだったら――」

そこまで聞いて、禊はぽりぽりと頬をかき、

「『流行ってるんだなー。近親〇姦』」

そっと、何も言わずその場を去ることにした

『過負荷／マイナス』だって空気を読む

18　人吉　怒江（後書き）

流＞はぅう…お腹痛いよぅ…

禊＞『お姉ちゃん、包丁刺さってる』

流＞中には誰もいませんよっ！…いた、いたた…と、吐血が…

禊＞『今消すからちょっと待ってね。はいＯＫ。あ、そうそう。近い内動き出すから』

流＞おっけー。いつ頃？

禊＞『近いうち、さ。』

流＞次回！ながしシスター。【閑話。日之影　ながし】…お？もしかして私がメインッ！？

禊＞『次回は短いけどね』

裏話　日之影　ながし（前書き）

流＞だ、だから私は善吉ちゃんとはなんにもないし！むしろむーちゃん応援してるから！ねっ！？許してよー

怒江＞……解りました。他ならぬ流お姉さんの言い分ですし…今回は信じます…。…けど、わたしにうそついたら、チョキン、ですよ

流＞うぅ…。本当に違うのに…。ってうわっ！？うわっ！時間やばいっ！じゃあ私これから待ち合わせあるから！じゃねっ！

怒江＞はぁい。また明日あ

怒江＞…

怒江＞……。

怒江＞……？

怒江＞！？

怒江＞友達いない流お姉さんが待ち合わせっ！？一体誰と…

怒江＞…まさか

怒江＞…うふ、ふふふふふ…チョキン、チョキン……

裏話　日之影　ながし

「やっほ日之影ちゃんっ！お待たせ！」

「おー、いま来たとこ…ってなんで浴衣だよ…」

「読者サービスっ！！」

「誰得？っつうか寒いだろアホ」

んにゃー、ギリギリかなー。とか言いながらからん、ころん、と下駄を鳴らす流と一緒に並んで歩く日之影。道行く人々はあまりにも巨大過ぎる日之影の姿に自然と道を譲る

「んで？今日はどうした。また握手か？それともジョジョか？」

「ん？んーんー…？ちょっと相談したいことがあってねん」

ててて、と小走りで日之影を追い抜く流。夜の闇に長い2房の髪が棚引き、ふわりと香る不思議な匂い。…腐った血と女の子の匂いか？と日之影は首を傾げる

「私、悪役なんだけどさ」

「知ってるよ」

日之影に背中を見せたまま呟かれる言葉に端的に返す。プールでの1件や流の体質――『過負荷』についても立ち聞きした。そして、問答無用の変更不可で『球磨川　流』や『過負荷／マイナス』が『

悪役』なのはよく理解した

だから、だろうか。

どうにも2人の距離感がぎこちないのは

いつも笑っている流の笑顔が、固いのは

流が、くるり、と振り返る。笑みを浮かべた口元。けれど、夜の闇と前髪の影に隠れて見えない目元

「日之影ちゃんは…生徒会と私だったら、どっちの味方に付いてくれる？」

「――――」

『英雄』が味方に付くべきはどちらだ？

決まっているだろう。少なくとも『悪役』の味方になるべきではない。それだけはよく理解している

けれど――日之影　空洞は、たった1人、何があろうと自分のことを忘れなかった――忘れないでいてくれた人間を、その手で殴れるか？

日之影　空洞は『英雄』で

『英雄』とは『日之影　空洞』なのだ

日之影の戸惑いに、くすっ、と流は笑った

「ありがとね、日之影ちゃん」

「…いや。悪いな。俺は…生き方変えらんねぇわ」

「んーん。嬉しい。それでいいと思うよ。それがいいと思うよ。…さしあたってさぁ、悪いんだけど黒神めだか達を鍛えて欲しいのよ。今のあの娘たちじゃほとんど不合格でしょ?…多分このままじゃあの子ら日之影ちゃんのこと『思い出せない』だろうしね」

「…お前はそれでいいのかよ。言っちゃ悪いが、『英雄』が敵に回るんだぜ。ー13組だったか?ちらっと見たが…戦いたいとは思えなかったが、『負ける』とはさっぱり思わなかった。…正直、俺はお前らが何したいのかさっぱりだよ」

肩を竦める日之影に、流はけらけら笑った

「んー、んー。日之影ちゃん。日之影ちゃんってさ、寂しがり屋でしょ」

「…なんだいきなり。っつうかんなわきゃねーだろ、もう18だぞ俺は」

「年齢は関係ないかな。寂しいのって辛いよね。悲しいよね。日之影ちゃんみたいに『強く』なかったらさ、それだけで潰れちゃうくらい恐いよね。…こう言っちゃうとなんだけどさ。『過負荷/マイナス』って皆子供なのよ」

「…あん?」

「悪いことばっかりだったの。それを糧に成長するより早く、もっと悪いことばっかり起こったの。幸せ自体が信じられないのよ。

恐がりで

泣き虫で

寂しがり屋で

すぐ怒って

暴れて

泣いて

疲れて

また泣いて

基本的に『過負荷／マイナス』ってそういう子ばっかりなの。可愛いでしょ？」

ころころと笑う流。言葉を失う日之影に、流は大きく手を広げた

「だから皆愛してあげたいの。愛しくて、恋しくて。抱き締めてあげたいの。受け入れてあげるの。大丈夫よ。恐くないよ。寂しくないよって。そのために生まれたのが『愛し恋し／ラブアレルゲン』。私のための私に枷せた掟。私は私が私である内は、過負荷の少年少女を愛し続けるわ」

すぅ、と流の腕が下ろされる。既に周りに人影はなかった。歩いている内に人気のないところまで来てしまったらしい

「でも、さ」

くる、と流が回った。踊るように舞うように、くるくる回る。なんの意味もない暇潰しの行為。暇潰しというよ間潰しなのだろうが、落ち着いて話せ、と日之影は注意した

「それってさ。ただの慰めにしかならないのよ。根本的な解決にもならない。適度なガス抜きは出来るかもしれないけど、それだって私に出来ることって限界があるんだよね」

流は頭が悪い。変に思考を回したり、括弧付けて話したり、建前で話すのは勿論簡単な嘘を誤魔化すのも苦手だ

だから、今語ってるのは全て本心なのだろう

「だから――みーくんが頑張ってくれるんだ」

えへへ、と照れ臭そうに、嬉しそうに笑う流

「みーくんは凄いの。私なんかじゃ絶対に出来ないことをしちゃうの。みーくんは…ととと、ごめんね。これ以上話しちゃうと多分、日之影ちゃんが本気でみーくんと戦えなくなっちゃうと思うからさ。言えない。あ、でも安心しとね？多分、日之影ちゃんと私やみーくんが直接戦うようなことにはならないと思うから」

極上の笑みを浮かべる流に、日之影は寂しそうに笑った。

『英雄』でも友人独り救えない。それが、たまらなく寂しかった

「…おいおい。平和な日本の高校生が戦うだなんだと物騒だなおい。大人しく受験勉強でもしようぜ」

茶化すような日之影の言葉に、くすくすっ、と流は笑った

「そうだねぇ…。うん、夏休み中には全部終わるよ。そしたら…うん、私も進路真面目に考えるよ。第一志望はみーくんのお嫁さんだけどね！」

「姉弟だろうが」

「違った！総理大臣になって姉弟で結婚出来るようにする！」

「おー、応援してやらぁ」

2人、笑い合う

「じゃあな。次会うときは敵だがよー」

「んーんー！…終わってもずっと、敵だけど」

「「バイバイ」」

『英雄』と『悪役』は、笑いながら手を振り合って、

それに応じるように――物陰から飛び出した少年が、そっと日之影の腰元に触れた

「やって。みーくん」

「『ん、おっけー』」

この日。

日之影　空洞は最初で最後の友人を失った

「『友情を、親愛を、信用を、信頼を、信愛を、全て無かったことにした。…やってから言うのも何だけど、僕の【大嘘憑き／オールフィクション】にやり直しは効かないよ。…本当に良かったの？』」

「うん。日之影ちゃんの友達は私だけだったけど、私の友達も日之影ちゃんだけだったんだもん。真黒ちゃんとは『友達』っていうより同士だし。日之影ちゃんがもし少しでも私に遠慮なんかしてたら、私も遠慮しちゃうからね」

「…『…まぁ、お姉ちゃんがいいならいいけどさ』」

「みーくんみーくん」

「『なにかな？』」

「ありがとね」

「『別にいいよ。姉弟でしょ』」

「…んー、んー。みーくん、いつから動くの？」

「『…その内、かな。お姉ちゃん、手』」

「やーん照れ照れ。１８歳にもなって手繋ごうなんてみーくんったら甘えん坊さんっ！いいのかい？私は弟だって食っちまう男なんだぜだぜ？」

「『優しくしてね』」

「……が、がんばるですます…！」

「『お姉ちゃん、さっきの無かったことにするから。あとお姉ちゃんさえ良ければお姉ちゃんの中の日之影くんへの友情親愛信頼その他諸々。なかったことにするけど』」

「…それはいいや。そんなことしたら、『私が』寂しくて泣いちゃう」

「『そう？』」

「うん」

「『本当に？』」

「うん。心配してくれてありがとね。みーくん、大好きよ」

「『姉弟だからね』」

「私は…」

「『言わせねぇよ』」

「最近はフリーダムだからおっけーと思うよ…？」

「『いいから今日はもう寝なよ。会話にキレがなくてつまんない』」

「…ん。おやすみ」

裏話　日之影　ながし（後書き）

流＞スー…スー…

なじみ＞やれやれ。眠ってしまったのかな？まったく。ちゃんと仕事はしなきゃ駄目じゃないか

なじみ＞仕方ないから僕が変わってあげるよ

なじみ＞ヤンデレを拗らせた江迎さん。その暴走が流さんを襲う。偶然それを目撃し、訳のわからないまま流さんを助ける善吉くん

なじみ＞傷心の流さんに、善吉くんの優しさは暖かすぎた。天秤は傾き、幼い頃に抱えた想い／マイナスは溢れ出す

なじみ＞次回、ながしシスターマイナス9。ながし、ぜんきち

なじみ＞勿論、嘘だよ

ー9　終業式（前書き）

流＞…んーんーんーんー？

禊＞『どうかした？』

流＞…んっとさ。

『日之影ちゃんが過負荷の味方になったら、というＩＦ編書いて見ません？勿論日之影ちゃんもオリジナル過負荷で』

っていうお話が来てるんだけどさ

禊＞『需要あるのかな？』

流＞わかんない。需要あるならがんばろっか。完結した後になると思うけど

禊＞『じゃあ、感想板に『ＩＦ編読みたい！』って書き込みがいっぱいあったら頑張ろうね』

流＞…んーんー…

禊＞『どうかした？』

流＞日之影ちゃん無双しか出てこないよ。日之影ちゃんＢＡＳＡＲＡなら本多忠勝だもん

禊＞『サイズ的にもね』

ー9　終業式

「最近の幼女への規制が厳しいのは政治家先生が幼女のことを意識してるからなんだよっ！だから日本初の女性総理大臣を目指す球磨川　流はむしろ幼女を性的対象に見ることを推奨します！ってかちょっと前まで15歳が結婚適齢期だったりしたんだから別にいーじゃんっ！いや双方に合意が無い場合駄目だけどね！強姦していいのは女の子だけっ！女の子が男の子へ強姦しても犯罪にならないのよっ！」

「黙れ変態。それより生徒総会はじまっからスタンバイしてくれませんー？」

「…ぅぅ、見た目幼女ないーちゃんをフォローしようとしただけなのにぃ…」

「死ぬかテメェ」

「め、目が本気だよ…？」

さすがに恐怖を感じて後退り。ガチン、ガチンと音を鳴らす不知火の歯にがたがたぶるぶる。チッ、と舌打ちしてそっぽ向く不知火に胸を撫で下ろす流

「…随分嫌われていらっしゃるようですね」

「まぁ、アンタが好かれてる所なんか想像もできねぇーけどよ」

蝶ヶ崎と志布志が流の肩に手を置いて問い掛ける。流石に今、流に

無駄な怪我を負わせてもツマラナイと分かっているからか、そこに暴力の匂いは感じない

そして生徒が集まり、めだかが壇上に立つ。出待ちしている流や不知火、蝶ヶ崎に志布志がわくわくと身を震わせ、江迎はただひたすら壇上の善吉に（性的な意味で）生暖かい視線を向ける

『それでは、これより本年度1学期終業式を開始(ふぁいひ)ふる』

「ぶっ！？」×3

ギャグ漫画のように綺麗な顔が綺麗に伸びたのを見て吹き出す流、蝶ヶ崎、志布志の3人。他2人は無視

「『やっほー』」

壇上に一瞬で出現した球磨川が驚愕しながら距離を取っためだかの隙を付いてマイクを奪う。「きゃーんっ！みーくんカッコイーッ！」

「「黙れ」」突っ込まれる流

「『箱庭学園の皆さん。はじめまして！僕は球磨川禊！めだかちゃんの元彼でーっす！！』」

瞬間、舞台袖に隠れていた流が飛び出した。真黒から教えてもらった暗器術により偽装していた身の丈ほどもある巨大なハンマーを振り上げ

「双刀・鎩(カナヅチ)」

ぐちゃ

『ぅおおおおおおおおおいっっ！！？？』

あがる悲鳴。倒れる球磨川。気絶する気の弱い生徒たち

「ちなみにメイドイン罪口！この世界にあるとは思わなかったよ！」

巨大なハンマーをぶんっ、と肩に担いで胸を張る流。動揺しながらも急いで携帯を取りだし、救急車を呼ぶ生徒たち。その目の前でむくり、と頭を半分くらい潰しながら立ち上がる球磨川。再びの悲鳴

「『段取り滅茶苦茶だよお姉ちゃん。僕はもっこりした覚えも女の子にセクハラした覚えもないんだけどなぁ』」

「ふーんだ！暴力系ヒロインが最近の流行りなんですぅー！みーくんのお馬鹿！あとネタが分かってない生徒の皆は「ハンマー」「ジャンプ」「もっこり」でググれカス！」

平然と頭部陥没を無かったことにした球磨川がゴキゴキと首を直し、あまりのグロさに生徒たちが卒倒する中、めだかは苦い顔で球磨川に話し掛ける

「…鳥肌の立つような冗談も身の毛もよだつような混沌としたコントも止めてもらおうか。球磨川姉弟。このような場でで何の用だ。今、壇上に上がってよいのは生徒会役員だけだぞ」

「あ、それ終わるから」

けろっとした顔で巨大ハンマー――双刀・鎚をスカートの下に仕舞う流。球磨川ははぁ…と物憂げに溜め息を吐きながら

「『箱庭学園学校則第４５条第三項に基づき生徒会長黒神めだか。きみに解任請求を宣言する。尚、違反項目は生徒会則第２条、【生徒会執行部は会長・副会長・会計・書記・庶務の５名よりなり、会長は当選後迅速に他の役職に相応しき者を選定しなければならない。】であり、当選後数ヶ月経過しているというのに副会長不在という現状を見ての判断であり、生徒会長としての業務不履行である』」

「勿論解任請求に辺り全校生徒の過半数の署名も集めてあるよ！」

ばさっ！と大量の書類がめだかの前に広げられる

それを見て慌てるのは阿久根。投げ捨てられた書類をかき集めて必死に目を通す。あまりの哀れな『特例／スペシャル』の姿に舞台袖で笑う過負荷が２人

「っ…！？馬鹿な！署名している生徒が…全員マイナス１３組だと！？」

「そっ！皆大好き民主主義！ただし文字通りの幽霊生徒！１３組とは違う意味でね？」

驚愕する阿久根ににこにこ笑いかける流。そんな姉に微笑みながら嘆息する球磨川

「…名ばかりの署名を集め過半数か。随分と大した『みんな』だな球磨川」

「『おいおい、名ばかりだろうと人数合わせだろうとこの箱庭学園の誇るべき生徒だぜ？中には子供のころから入院ばかりで一度とし

て学校に来れず、学校に来たいにも関わらず重病を抱えているせいで名前を置くことしか出来ない生徒や、夜な夜な性的虐待を繰り返す父親に監禁されてるせいで学校にすら来れない生徒だっている【かも】しれないんだ。差別するなよ』」

「……っ！！」

脂汗をかきながら球磨川に対峙するめだか。その目前に、すぅ…と巨大なノコギリが差し出される

「はいはい。また乱神だ改神だと暴れるかもしれないから白線の内側までお下がりください。ちなみにこれは王刀・鋸（ノコギリ）、ナカヨクシテネ。早いとこ皆纏めて解任なんだからお疲れ様しなよー。学校則第４５条第七項により会長の解任に伴い役員も解任されるんだから」

目の前で揺れるノコギリの冷たい刃に一層の焦燥を見せるめだか。その冴え渡りすぎる頭脳が、球磨川たちの目的を理解した

「…第４５条には他にも補則があったはずだな。第１３項『解任責任』『行事運営に支障をきたさぬゆう解任請求者は次期選挙までの間臨時で生徒会長わ務めなければならない――』」

「『そう。転校してきたばかりで本来立候補資格のない僕でも、この方法なら生徒会長になれる』」

くつくつ、といつもの底知れぬ笑みで球磨川はめだかに手を差し出す

「『さぁめだかちゃん。そのかっこいい権力の象徴みたいな腕章を、皆の分君がその手で外して、大嫌いな僕に渡すんだ。…ちゃんと役員の皆には謝るんだよ？「無能な生徒会長ですまなかった」ってさ』

」

「貴様…っ！どこまでマイナスなのだ…！！」

憤怒の表情で自分を睨むめだかから視線を外し、球磨川はあまりの自体に呆然としていた他の執行部役員に目を向ける

「『残念ながら君たちの生徒会活動は終わりだよ。無能な先代と違って、僕はもう役員を全員選定し終えているからさ』」

出待ちしていた江迎、志布志、不知火、蝶ヶ崎が球磨川を中心に整列し、そっと視界から外れた流がそれっぽいＢＧＭをかける。

「『僕達が新生徒会だ』」

…ちなみにＢＧＭは遊○王で有名なアレだった。流のセンスの無さが露呈する

それはともかく、並んだメンバーの中に親友の姿を見つけた善吉が驚愕する

「なっ！えっ…？不知火…っ！？どうして…！？」

「…なるほど。不知火がソチラ側か。納得いった。転校したてにしてはやけに校則や生徒会則に詳しいと思ったのだ」

「…私も一応この学校の生徒なんだから、知っててもおかしくないと思わなかったの…？」

「戦場ヶ原三年生の成績を省みるにそれは無いと判断した」

「絶望したっ！後輩にばかにされる自分の馬鹿さに絶望したっ！」

「『はいはいお姉ちゃんは隅っこで大人しくアメ舐めててね』」

素直に球磨川の言う通り、江迎から飴を貰って壇上の隅っこに向かう流。シリアスシーン（笑）になりつつあるのはこいつのせいである

「『さてさて。お馬鹿なお姉ちゃんや引退した人達の相手なんかしてる場合じゃないや。早速だけどいい機会だから新生徒会長としてのマニフェストを発表しなきゃ！』」

と、マイクに向かう球磨川。江迎のポケットから勝手に飴を奪う志布志。迷惑そうな顔をしながらも受け入れる江迎。お前ら真面目にやれと突っ込みたい蝶ヶ崎

「『えーっとまずは
・授業及び部活動の廃止』」

一斉に凍りつき、ざわめき出す体育館内

「『・直立二足歩行の禁止
・生徒間における会話の防止
・衣服着用への厳罰化
・手及び食器を用いる飲食の取締り
・不純異性交遊の努力義務化
・奉仕活動の無理強い
・永久留年制度の試験的導入』」

「あとあと！

・近親相姦の積極的推奨！
・希望者に限る不純同性交遊の実地講習！
・生徒会及びマイナス１３組の露骨な優遇処置！」

口を挟んだ流の言葉に若干目を輝かせ、テンションを上げるロン毛にーちゃんがいたがスルー

「『…以上１１点の実現に向けて一緒懸命がんばることをここに誓います！皆さん応援してください！ちなみに前生徒会の負の遺産である目安箱は、当然この僕が引き継ぎますね。困ったことがあったら遠慮せずになんでも言ってください。２４時間３６５日。僕は誰からの相談でも受け付けます！』」

あんまりと言えばあんまりな球磨川の言葉に、もがながついつい口を滑らす

「あなた一体何がしたいの…？どんな目的があってこんなことするの…？」

「『ん？目的？生徒会則第１７条かな。全校生徒の強制召集権。登校義務の無い１３組生徒も一網打尽ってわけさ』」

「…っ！？」

あっさり目的をバラしたことにも、そしてそのあんまりな内容にも。驚愕に硬直する生徒会執行部

そんな中、めだかだけは目を瞑ったまま天を見上げ、ただただ瞑目した

「黒箱塾塾則第百五十九項『塾頭解任請求ニ関スル項目』」

「『……黒箱塾？』」

始まったやり取りに、流が露骨に顔色を変えた。「あ、ヤベ…」声にも出した。

「…うっわヤバ…。ジャンプキャラとまともにトーナメントで戦うことになっちゃったよ…。あんしんいんさんに原作知識持ってかれなければなぁ…。んーんー…？、でもむーちゃんのことを考えるとこれでいいんだっけ？んーんーんー？」

首を傾げてうんうん頭を捻る流。その間に話し合いは終わったらしく、ふぅ、と溜め息を吐いた球磨川が大袈裟に肩をすくめた

「『おーけーおーけー分かったよめだかちゃん。まぁ、僕は君たちより先輩だしね。後輩にチャンスを上げる優しさだってないわけじゃない。そも君が我が儘を言って副会長を決めていなかったからこそ僕に付け入られた、なんてことは水に流してめだかちゃんに従ってあげようじゃないか。でも、こんなことは今回だけだよ？』」

「…異存はないんだな？」

「『ない、とは言わないよ。でも、冥土の土産という言葉もあるし――』」

ちらり、と球磨川は顔を真っ青にした『普通』の生徒たちに視線を投げる

「『最強無敵の生徒会長を真っ正面叩き潰したら――この子たちがどんな顔をするのか、ちょっと見てみたいんだよね』」

「くっ…」

苦い顔で、けれどどうにかイーブンに持ち込んだ事で平静を取り戻しながら、めだかは全身に活力を入れる

「ならば規定に基づき、たった今、この瞬間より新生徒会と現生徒会の決闘を開始する」

そのとき、流に電流走る。言うのか。言うのかっ！？本当に言うのかっ！？期待にわくわくと身を震わせる流。流の様子を見てどんな言葉が飛び出すかと期待する志布志、蝶ヶ崎

「生徒会選挙――否、」

そんなわくわくしている過負荷にも、自信満々で恥ずかしいセリフを吐かんとするめだか（お嬢様）にも呆れたような冷めた視線を向ける不知火

「生徒会戦挙だっ！！」

こうして、酷く生温い空気で戦いは始まった

ー９　終業式（後書き）

流＞不用意な発言により全政治家先生を敵に回した流お姉ちゃんっ！

流＞襲い来るア○ネスの群れについに力尽きた流さんの前に立ち塞がる非実在青少年存在！

流＞その時、人吉せんせーはどう動くのかっ！？

流＞次回！ながしシスター－１０、庶務戦！

流＞きっとこんな感じだよ！多分っ！

禊＞『いやいや、ねぇよ。ちゃんと次回予告の台本に目を通そうよ』

流＞…それはそうと真黒ちゃん

真黒＞なんだい？

流＞…今からでもこっちつかない？ほーら近親○姦推奨礼状～

真黒＞…くっ！屈しないぞ～！！悪魔の誘惑には屈しないぞ～！！

流＞なんだかんだで善吉ちゃんとか人吉せんせーとか、雲仙くんと

雲仙（姉）ちゃんとか、楽しめる人結構いると思うよ？

真黒＞がんばれ僕の心の天秤！

－１０　庶務戦　Ａパート（前書き）

流＞本当はもっと短い予定だったのになぁ。みーくんが無駄に長セリフ喋るから前後編なっちゃったじゃん

禊＞『僕は悪くない。というか僕もお姉ちゃんもちょっと遊びすぎかもね』

流＞でもそんなのかんけぇねー！！古いね！懐かしいね！みーくんほらほらブーメランパンツ！はいてはいて！

禊＞『庶務戦終わったら善吉ちゃんに履いてもらおう』

流＞で、縛ってむーちゃんにプレゼントするのね！？任せて！

禊＞『死併せになって欲しいね』

流＞うんうん！幸せになってほしいね！！

禊＞『触れてもアウト、触れられてもアウト。まさに死と隣り合わせ…うかつにえっちも出来やしない』

流＞…え、えっちとかするのは結婚してからだから大丈夫だと思うよ…？

―10　庶務戦　Aパート

準備を整えた生徒会チーム――めだか、善吉、名瀬、古賀、人吉（母）たちが受付会場に向かってみれば、どうやら先に来ている者たちがいるらしい。中からは声が響いてくる

「私のターン！ドロー！…よしっ、超電磁砲に魔法カード：シスターズを発動！超電磁砲トークンを空いてるフィールドに可能なだけ召喚！更に超電磁砲トークンを4体全てリリースして『一方通行』をアドバンス召喚！このモンスターは2体リリースで召喚可能だけど、追加でリリースしたモンスターの数だけ攻撃出来る！その上戦闘耐性プラス効果破壊耐性も持ってるよ！バトル！一方通行で」

「『罠カード：幻想殺しを発動。相手がこのターンに発動した魔法、罠、モンスター効果を無効にし、その対象となったモンスターを幻想殺しのコントローラーの手札に加える。超電磁砲は貰うよ』」

「にぎゃーっ！？超電磁砲にフラグ立てられたー！？しかも『一方通行』が墓地にっ！？墓地蘇生めんどいのに！魔法カードを一枚手札から捨てて墓地から背中を刺す刃を守備表示で特殊召喚！　カードをセットしてターンエンド！」

「『僕のターン。ドロー。…墓地から罠カード：幻想殺しを除外。手札から速攻魔法：幻想殺しを除外。デッキからモンスター：幻想殺しを特殊召喚。このモンスターは魔法、罠カードの効果で破壊されない。さらにモンスター：幻想殺しの効果によりさっきフラグを立てた超電磁砲を特殊召喚。お姉ちゃんのデッキに押し付けた禁書目録を特殊召喚。通常召喚で禁書目録をリリースして女教皇をアドバンス召喚』」

「なんでそんな事故率激高デッキで回るのー！？」

「『悪いカード引いたらなかったことにして連ドローしてるからね』」

「ずるっ！？」

「『女教皇の効果で背中を刺す刃を破壊。七閃っ、てね。全軍直接攻撃』」

「うわわっ！？わ、罠カード冥土返しで手札から打ち止めを捨てて墓地から一方通行を特殊召か…」

「『墓地から禁書目録を除外し相手の魔法、罠カードの発動を無効化し、破壊』」

「うぼぁー…」

「この決闘、球磨川（弟）さまの勝利でございます。尚、連ドローの件は私を含め他の選管の者も認識出来なかったので不問にいたします」

なんか遊んでた

長者原も含めて3人で遊んでた

かくん、と全身から力が抜けるのを感じながらも、必死でふんばりながらめだかはきっ！と球磨川姉弟を睨む

その視線に気付いたのか、へらっ、と笑った球磨川が手を上げる

「『遅かったねめだかちゃん。時間厳守だぜ？生徒会長たる者5時間前行動が基本だよ』」

「…球磨川。それでは皆と時間が合わなくて一人ぼっちだぞ」

「マジレスする黒神めだかが可愛く見えてちょっと困った。どうしよう」

真顔で頭を抱える流。とりあえずそれは放置してめだかは室内を見回す

「…貴様らだけか。となると庶務はそこの戦場ヶ原改め球磨川三年生（姉）か？」

「『いや。僕だよ。本当はお姉ちゃんもいない予定だったんだけどね。ほら、僕って恥ずかしがりやだろ？身内に見られてたら全力で庶務戦に望めないからね』」

「でもでも私が我が儘言って付いてきたんだ。あ、善吉ちゃんは感謝してよね！むーちゃん来たいって言ってたの必死に止めてきたんだから！」

「…むーちゃんって誰だよ」

ちなみに江迎はまだ善吉に名乗っていなかったりする

「『それはともかく！人吉先生見っけ！お久しぶりですねー！こないだチラッと見かけたような気がしたんですけど今にも善吉ちゃん

押し倒そうとしてる所に見えたんで挨拶出来なかったんですよね！それであの後善吉ちゃんの筆下ろししたんですか？』」

「…ははっ、冗談に決まってるじゃない。いくらなんでも血の繋がった息子の筆下ろしなんかしないわよ。それよりも――」

瞳はちらり、と球磨川の背後に隠れるように、瞳の視界から外れ続ける流に目を向ける

・・・・・・・・・・・・

「――そっちの娘は誰かしら？」

「…え？」

その言葉にきょとん、と呆けたのは、流の方だった。戸惑ったように瞳を見て、瞳の視線に警戒色しかないことに気付くと、更なる困惑を深めてちらりと球磨川を見る

「『…ま、そういうこと』」

「――さっすがみーくん！大好き！」

喜びの余り思わず、といった風に球磨川に抱き付く流。そしてその直後に顔を真っ赤にして飛び跳ね、部屋の隅っこで体育座りする。

「意味が分からない」と表情で語る生徒会チームとは裏腹に、球磨川は小さく、口許を歪めてくすくす笑うと、

「『さて、伏線張りはこのくらいにして、と。今日はよろしくね善吉ちゃん。僕は正々堂々真っ向からマイナス思考で戦うよ』」

「――へっ、中学の頃より随分直接的になったじゃねーか。回りくどいよりよっぽどやり易いな。俺は真っ向から威風堂々プラス思考で迎え撃つぜ」

緊迫した雰囲気が満ちる室内。めだかがギラギラした目で球磨川を睨むが、どうにか自制しているようだ

だが、それが球磨川には気に入らないらしい。球磨川は皮肉げな笑みを浮かべると、めだかに顔を向ける

「『不満そうだねめだかちゃん。僕と直接戦えないがそんなに悔しいかい？それとも僕が善吉ちゃんなぶる姿がもうその優秀な頭で推測出来てるのかな？』」

「っぅ――っざけるなっ！！貴様は一体何を考えている！？何が目的なんだ！？貴様の考えていることがさっぱり分からん！貴様は嘘ばかりだ！どうせエリート皆殺しとやらも嘘の目的なのだろうっ！？『過負荷／マイナス』だなんだとふざけたことばかり言う暇があるなら貴様の真の目的を離せ！」

激昂するめだかの姿に、ふぅ…と球磨川は溜め息を吐き

「『おいおい、それを言うならめだかちゃん。君の目的は一体何なんだい？人生全てを他人の役に立つために生まれてきた、と豪語している君だけどさ、それって果たして目的なのかな？知っているよ？それは善吉ちゃんが君に与えた指針であって、君が自身で考え自心で生んだ目的でもないじゃないか。…はっきり言っちゃうとさ』」

そこで球磨川は一度言葉を切り、

めだかを、嘲るように笑った

「『君の人生、借り物じゃないか』」

「――――っ！！」

一瞬にして白く変わるめだかの髪。今にも飛び出さんとしたためだかの前に、そっと音もたてず、静かに流が立つ。流を盾に、球磨川は言葉を重ねる

「『うんうん。怒るよねぇこんなこと言われたら。…そうだなぁ。「人生はプラスマイナスゼロ。幸せがあるから不幸がある」みたいなセリフがあるじゃないか。エリートにも不幸があるし、幸福な人間にも必ず不幸はある。けれどさ…そんなこと言えるくらい余裕がある人間ってさ。必ず『プラス』なんだよ。真の意味で『過負荷／マイナス』だった僕らは、幸せ／プラスがあったところで不幸／マイナスが帳消しになるなんて思えたことはないよ。むしろ呪う。幸せ／プラスを味わった後の不幸／マイナスはより辛くなるからね。「こんな辛い／マイナスな目にあうくらいなら、幸せ／プラスになんてなりたくなかった」「こんな幸せ／プラスを味わったら、不幸／マイナスがより辛くなるじゃないか」ってさ』」

あまりのセリフに全身から冷や汗を吹き出し、数歩後ずさっためだかに追い討ちをかけるように、球磨川は言葉を重ねた

「『だからさぁ、味わって欲しいんだよ。皆に。幸せ／プラスに、過負荷の、マイナスの気持ちって奴を分かって欲しいんだよ。ただ哀れまれ疎まれ憎まれ呪われる僕らの気持ちを、知ってほしいだけ

なんだ』」

「ま、」

にこっ、と笑った流が、そっと球磨川の手を握る。そして、球磨川姉弟はにこっと戦慄した生徒会チームに向けて笑いかけた

「「『結局全部、嘘だけど』」」

「――っさまらぁっ！！」

再び激昂するめだか。対して球磨川は困ったように肩を竦め、

「『そこまで本気にしないでよ。とにかく僕はめだかちゃんとは戦えないよ。実は中学の頃フルボッコにされたのがトラウマでさ、とてもじゃないけど戦う勇気なんかないよ。君の相手は他の過負荷／マイナスが勤めるから安心して善吉ちゃんが僕に螺子伏せられる場面を指をくわえて見ていればいい』」

「――なら私が庶務戦に出てやる！貴様だけはこの私が」

「時間です」

唐突に、２人の間に割って入る長者原。先程まで部屋の隅で置物に

なっていた人物とは思えないほど機敏な動きに、一瞬動きを止める一同

そして長者原はめだかに顔を向け、

「残念ながらルールにより黒神様が庶務戦に出ることは叶いませんが、それ以外でわたくしめに不満がございますれば善処いたしますので忌憚なきご意見を頂戴願いたく存じます。わたくしは僭越ながら今回の生徒会戦挙を管理させていただく選挙管理委員会副委員長、2年13組長者原融道と申すものです。短い間ですがどちら様もよろしくお願い致します」

「人吉せんせーと善吉ちゃんの為に捕捉すると、長者原ちゃんは雲仙くんのお友達で、異常・『公平』を抱える『異常／アブノーマル』だよ。私たちは一切細工しないけど、その分現生徒会チームもリカバリできないよ、って話」

ころころ楽しそうに笑う流に、冷や汗をかく生徒会チーム。しかし、善吉はすぅぅ…と息を吸い、きっと決意の宿った目で球磨川姉弟を睨み付ける

「大丈夫だよめだかちゃん。俺が勝つから何の問題ない。ってよりも…」

にぃ、と善吉が勝ち気な笑みを浮かべる。ちゃっかり流はそれを携帯で撮影、江迎に転送。二秒で返ってくる感謝メール

「敵が球磨川の方が俺は勝ちやすい。女の子傷付けるよりもよっぽと気が楽だぜ。だからめだかちゃんはいつもみたいに無駄に偉そうにどっしり悠然と構えていてくれ」

「エロそうに？」

「偉そうにだよ！」

無駄に軽口を叩いて雰囲気を台無しにする女。球磨川　流

こほん、と善吉は咳払いし

「球磨川。お前が何をほざこうと、何を考えていようが俺は興味ねぇ。誰もお前のことは理解出来ないし、お前も理解してもらおうなんざ思ってねぇんだろ。だがな、ひとつだけ言っておく」

「「『人生はプラスだ、かな？』」」

球磨川姉弟の重なった言葉に一瞬怯むも、善吉は強い意思で嫌悪感を拭って頷く

「…っ。そう、だ」

対して、球磨川姉弟はけらけら笑った

「人生はプラス…ね。誰も人生はマイナスだー、なんて言ってないけどね」

「『仕方ないよ。善吉ちゃんは熱血キャラだもん。でもそんな善吉ちゃんがいつまでその言葉を貫けるか試してあげるよ』」

にらみ合う球磨川姉弟と善吉。そうして、長者原が口を開く

「それではただいまより生徒会戦挙第1回戦。庶務戦を始めさせていただきます。ちなみに本選挙は本校の前身である黒箱塾の塾則に基づき行われますのでその点をあらかじめご了承いただきたく存じます」

「長者原ちゃんなーがーいー。時代的に色々無理あって選管が色々アレンジしてるけど異議ありますかー？って端的に聞きなよー」

「…まぁ、その通りです。黒神さま、球磨川さま。ご異議はございますか？」

「異議なし」「『異議なし』」

端的な返事に頷く長者原

「結構。なお戦挙中に生じた負傷及び死亡はすべて事故として処理致しますがご異議はございますか？」

「『異議なし』」「……、異議なし」

「結構。では最初に挑戦者である球磨川さまに庶務戦の試合形式を選んで――」

「『巳だ』」

セリフの途中で球磨川が選択したことに、若干の驚きを交えながら長者原は問う

「…『巳』のカードでよろしいのですか？」

「『うん。選ぶカードはもう【決まってる】んだ』」

ちらり、と球磨川が流を見る。流は自信満々でそれに頷いた

「…よろしいでしょう。さすが球磨川さまと言った所でしょうか。初っ端でこのカードを引ける人間はあなた様の他にはおりますまい」

長者原が『巳』のカードをめくる。書かれた文字は――

「庶務戦の形式は『毒蛇の巣窟』に決定致しました。これは我々の用意した13の決闘法の中で、もっとも残虐なルールで行われる選挙でございます」

－１０　庶務戦　Ａパート（後書き）

カットイン：『男達の荒波』をこっそり盗み出す江迎ちゃん

～ＣＭ中～

遡ること１２００年。

世は戦乱。生まれ落ちた黒狼の使い魔

人を喰らい、術を担い、魔性の美を持つ魔獣は世を渡り――

「立派な主婦になりました、と」

「…いや、事実なんじゃが…もちょっとかっこよくしてくれぬか？」

原作：ネギま

著者：人春

タグ：ダーク詐欺を地で行くほのぼの系ファミリーＳＳ「犬っ娘の話」っ！

にじふぁんにて連載中！

「魔改造エヴァンジェリンがテラチート乙、なのじゃ」

「ほっとけ」

－１０　庶務戦　Ｂパート（前書き）

↓移動
＜＜＜＜受付会場＜＜＜＜グラウンド

流「ねぇねぇアナタたちさぁ、メンバー違くない？あの…名前忘れたけどメガネの娘と前髪長い子はどうしたの？」

善吉「…前髪…。阿久根先輩と喜界島ならあんたらに勝てるように修行中だよ。黒神真黒プレゼンツ凶化合宿の真っ最中だ」

流「…ふーん。真黒ちゃんも内臓無いのに頑張るねぇ。それで、日之影ちゃんとは合流した？」

めだか「…む？日之影…？…何故貴様が日之影前会長のことを知ってる？…いや、何故覚えている？」

流「友達だったからね。それより真黒ちゃんだけじゃ凶化合宿するにしても足りないでしょ。ちゃんと日之影ちゃんに協力して貰った？」

めだか「…挑発のつもりか？だが、残念だったな。既に日之影前会長は我々の味方だ。…私としても、まさか日之影前会長が『自分から』我々に協力してくれるとは思っていなかったがな」

流「…ふーん」

禊「『だから言ったじゃないか。後で辛くなるよって。言ってしまえば日之影ちゃんが僕らを敵視しなかったのは、お姉ちゃんという『過負荷／マイナス』にプラスの感情…友情やら信愛を抱いていたからであって、それ（プラス）を無かったことにした以上、日之影ちゃんは僕らにマイナスの感情しか残らないに決まってるだろ？』」

流「…ん。でも淋しいねぇ」

禊「『ま、気持ちは分かるよ。高貴ちゃんが改心した時に僕も味わったからね。それより、色々無かったことにした次の日に日之影ちゃんとバトルしたよ』」

流「…ぅえ！？いつの間に！？」

禊「『いやぁ強いねぇ彼。でも、脆そうだ。お姉ちゃんが彼を過負荷に誘いたいって気持ちが理解出来たよ。まぁ、定員割れしてるからいらないけどね』」

流「まぁ、それを言ったら私もお邪魔ぷよだけどね。どっちが勝ったの？」

禊「『僕ら／マイナスが勝てる訳ないじゃん。日之影ちゃんが逃げて終わりだよ』」

流「ってことは時系列は変わったけど原作と変わりないのかなぁ…？みーくん、上手くやってね？」

禊「『勿論。皆まとめてドラッグオンドラグーンのクリア後みたいな気持ちにさせてあげるよ』」

流「らいぶあらいぶってのでもいーよ？」

―10　庶務戦　Bパート

「決戦舞台『毒蛇の巣窟』。縦10m×横10m×深さ10mの縦穴の底に無数のハブを放してあるフィールドに、ポールに金網をはめ込んだだけの不安定な足場の上で人吉様の腕に巻かれた腕章を奪えれば球磨川様の勝利、守りきれれば人吉様の勝利にございます。奪取または守防にあたって、いかなる手段を用いようとも構いません。また、制限時間は特に設けておりません。しかし、あまり強引かつ乱暴な手段を取ったり、逆に慎重になって逆に時間をかけ過ぎたりすると、当然リングとなる金網はどんどん穴の底に沈んでいきます。そして金網が底に達すれば勿論両者とも隙間をすり抜けた獰猛な毒蛇の餌食となるわけでございます。この場合は両者とも失格となります。ちなみにルール上ギブアップは認められておりまして、これ以上金網が沈むと蛇の牙が届きそうで怖い。または相手にはどうしたってかなわないと思われた時には、その旨申告していただければその時点で決着といたします」

長者原の長台詞にちょっとうとうとしていた流がリングの上に倒れ込みかけ、球磨川がそちらを見すらせずに捕まえる。そんな気の抜ける光景を努めて無視しながらめだかはルールの確認をする

「…ちょっと待ってくれ、長者原二年生。貴様らしくもない。そのルールはいかにも不公平であろう」

「ところがぎっちょんっ！黒神めだかは善吉ちゃんに勝利条件がないのが不公平って言ってるんだろうけど、善吉ちゃんの勝利条件はみーくんに「まいった」と言わせることなんだよ！これでも確かに不公平だけど、いつだってチャンピオンは挑戦者にハンデを着けな

きゃ駄目なのよん?クーデターを起こされる時点で現生徒会は問題アリな訳だから、例え問題アリでも俺たちゃツエー!出来なきゃこの戦挙で現生徒会の首を繋ぐ理由がないのさ!」

さっきまで眠りかけてた流がいきなり口を挟んでくる。それを迷惑そうにしながらも、しっかりと頷く長者原。あんまりと言えばあんまりな言い草だ。更に『あの』球磨川に「まいった」と言わせることが困難だと分かっているが故に、黙り込む現生徒会。そんな中、金網の隙間から荒れ狂う無数の蛇を見ていた善吉の肩を、優しく球磨川が叩いた

「『なぁ、善吉ちゃん』」

「っ!」

身体に触れる過負荷の気配に息を呑む善吉。そんな善吉に嘆息しながら、球磨川は言う

「『僕、わざと負けてあげよっか?』」

驚愕に硬直する善吉。けれど球磨川は、なんでもないことのように言葉を繋げる

「『前にも言ったけどさぁ、お姉ちゃんアレでも女の子だからあんまりグロいの見せたくないんだよね。善吉ちゃんも痛いのとか辛いの嫌でしょ?ここらで楽になっとこうぜ?』」

バシッ!と球磨川を弾き飛ばし、善吉は球磨川を睨む

「球磨川…!てめぇって奴は…!」

「『なぁに怒ってんだよー。カルシウム足りてないんじゃねーの？さっきめだかちゃんを諌めてたクールな善吉ちゃんはどこに行ったのさ？…あと、先輩としての忠告だ。そうやって僕を不快に思ってる内は、百年かけても君は僕らと向き合えない。受け入れる…いや、よく識ることだよ、善吉ちゃん』」

ちらり、と流を見る球磨川。流は球磨川が自分を見ていたことに気付くと、満面の笑みで小さく手を振る。それに後ろ手で振り返しながら、球磨川は一歩一歩進んでいく

「『不条理を。理不尽を。堕落を。混雑を。冤罪を。流れ弾を。見苦しさを。みっともなさを。嫉妬を。格差を。裏切りを。虐待を。嘘泣きを。言い訳を。偽善を。偽悪を。いかがわしさを。インチキを。不幸せを。不都合を。風評を。密告を。巻き添えを。二次被害を。愛しい恋人を抱き締めるように、暖かい親子の抱擁のように、仲の良い兄弟のじゃれあいのように。全て引っ括めて愛せた時、』」

がしゃり、と球磨川は金網に足を踏み出した

「『その時、初めて僕らと同じ目線になれる』」

躊躇なく金網に乗る球磨川に、全員が戦慄する中、

名瀬は、球磨川の言葉に違和感を覚えた

何故、そんな台詞をここで吐くのか

良いも悪いもない不気味な台詞吐いたようにしか見えないその言葉。

その言葉の裏に何かを感じて、覆面の下で眉根を寄せる名瀬

「あんまり考えたらだめよ、よーかちゃん」

「！？」

背後から沸いて出た流が、その胸を鷲掴みにした。昔の負い目もあって抵抗も出来ず、成されるがままに揉まれる名瀬

「…む、でか…。身長も考えると一番巨乳じゃね…？…っと、ごめんね。それよりあんまり考えないでね。貴女が正解を理解しても意味ないの」

「…あん？そりゃあどういう」

「あーっ！私の名瀬ちゃんから離れろ変態っ！」

ベリィッ！と流から引き剥がされ、古賀に抱き締められる。再び思考を中断せざるを得ない名瀬。とりあえず沸いた疑問は脇に置き、自分の『とっておき』の活躍に視線を向ける

名瀬が視線を試合に集中した時、丁度善吉の踵落としが球磨川の肩に直撃した

ガッシャァッ！と凄まじい音と共に沈み込む金網。球磨川も善吉が普通に攻撃してきたことに驚きつつ、いつも通り精神をいたぶる

「『いったぁ…。善吉ちゃんと違ってモヤシっ子なんだからいきなり暴力はやめ』」

言葉の途中で顔面に蹴りが入る。グシャ、と水っぽい音と共に、球

磨川は鼻から鮮血が溢れるのを感じた

その光景に驚きを隠せない一同。中でも名瀬は、内心でガッツポーズを決めながら驚く…フリをする

「す…すげぇ！モロに顔面に蹴りが」

「んーんーん、なんかこれ凄い久しぶりに使った気がする。さすが名瀬ちゃん。善吉ちゃんの肉体『改造』もかなーりの完成度だねぇ」

「…ぁ？」

流の言葉にぽかん、としたのも束の間。じぃいい…っと自分に注がれる視線×3に耐えられず、逆ギレ気味に名瀬は肩を竦めた

「…まぁ確かに人吉を鍛えのは俺だけどよぉ。なぁんでそれをマイナス側の連中が知ってるんですかぁー？」

「目隠しした善吉ちゃんとスパーしたってボクシング部の人たちが話してるの聞いてたし。後は消去法。一歩間違えばこんな簡単に殺されちゃうような戦法を、真黒ちゃんや日之影ちゃんがやるわけない…やれるわけないもの」

「…ぐぅ」

ぐぅの音も出ない。とはこの事か。人の口に戸は立てられないし、流はこちらの頭脳――真黒や日之影のことをよく知っているのだ。そう、下手をすれば名瀬よりも。消去法で当たりをつけるのもそう難しくは無かったのだろう

せっかくの決め台詞を潰されて不機嫌になる名瀬

それはともかく、善吉は目を閉じたまま球磨川に啖呵を切った

「どうだ球磨川先輩?識るも糞もねぇ!最初からお前なんか眼中にねーんだよ!」

「『…おいおい生徒会役員が率先して1生徒のシカトを推奨とか…救えないね、この学校…。少女漫画並みにドロドロだよ…。ま、でも』」

にぃ、と球磨川は口から血を垂らしながら笑った

「『そんなに見たくないなら、見なきゃいいさ。最も、その元気がいつまで続くか分からないけどね!』」

「この戦いが終わるまでだよ!」

球磨川の螺子が善吉に向けて投げ付けられる。遠距離攻撃を持たない善吉はそれをサイドステップで避け、気配を探って球磨川に走り寄る

「『だからお前はアホなのだぁっ!』」

どすっ!と善吉の足下で音が鳴る。金網を突き破った巨大螺子に足を引っ掻け、つんのめる善吉

「ぐっ!?」

「『奇策なんか主人公チームのやる技じゃないぜ？』」

すっ、と球磨川の手が善吉の顔をかすめる。それに違和感を覚えがらも、無理に腰を捻って球磨川に蹴りを叩き込む

しかし、名瀬の表情は苦い。「思っていたより喧嘩慣れしている」それが誤算だった。

そして流は首を傾げた。「こんな展開だったけ？」と

流は既に忘却の彼方にある原作知識に頼りすぎて、肝心なことを忘れているのだ

流の存在によるイレギュラー。子供の頃から禊とは違うベクトルにマイナスが振り切れている流の影響で、よもや『流を守るために』禊が喧嘩擬きに明け暮れたことがある、等という『原作』は、無かったのだ

そして、それに気が付くことはない

その後も球磨川は不自然に善吉の身体を擦り、反撃に善吉が全力の蹴りを叩き込む、という奇妙な関係が暫く続く

「らぁっ！」

「『ガッ…ァ…！』」

蹴り飛ばされ、球磨川の身体が内壁に衝突する。凄まじい音と共に、ボタボタと鮮血が穴の底に落ちた

「…ま、上出来だぜ。ところで人吉っ！バカスカ蹴りすぎんなよ！金網の方はもう結構沈んでるぞ気をつけろ！」

「っと、そうだった。おれば球磨川を降参させなきゃなんねーんだったな」

敬愛する師匠の言葉に我に返った善吉が、壁にもたれ掛かって動かない球磨川を目を閉じたまま睨む

「球磨川！これ以上蹴られたくなかったらこの辺で降参しとけっ！そうやって座ってても俺にはお前が何してるのかはっきりくっきり感じ取れるぜ！」

対して、今まで動かなかった、ボロボロの球磨川は

ひょい、と

普通に立ち上がった

『！？』

驚愕する一同。対して球磨川はパンパン、と背中の土を落としながら

「『降参するなら今の内、ねぇ…。それを言うなら善吉ちゃん、今ならまだ間に合うぜ？大人しく僕に腕章を渡しとけよ』」

「…カッ！何言ってやがる！傷が治っている理由はよくわかんねーが！それならそれでやりようが…！？」

こきん、と球磨川は首を鳴らし

「『やれやれだぜ』」

ぱちん、と指を鳴らした

「…？なんだ？奴は一体何をしたっ！？善吉！どうしたっ！？」

「…はったりだ！何ともねぇ！」

めだかの問いに答える善吉だが、その声にはありありと不安が浮かんでいる

だから、球磨川は忠告してあげることにした

「『おいおい、何とも無いわけないだろ？その綺麗なお目め開いてよっく自分の身体を見てみろよ』」

「ああっ！？何言って…！？」

善吉の身体が硬直する

目は、開いた

開いているのに、何も見えない

「『君の視力をなかったことにした』」

『！？』

「『ははっ、まさか僕がなんの理由もなく善吉ちゃんの身体をペタ

ペタ触るような男だとでも?そんな訳ないじゃないか。今こそ教えよう!球磨川禊が抱える過負荷／マイナスは【大嘘憑き／オールフィクション】!現実を虚構に変え、全てを台無しにする過負荷／マイナスさ!善吉ちゃんが頑張って与えたダメージも!名瀬さんとの必死の特訓も【大嘘憑き】の前には意味をなさない!どうせ君たちは僕の能力を治癒能力やら時間逆行やらみたいなカックイージョジョの主人公みたいな能力だと思っていたようだけど…僕のような負完全からそんな全うなスキルが生まれるわけがないだろう!少し気を抜けば世界すら【なかったこと】にしてしまう最下級の過負荷／マイナスさ!』」

にやにやと笑いながら腕を広げ、演出過剰な言葉を発する球磨川。
そんな愛しい弟の姿に、流は困ったように笑った

「ぁーぁーぁーぁー…みーくんの悪い癖。ラスボス役が楽しくて仕方ないって顔してるよ…、劇場型とはよく言ったもんだわ。流石人吉せんせーかなぁ…」

「?。呼んだ?」

「いーぇいえ。なんでもあっりませーん」

というやり取りはともかく

球磨川はわざとらしく勿体ぶって腕を畳んでガタガタ震える善吉の周りを歩き回る。その足音が鳴る度、善吉の身体はびくりと跳ねる。恐怖に彩られた表情が、泣き出しそうに歪む

「『見ない、ならともかく、見えない。はやっぱり恐いよね。そう、それが恐怖だよ善吉ちゃん。次は何を消そうか。味覚かい?嗅覚か

い？触覚かい？聴覚かい？いっそ全て一気に消そうか』」

そしてぽんっ、と優しく、球磨川は善吉の肩を抱いた。さっきまでならともかく、今の善吉にはそれを振り払う勇気も気力も無い

「『なぁ、善吉ちゃん』」

見えてもいない善吉に、それでも球磨川は笑顔を向けた

「『僕、わざと負けてあげよっかっ？』」

『！？』

一同の驚愕。そして、流の深い溜め息の音が、妙に響いた

―10　庶務戦　Bパート（後書き）

流＞まぁた長くなっちゃったよ…

流＞Cパートに続く！

流＞ってかみーくんもだけど皆して長台詞多すぎー！

―10　庶務戦　Cパート（前書き）

流＞中途半端よくない！

流＞人生さくさくチート使ってらくらくイージーモードが一番だよ！

―10　庶務戦　Cパート

「『なに、大した理由じゃないんだよ。江迎ちゃんは勿論どうもお姉ちゃんも善吉ちゃんのこと気に入ってるみたいだからさぁ。ここらでちょっと良い先輩風吹かせてみようと思ってさ』」

へらっ、と笑いながら球磨川は善吉の背中をぽんぽん、と優しく叩いた

「『勿論、なかったことにした善吉ちゃんの視力は、なかったことにした現実を更になかったことにすることで直してあげるし、エリート抹殺、なんて戯言も撤回しよう。僕が生徒会長になっても真っ当で素敵なマニフェストを掲げようじゃないか』」

「！！」

バッ！と音がしそうな勢いで球磨川に顔を向ける善吉。球磨川はそれに、至極楽しそうに笑った

「『ふふっ、やっぱり直してほしいよねぇ。じゃあさ、この辺りで手打ちにして皆で仲直りしようぜ？』」

「…仲直り…だと！？」

にぃぃ、と球磨川は邪悪な笑みを浮かべる。それに危機感を覚えた瞳が口を開こうとするが、その前に流が口を挟む

・・・・

「みーくん。」

ただの呼び掛け。けれど、球磨川は少しだけつまらなそうな顔をした

「『…そっ。仲直りさ。同じ中学の先輩後輩。僕と友達になろうぜ。勿論その目だって治してあげるさ。そうすれば僕達がこんな危険な橋を渡って争う理由もなくなるしね。そんなことより皆で仲良くしようぜ！実は僕、カラオケ好きでさー。一緒に行こうぜ？勿論先輩の僕が全部奢ってあげるよ！いや、むしろ今まで意地悪したお詫びに奢らせてほしいんだ。全部善吉ちゃんと仲良くしたかったからなんだ。君が僕のようなマイナスの友達になってくれるなら、それだけで十分だ。二度とマイナスな行動なんかしないとめだかちゃんに誓うよ』」

懺悔するように、あるいは許しを乞うように

球磨川は、呆然と立ち尽くす善吉に向けて手を伸ばす

善吉の中で様々な考えが渦巻く。こいつは恐らく、言う通りエリート抹殺なんかやめるだろう。そして俺と楽しく遊んで、まるで普通の先輩後輩のように穏やかな日々が来るかもしれない

だが、それは

「すまん、球磨川」

俺の敗北だけなら良い。

「俺はお前が嫌いだ」

だが、俺の心が折れたせいでめだかちゃんが負けるのは、駄目だ

「だから、友達にはなれない」

そしてこのままじゃ俺は勝てない。身体は震えて動かず、目が見えない所か足腰が立たない

でも、それでも

俺が屈したらたくさんの心が球磨川に折られ続ける

そんなことは絶対にさせられない！

なら――

「めだかちゃんっ！」

球磨川を振り払い、そこにいるであろうめだかに向けて善吉は言葉を繋げる

「楽しい高校生活だったなぁ！入学式でもお前はいきなりぶちかましてくれたよなあ！日之影先輩とも揉めてたし！そうそうたる先輩方を敵に回しての生徒会選挙！ありゃあ燃えたぜ懐かしい！目安箱設置してからは休む暇もなかった！１学期だけで百件以上は悩みを解決したか？花の世話全部俺に押し付けやがって！阿久根先輩との柔道対決！喜界島との水泳対決！敵だったあいつらが今じゃ一番頼れる仲間だ！風紀委員会との抗争！時計台地下の考察！忘れようもないほど大変だった！」

そこで、善吉は目を閉じた

「色々あったけど。今となっては全部いい思い出だ」

善吉が放つ奇妙な雰囲気に、めだかの身体がふるふると震える。球磨川と対峙する以上の恐怖に、めだかは卒倒しそうになる

「何を言っておるのだ善吉…。やめろ…！言うな…！そんな今わの際みたいなこと言うなぁっ！！」

絶叫するめだかに、善吉は静かに笑った

「好きだぜ、めだかちゃん」

そして、善吉は球磨川に向かって啖呵を切る

「残念だったな球磨川！お前の甘言も！お前が与えた苦痛も！俺の心を折るには足らなかった！それに！たかたが目を見えなくされたくらいで名瀬先輩と頑張った俺の努力までなかったことには出来ねぇぜ！」

「『だったら今からそれをなかったことに…っ？！』」

瞬間、球磨川の喉に善吉の爪先が捩じ込まれた

「名瀬先輩式マイナス無効化システムその7！喋らせたらヤバイなら、喋らせなきゃ良い！」

「『ぐぅ…！？む、だだよ善吉ちゃん！僕の大嘘憑きの前には…！』」

「そして！続いて無効化システム１３だ！」

善吉が足を振り上げ、思い切り金網を踏みつける！

「身体の震えが止まらないなら！もっと激しく震えるまでだっ！」

「『震脚…っ！？』」

途端、ギャギャギャギャっ！と耳障りな音を立て

リングが、一気に底まで沈んだ

そうして当然その底にいた蛇たちは球磨川と、そして善吉の身体にまとわりつく

「『うぉっ！？気持ち悪っ――』」

普通なら、ここで終わりである。ハブの毒は出血毒。普通なら、『通常』の『過負荷』ならこれで終わりだ

「『しかしっ！僕には【大嘘憑き】という欠点がある！』」

そう言い放ち、球磨川は手に螺子を出現させ、

流は、そっと視線を外した。声は聞こえる。善吉の「その欠点は俺がカバーしよう」という原作通りの声が

そして耳を塞ぎ、目を閉じ、ただただ口の中で「ごめんなさい」と呟き続ける

残り少ない原作知識の通りに進んだ光景

ということは、今、愛しい弟は全身をハブに噛まれて痛い思いをしながら、あっちの世界で大嫌いな安心院に苛められに行かなきゃならないのだ。だから謝る。ごめんなさい、と

江迎ちゃんの幸せのために、みーくんに酷いことしてごめんなさい。と

「決着です！この勝負、両者失格！庶務戦は引き分け！A班は人吉さま！B班は球磨川さまの救助！その後速やかに治療しろ！血清を持ってこいありったけだ！早く保険委員会に連絡！」

長者原の声にはっと正気に戻る流。とんでもない破壊音に首を振れば、乱神モードのめだかが黒子たちに囲まれて雄叫びを上げていた

「が、ああ、あああああああっ！！善吉いいいいいいいいいっ！！！」

その声に、どうしようもなくイラついた

「…」

ずるり、とスカートの下から巨大なカナヤスリを取り出す。黒子がめだかに吹き飛ばされた隙を逃さず、それをめだかに叩き付けた

「がはっ！？」

血を吹くめだかに構わず、流はそれを思い切り引っ張る。生徒会戦装束戦挙戦モデルと、皮膚と肉がぞりぞりと削れた

「私の巨刀・鑢（キョトウ・ヤスリ）は斬るのではなく――削るっ！」

どっかで聞いたことのある台詞を吐きながら、めだかの血で汚れたカナヤスリを背中に背負う

「人一人殺す覚悟もない癖に、人を幸せに出来ると思うな。人一人死んで悲しむくらいなら、人を幸せになんかするな」

どこか吐き捨てるように言う流を、血走った目で睨むめだか

「貴様らが――『過負荷／マイナス』が、分かったような口を挟むなぁっ！！」

そんなめだかの叫びと同時に

「駄目です！人吉さまの意識が一向に戻りません！…というか。心臓が止まりました…。…2人とも、心肺停止状態です…」

絶句し、へなへなと座り込むめだか。そんなめだかを前に

「『あー！痛かった。あ、お姉ちゃん、ただいま』」

むくり、と。当然のことのように、球磨川は身体を起こした

「おかえりみーくんっ！」

そんな球磨川に抱き付く流。上半身だけ起こした球磨川の背中から、頭を胸に押し付けるようにその身体を掻き抱く

「…ぅん？あ、なんか驚いてるみたいだから教えたげる。別にみーくんの大嘘憑きは手で触らなきゃ発動出来ないってわけじゃないんだよ。言ってしまえばＩＳでちょろいさんが近接武装出すのに態々名前叫んでたみたいな？分かりやすく条件付けることで使いやすくしてるだけ。だからその気になれば死んだ後に『死んだことをなかったこと』に出来るわけ」

「『…お姉ちゃん、中途半端っぱいが微妙に寂しい』」

「どうせ雲仙くんにもちっちゃいって馬鹿にされた程度の胸だけど酷いよ！？」

先程までの殺し合いをなかったことにしたかのようにはしゃぐ双子に、めだかの怒りが爆発した

「貴様らっ！！よくも善吉を――っ！！」

対して、球磨川姉弟の反応は非常に冷めたモノだった

「『おいおい』」「ルールにあったでしょ？」「『死んでも文句言わないって』」「なのになんで怒ってるの？」「『大体、さっきのは善吉ちゃんの無理心中じゃないか』」

つまり

「「『僕／みーくんは被害者だ／よ？』」」

「～～～～～ッッッ！！！」

黒子に押さえ付けられていためだかが飛び出す。同時に流が大剣の

ようなカナヤスリを盾のように構え、砲弾のようなめだかの一撃を受け止めた

「…っくぅ…！」

たった一撃でぴしり、とヒビをいれる巨刀・鑢。お値段２４００万円と、その時

「え…あれ？ここは…」

聞こえるはずのない声が、響く。弾かれたように飛び出しためだかは、その勢いのまま善吉に抱き着いた

「善吉ぃいいぃいいいいっ！！」

「ギャアアアアアアアッ！？」

ベキベキベキベキ…と悲鳴を上げる善吉の骨。まぁ、めだかの馬鹿力なら仕方ない

全身の骨を砕かれるような激痛を味わいつつ、善吉はその痛みを感じることが疑問だった

「めだかちゃん…ん？あれ俺目が見えてる…？っつか生きてる？」

「そうだよ…生きてるよ…善吉…」

善吉の生存にほっとしたのか、乱神モードを抑えて涙するめだか

「『…これでいいんだね、お姉ちゃん』」

対して、球磨川は恐いくらいの無表情でそれを眺めていた

「…ん。ごめんね。ありがとね。頑張ったね。お疲れさまだね」

慈母のような表情で、不満そうな顔をする球磨川の頭を撫でる流。

その姿に、人知れず瞳は驚愕した

あの『球磨川　禊』が、あの『見知らぬ』少女の前では、まるで普通の少年のように…『普通／ノーマル』に表情を、感情を表しているのだ

球磨川に感情があることにも、その感情を普通に引き出している少女にも、驚愕を隠せない瞳

球磨川は「『はぁ…』」とため息を吐くと、不満そうな表情から一変、いつも通りのうさんくさい笑みを浮かべながら善吉に歩み寄る。

その腕に流を抱き着かせながら

「『お帰り善吉ちゃん。ちゃんと彼女に目を貰えたようで安心したよ。正直ノリで治せるとか言ってたけど、なかったことにしたことをなかったことにする、なんて僕には出来ないからさ』」

「カッ。信じちゃいなかったがやっぱり嘘だったか。さすが『大嘘憑き』とでも言やぁ良いのか？」

『彼女』の部分をスルーした善吉を面白そうに見つめ、球磨川はへらっ、と軽薄に笑う

「『それにしてもやっぱり僕ら／マイナスじゃやっぱり駄目だね。『普通／ノーマル』の善吉ちゃんですら引き分けに持ってくるのが限界だなんて…。これでもトップクラスのマイナスとしての自負はあったんだけどね。やっぱり手は打っといて正解だった』」

にぃ、と球磨川は笑う

「『さて問題。初戦で引き分けた君たちの人数は残り3人。内2人が…棄権したらどうなるかな？』」

『！？』

「はいはぁーい！書記戦と会計戦を私らが無条件で勝てたら、副会長不在の現生徒会の負けでーす！」

「『正解！よく出来ました～。頭撫でてあげよう』」

「ぁぅ…ふ、普通に照れる…」

顔を真っ赤にする流。それはともかく球磨川はへらっと笑う

「『修行合宿か…、いいね、素敵だね。まるでジャンプみたいだ。…けれど、ここは現実だぜ？思い通りの結果が出るとも、修行中に悲しい事故が起きるとも分からない…。さて、こんな所で油売ってて良いのかい？終わっちゃってても知らないよ？』」

「くっ…！善吉を頼む！私は合宿所に向かう！」

慌てて駆け出すめだかと、それを追う名瀬、古賀。善吉も追おうとしたが、瞳に止められて苦い顔をする

「『…ま、』」

「慌てて助けに行っても、間に合うのは、フィクションだけだけどね」

けらけらと、馬鹿にしたようにわらう球磨川姉弟は

そのまま笑いながら、下校した

－１０　庶務戦　Ｃパート（後書き）

次回予告

流＞マイナスの驚異の前に倒れ伏す阿久根、喜界島…

流＞しかし！運は彼を、彼女を見捨てなかった！

流＞今！単行本派以外は知らないだろう過負荷の真の敵がそのベールを脱ぐ！

流＞次回！ながしシスターマイナス１１！　血戦！奄美大島っ！

流＞散って行ったいーちゃんの敵討ちだっ！

禊＞『勝手に殺してやるなよ』

流＞書き下ろしのおまけコマが読めるのは単行本だけ！皆も暁月あきら先生と西尾維新先生の印税のために協力しようっ！喜界島レポートや安心院さんのマイナス対策もあるよ！

禊＞『あざといなぁ…』

インターバル　7月29日（前書き）

流＞なんか私に絵がついたよ！

禊＞『…は？いやいや。お姉ちゃん、寝言はベッドの中でね？』

流＞いやいや本当に！

ほらっ！

＞i234061－3108＜

禊＞『…うーん。生徒会戦挙はじまってからのお姉ちゃんっぽいね』

流＞うんうんっ！描いて頂いた『らってん』様ありがとうございますだね！

禊＞『ちゃんとちっぱいだしね』

流＞…パットいれたりほんのちょっとくらい膨張してもよくないらってんさーんっ！！

インターバル　7月29日

そろーり、と。忍び足で影から影へと移動していく流。何を考えているのか分からないが、その服装は、くたびれた黒いスーツに付け髭、目深に被った帽子。そしてくわえ煙草のつもりなのだろうか。棒付きキャンディを口にくわえている

「…むぐ…よくキャラ付けのために飴舐めながら登場する子とかいるけど、こんなん口に入ってたらしゃべりづらいよね常識的に考えて」

どうやら飽きたらしい。飴も帽子も投げ捨てて、普通に歩き出した。何故か付け髭はつけたまま。気に入ったらしい

「…に、しても」

ぴた、と流は足を止め。はぁ、と小さく溜め息を吐いた

「だぁれもいないと、さびしいなぁ…」

がらん、とした廊下。ここは病院だというのに、看護婦すらいない。入院患者がいないのは良いことだが、『入院してる患者を忘れる』のはどうなのだろうか。と溜め息を吐く。まぁ、この病院の医者の中には『異常／アブノーマル』もチラホラいるようで、完全に忘れ去られる。というの無いようで安心もしているのだが

さて、と。と一息吐き、流は目当ての病室をようやく発見。意気揚々と中に入る。ちなみに病室の分類としてはＩＣＵである

「まっぐろちゃ～ん…寝てる？良かった。寝てるね」

ベッドに横たわり、さまざまな器機を取り付けられた真黒の姿に流はほっとした。もしかしたら何かの間違いでしぃちゃん――志布志がやり過ぎないかと心配していたのだが、どうやら杞憂だったらしい。この程度の傷なら、『異常』にとっては問題ない。たとえそれが頭脳労働専門の真黒でも、『普通』と比べれば格段に高い治癒力を持っているのだから

「はいこれ！真黒ちゃんにお見舞い！」

と元気よく流が真黒の頭に被せたのは――パンツ。いや、正確に言うならば、水着。当然のように、女性用のもの。水玉トーンの紐ビキニの下半身を覆う部分だ

真っ当な感性を持つツッコミ体質の人間がいるのならともかく、この場で意識を保っているのは流だけ。どこまでもどこまでもフリーダム

「水中運動会前半開会式で黒神めだかが着てた水着をじっぷろっくしておきました！どう？どう？嬉しい？…おおう、寝てるのに心なしか笑顔な気がする…」

自分でやっといてなんだが、昏睡状態の真黒が微笑んだ気がしてドン引きする流。昏睡状態で微笑むとか普通に考えたら美談のはずなのに何故この２人だとこんなに残念なのだろうか

「じゃっ！あんま長居するのもアレだし、お大事に～」

ひらひらと手を振って部屋を出る流。ほんの少し後、、真黒の世話

をしに来た看護師が頭に女性用の下履きを被って昏睡している真黒に困惑したのは言うまでもない

「つ～ぎ～は～…んーんーんー…多分！こっち！」

勘に従うままに流は廊下を進んでいく。やがて、名札すらかかっていない４人部屋の前で止まると、僅かに瞑目してから、中に入る

無理矢理４つ繋げたパイプベッドの上で、ただただ眠り続ける英雄

英雄の意識が無いことに安堵しながら、流はそっと、ベッド脇に立った

「…ありがとね」

傷だらけで眠る英雄に、ただ一言。そして、少し迷ってから――彼女はスカートの中から『普通／ノーマル』の果物が詰まった籠を取り出し、眠る英雄の枕元に置く

「…んーんーんー。ま、いっか。ちょっとだけサービス」

へへぇ～と笑い、メッセージカードに一言くわえる。英雄の前で文字を書いたことなんか無かったから、バレることはないだろう

そしてニコニコと笑いながら、メッセージカードを果物籠にいれて――無言で、それを取り除く。乱暴にせっかく書いたメッセージカードはポケットに突っ込まれ、ぐしゃりと潰れる

そのまま、無言で流は病室を出た

「…大丈夫。まだ、会ってないもん」

だから私たちは、敵じゃない

そんな言い訳を自分に言い聞かせながら、流は廊下のゴミ箱にメッセージカードを叩き付ける

ぐしゃぐしゃになったカードには

『Ｔｈａｎｋ　Ｙｏｕ　Ｍｒ．ＨＥＲＯ』

と、

酷く機械的な文字で書いてあった

「お見舞いってなんか疲れるね」

「『勧誘ってどうにも疲れるよ』」

「失敗しなかった？よーかちゃん気難しい娘だから怒らせたりしたらダメだよ？」

「『古賀ちゃんを人質に取って「仲間にならなきゃこいつを性的な意味で無茶苦茶にするぞーっ！」って言ったんだけど…。「やめろっ！古賀ちゃんは関係ねぇだろっ！？やるなら俺をやれっ！」って感じの台詞吐かれちゃってさぁ、爆笑してる内にめだかちゃん乱入。古賀ちゃんを捕まえてた過負荷十傑集はフルボッコ。名瀬ちゃんぶちギレ。ぶちギレた名瀬ちゃんに志布志ちゃんぶちギレ。

「だったら書記戦出てこいや」

「望むところだ覆面巨乳」「んだとコラスケバン巨乳」

「む、胸は関係ねーだろっ！？」

って感じだった』」

「しぃちゃん可愛いーっ！！ああんもうあの巨乳を鷲掴みにした時にあげるしぃちゃんの「ひぃんっ！？」とか「ひゃァっ！？」とかいう可愛い声癖になるよね！まぁそのあと全身の傷開かれて死にかけるんだけど！みーくんがいなかったら流石に出来ないよねしぃちゃんの胸弄り！」

「『挟みたくなるよね。お姉ちゃんの擦るくらいしか出来ないちっぱいじゃあ絶対に無理だよ』」

「…ふ、ふふ…みーくん甘いね！世の中金だよ！現代には美容整形

というものがあるのだよ！」

「『駄目だよお姉ちゃん女の子が身体にメス入れるなんて…そんなのって駄目だ！せっかく親から貰った大事な身体を自分からメチャクチャにするだなんて何を考えてるんだ！』」

「…本音、どぞ」

「『お姉ちゃんが巨乳とかキモい』」

「泣くよ！？」

「『ってか漫画の女の子って胸が大きくなったり小さくなったりするけどさ、皆イヴちゃんみたいな変身能力持ってるのかな？うわっ、そう考えたらスヴェンさん本当に勝ち組。ロリからアダルトまで変身出来る嫁とか最高じゃん』」

「首吊って泣くよ！？無視しないでよ！ってかどうでもいいよ！激しくどうでもいいよ！どうせそんなネタ同人誌でやりつくされちゃってるよ！」

「『同人誌といえば貧乳キャラが巨乳になってるのもどうかと』」

「おっぱいは今どうでもいいよ！そんなことより書記戦どうするの？何か勝ち目あったけ？」

「『や、ない』」

「だよねぇ。しぃちゃんの『致死武器／スカーデッド』じゃよーかちゃんは倒せないでしょ」

「『だろうねぇ。せっかくレア度激高い【勝てる過負荷】を持ってきたのに…。てっきり日之影くんが正義感から余計な首突っ込んでくると思ってたんだけどね…。意外と日之影くんって虚弱体質だったんだね』」

「…んーんー。でも多分日之影ちゃんだからなぁ。2週間もあれば復活するんじゃないかな？」

「『じゃあ、警戒するべきは副会長戦で乱入してくることか。…となると江迎ちゃんを副会長に持ってきた方がいいのかな？江迎ちゃんは近接戦闘大好きなジャンプキャラが相手するには厳しすぎる過負荷持ってるし』」

「触られるだけでアウトとか無理げーだよね。…で・も。むーちゃんは会計戦でしょ？」

「『はいはい。分かってるよ。となるとやっぱり志布志ちゃんしかないかな。ここで勝てないまでも引き分けに持っていければ問題ない。お姉ちゃん、志布志ちゃんが引き分けるにはどうすればいい？』」

「…最初から最後まで心の古傷開き続けるとか？しぃちゃんは勝てないけど、流石のよーかちゃんもトラウマ抉られたら戦えないかも」

「『当てにならないなぁ。原作知識はどうしたのさ』」

「んーんーんー…。確か試合に負けて勝負に勝つ的な…。ダメだ思い出せない。でも確かエロい勝負だったような…？」

「『デジカメ買ってくる』」

「行かせんよ…？」

「『のいて』」

「だが断る」

「『どけ』」

「やーなのー！！そんなに見たいなら私の見ればいーじゃんっ！恥ずかしいけど脱ぐよ私は！」

「『…お姉ちゃん。子供が作った砂山の写真と絶景の富士山の写真だったら富士山の写真選ぶだろ？つまりそういうことだ』」

「…お風呂で溺死してやる！」

「『だがそれもなかったことになる』」

インターバル　7月29日（後書き）

流＞さぁさぁ次回のながシスは！

流＞ついに始まった書記戦！原作準拠で進む戦いを尻目にヤンデレながらも好き好きオーラを善吉ちゃんに飛ばしまくる江迎ちゃん！

流＞「人吉先生？幼馴染み？そんなの関係ありませえん。私と善吉くんの愛を邪魔するなら…」と一触即発ムードの観覧席！

流＞果たして無事書記戦は終わるのか！？

流＞次回！ながしシスター一一！　書記戦

流＞ちなみにお姉ちゃんがいるとしぃちゃんが私のことボコりたくなるからお姉ちゃんは不在です！

流＞…寂しいなぁ

流＞…いいもん。一人ジェンガしてるから

―11　書記戦　Aパート（前書き）

流＞颯爽登場！ながしお姉ちゃん！

流＞実は投下速度減速中！

流＞このままの速度だと単行本11巻発売前に会長戦終わっちゃうじゃん！？ってなったの！

流＞だから間を持たせるためにも書記戦、6月中盤まで、会計戦、7月中盤まで、副会長戦、8月までにって感じでバラけて投下します！

流＞今回は書記戦Aパート！Aパートだから次回予告お休みです！

―11　書記戦　Aパート

8月1日。生徒会選挙2日目――

居並ぶ過負荷メンバー（一流）。そして、現生徒会メンバー。お互いに敵視しながら睨み合う

「前回と同じく試合形式を決める運びですが、それに先立ちまして黒神さま。少々前に出てきていただいてよろしいでしょうか」

「？」

前に出るめだか。その腕に、武骨な錠前が課せられる

「…ちょっと待て。これは一体なんの冗談だ？」

両手を完全に封じる錠前に冷や汗を流すめだか。だが、長者原に動じた様子は無い

「いえ。前回黒神さまと球磨川（姉）さまが試合後に見境なく暴れたことを踏まえ、戦挙遂行に支障を来しかねませんので。本来ならば球磨川（姉）さまと拘束しあってもらう予定でしたが、球磨川（姉）さまは自主謹慎、とのことでしたため、黒神さまのみ拘束いたしました。いかに黒神さまとはいえその錠前は破れません」

「『さっすが長者原くん。わかってるぅー。めだかちゃんは学習しないなぁ、ルール守るためにあるんだぜ？そもそも何で戦挙になったのか忘れたのかい？』」

「くっ…」

球磨川を唯一抑えることが出来るだろうめだかが、『ルール』に縛られたことに戦慄を禁じ得ない現生徒会メンバー。生徒会メンバーで最大のプラス要素たるめだかが封じられた…あるいはこれも球磨川の策略なのかと戦慄を禁じ得ない。天秤は、圧倒的にマイナスに傾いている

「そしてもうひとつ、名瀬さま。あなたは今回阿久根さまの代理で書記戦にエントリーされておりますが――」

「説明はいーよ長者原くん。俺は代理。書記にはなれないってんだろ？そーゆールールは1から10まで十全に頭に入ってる。だから――」

きっ、と名瀬は敵意に溢れた目で志布志を睨む。どうやら、古賀を人質に取られたのが余程気に食わなかったらしい

「そこの乳オバケさえ倒せりゃ、なーんも文句はねーんだよ」

カァアア…っと志布志の顔が朱に染まる。バッ！と胸元を隠す志布志。隠されたせいでムニムニと柔らかく形を変える双丘に、なんとなく気まずくなった善吉、蝶ヶ崎、長者原が顔を逸らす。球磨川？ガン見である。彼は結構男の子なのだ

「胸は関係ねーだろが乳覆面…っ！」

「あんだとおっぱいスケバン」

「あんだよおっぱいミイラ」

「「…」」

ギリギリと空気が軋む音が聞こえそうな雰囲気で睨み合う二人。こほん、と咳払いした長者原が腕を広げる

「で、では書記戦の試合形式を決めたいと思います。前回同様、志布志さまがお選びください。また、巳のカードは庶務戦とは違うルールになっております」

「んー？じゃーあー。考えるのめんどくせーし。球磨川さんリスペクトして『巳』でいーや」

へらっと笑いながら答える志布志に、長者原は顔色1つ変えずにカードを手に取る

「『巳』のカードでございますね。わかりました。『毒蛇の巣窟』を知りながらこのカードを引くとは。志布志さまの度胸にはこのわたくしめ、ただただ感服するばかりでございます。書記戦の形式は『冬眠と脱皮』に決定いたしました。これもまたやはり、今回我々が用意した13の決闘法の中でもっとも残虐なルールで行われる戦挙でございます」

「『ん、おっけ。じゃあ冷凍庫行こうか』」

『！？』

当たり前のようにポケットに手を入れ、歩き出す球磨川。その「あらかじめこの戦いになることを知っていた」と言わんばかりの態度に、驚愕を隠せない一同

そしてそれは――長者原も例外ではない

「お待ちください球磨川さま。それではまるで――」

「『まるで、も糞もねぇ。知っているから知っている――それ以上の理由は必要かい？』」

ニヒルに口角を吊り上げて笑う球磨川。戦慄する一同。困惑する一同。『大嘘憑き』の隠された力か、あるいは他の過負荷の能力か――まるで『未来視』をしているかのような言動、行動に、全員が生唾を飲む

「『おや？説明しないのかい長者原くん。仕方ないなぁ、困った生徒を助けるのも次期生徒会…の、庶務を担う僕の役目だ。代わってあげよう。零下４８度の極寒地獄で行う【衣服の剥ぎ取り合い】。それが【冬眠と脱皮】さ。詳しい説明や由来は省くけど、ギブアップなし、凍死しても関係なし。どちらかが全裸になるまで終わらないデス・マッチ。恐いねぇ。このゲームのコツは脱がした相手の服を纏うこと、出血をしないこと、汗をかかないこと、身体を冷やさないこと、そして相手に見つからないこと。こんなもんかな？合ってる？長者原くん』」

「…ええ、概ね。正解でございます。では、皆様。学食係りの使用する巨大冷蔵庫にご案内致します」

無言。幼少時、中学時代と比べ、圧倒的なまでに『過負荷／マイナス』を増大…否、減少させた男に、戦慄を禁じ得ない一同。

『過負荷』はより一層の信頼を…否、期待を球磨川によせ、

生徒会メンバーは、背筋が凍るような悪寒を感じる

そんな中、複雑そうな顔をする少女がいた

『過負荷』――江迎　怒江である

志布志、蝶ヶ崎は球磨川とも、球磨川　流とも、生徒会メンバーとも根本的な意味で『違う』

だが、江迎は、球磨川には『恩』を、球磨川　流には『友情』を、そして生徒会メンバー…善吉に、『恋』しているのだ

ここで自分が何をすれば最善なのかが分からない

自分がどういう風に動けば球磨川に『報い』、球磨川　流の友情に『応え』、善吉に想いを『伝える』ことが出来るのかが分からない

『過負荷／マイナス』だから

敵同士だから

愛されたことがないから

愛し方が…分からない

流のように抱き付けばいいのか？

そんなことしたら善吉が腐ってしまう

流のように愛を叫べばいいのだろうか？

そんなことしたら球磨川に敵対してしまう

流のように、流のように、流のように…

そもそも私って何だっけ？

腐らせることしか出来ない『過負荷』で

腐ることしか出来ない『過負荷／負け組』で

私は、私は…

江迎の思考がぐるぐる回る。ぐるぐるぐるぐる回った思考が腐って発酵して沈澱する。違う違う違う。善吉くんの手足を腐らせて、動けないようにして、一生めんどうみて…そんなのは、『幸せ』じゃない。私は『幸せ』になりたい。『幸せ』にならなきゃ、あんなによくしてくれた流お姉さんの想いに応えられない。幸せに、幸せに、善吉くんと幸せに…

「『江迎ちゃん？』」

はっとして顔を上げる。目の前に、よく知る顔。思わず、口を付いて出る言葉

「私たちは幸せになれますか？」

ぽつりと呟かれた『過負荷』の言葉

けれどそれは、確かにその場にいた人物たちの胸に、楔を打ち込んだ

そこからは無言だった。球磨川はいつもの軽薄な笑いを浮かべながらも自身の失敗を悟る。ぼんやりと虚空を見つめながら、はっとしたように「す、すいません！なんでもないです！」と頭を下げる江迎

マイナスに傾いていた天秤が、フラットに戻った。今のセリフで『過負荷』にも『普通／ノーマル』に幸せを求めている者がいることを悟られてしまった。せっかく追い詰めたのに、味方側から助け船を出された

まぁ、

それも、

たいした問題では、無いのだが

球磨川は既に流から、庶務戦から副会長戦までの結果を聞いている

詳しい戦いの流れは知らないが、どんな戦場で、どんな戦いがあったのかは既に知っているのだ

庶務戦、毒蛇の巣窟。過負荷の負け

書記戦、冬眠と脱皮。過負荷の勝ち

会計戦、火付け兎。引き分け

副会長戦、狂犬落とし。過負荷の負け

会長戦の記憶は既になく、『あじむさん』に奪われてしまったらしいが、これだけ分かれば十分過ぎる

負け星を減らし、会長戦で確実に勝利する

それだけで、十分なのだ

…最も、会長戦では少しだけ…いや、大分、あの優しい姉に無理をして貰わなければならないのがネックではあるが…。それで十分だ

無言。無言のまま一同は歩みを進め、ついに巨大冷凍庫へとたどり着く

決意、だろうか。先程までよりより一層『良い』顔をするようになったためだかがしゃくに触り、球磨川はついつい悪い癖を発揮する

「『どうしたのさめだかちゃん。随分いい顔をしてるね？アレかい？脱衣という自分の専門分野を取り逃したことが残念過ぎて頭がおかしくなっちゃったのかな？』」

そんな球磨川の皮肉に、めだかは両手を拘束されたまま、「凛っ！」と立ち、笑う

「ああ。『負けられぬ理由』が出来てな。…少し、浮かれていた。宣言してやろう、球磨川。ここから先の私は、私たちは…手強いぞ？」

ニヒルに笑うめだか。…江迎の漏らした一言でここまでメンタルを再構成しためだかに驚きつつ、球磨川は軽薄に笑う

「『うっわ！マジめだかさんカッケーッス！とてもじゃないけど僕にはそんな台詞は吐けないよ！…でも、そうだなぁ…めだかちゃんのビッグマウスを称えて、僕も自分に罰ゲームを与えよう！』」

「罰…」「ゲーム…？」

困惑をそのまま口から溢す人吉親子。それに微笑みながら、球磨川は笑った

「『もしもこれから先の試合…書記戦、会計戦、副会長戦、会長戦…この中で、僕たち新生徒会チームが一敗でもするようなことがあれば…僕はその時点で箱庭学園から手を引くよ』」

『！？』

「『おいおい、そんなに驚くことかい？単純な話だよ。熱血しちゃってるめだかちゃんに付き合ってたら、僕たちまで熱血ノリに付き合わされて暑苦しいことになっちゃうじゃないか。ゆとり万歳！クールかつスタイリッシュに行こうぜ？僕は竜馬よりハヤト派なんだ

よ。そもそも熱血ロボットアニメ自体嫌いだけどね！』」

へらっ、と笑いながら言う球磨川。瞳はそれに目を輝かせ、逆に眉を潜める蝶ヶ崎

「球磨川先輩…。よろしいのですか？選挙管理委員会の前でそんな約束してしまえば、もう取り消せませんが…」

「『いーんだよ。なんか熱血キャラ見てると急に冷めることない？体育祭でやけに張り切るＤＱＮを冷たく見つめる文科系の気持ちって言うの？そんな感じ。…まぁでも、アレだ。流石にお姉ちゃんにも協力してもらっといて勝手にやめるのもアレだからさ、』」

にこっ、と軽やかに笑う球磨川

「『志布志ちゃん、本来【過負荷】に言うようなことじゃないんだけどさ…。【負けないで】ね？ふぁいとー！おー！』」

ビシィ！とサムズアップする球磨川に、虚を突かれる志布志。けれど志布志は、目を閉じ、静かに笑って見せた

「…むっちゃ言うなぁ球磨川さん。あたしら負けっぱなしの負け犬たちに【負けるな】とかさー。自分勝手にも程があるんじゃね？まー、でも例え９９，９％負ける試合だろうと…」

あっさりと、当然のことのように、普段着のまま

「０，１％の確率にすがるのが、ジャンプの王道ってーやつっすよね！」

志布志は、冷凍庫内に足を進める

その姿を信じられないモノを見るような目で見る生徒会メンバー。
球磨川たちはそんな彼女らの様子に失笑を禁じ得ない

「…ハ！じゃーなにか？てめーら最初っから負けるつもりで戦ってたのかっつー話だわな。…ったく黒神、こんな重たい戦いこの俺に押し付けたんだ。後で覚悟しとき――」

軽口を叩きながら冷凍庫に足を踏み入れた名瀬が

「！？」

鮮血を吹き出し、倒れた

「ぼんやりしてんじゃねーぞおっぱいミイラ。ここは既に『致死武器／スカーデッド』の縄張りだぜ」

志布志が、けらけらと笑いながら腕を広げた

―11　書記戦　Aパート（後書き）

流＞…実は1人で寂しい上に凄い暇です

流＞なので突発企画！

流＞ながしおねーちゃんに愛してもらいたい人募集！

流＞応募は自由！適当に愛してほしい！って言ってくれた人の中から適当に選ぶよ！

流＞記念すべき第1段！は、この企画を始める切っ掛けにもなった【アーちゃん】

流＞愛してるよアーちゃん！また来てね！絶対だよ！？

流＞…おぉう、なんだかホステスかなんかになったみたいな気分

禊＞『胸も色気もないのにね』

流＞なんでいるのー！？書記戦はー！？

禊＞『お姉ちゃんを馬鹿にするためだけに帰ってきた』キリッ

流＞…ふぁ…みーくんカッコいい…

禊＞『僕が言うのもなんだけど、それでいいの？』

―11　書記戦　Bパート（前書き）

流＞…わ、わー、思ってた以上に応募がたくさん…

流＞…こほんっ！

流＞じゃあ！あとがきにＧＯ！

ー11　書記戦　Bパート

「きゃっ…きゃあああっ！？名瀬ちゃんっっっ！」

古賀の悲鳴が響き渡る中、愉快そうにケラケラ笑って笑いながら肩を竦める志布志

「あーあーあー不甲斐ねぇなぁ名瀬先輩よぉ？『過負荷』を相手に何を油断して」

不自然に志布志の声が途切れる。驚愕しながら自分の腹部を見下ろした志布志の腹に刺さる注射器

にたり、と笑いながら立ち上がる名瀬は、片手にぷらぷらと注射器を揺らしながら志布志を嘲笑う

「不甲斐ねぇのはてめぇだぜ志布志後輩。戦隊ヒーローの敵キャラかてめぇは。俺は残念ながらマッドサイエンティストだ。ヒーローごっこならむしろ「てめぇら」側なんだよっ！」

言いながら名瀬が服の下から取り出したのは――バチバチィ！と凶悪な音を立てるスタンガン間髪いれずに志布志の懐まで駆け寄り、それを志布志の腹に押し当てる！

「ぎ…びっ…！？」

だらしなく口を開け、目を白黒させながら、口から泡を吐く志布志。余程の高圧なのか、志布志の手足が本人の意思に反してガクガクと痙攣する

「これで終わると思ったか?…ところでお嬢ちゃん」

にたり、と名瀬はもはや声すら聞こえてないはずの志布志に問う

「お薬は嫌いかな?」

次々と、

当たり前のように注射器を取り出し、それを志布志の身体に突き刺していく名瀬。あまりにもあんまりな一方的な展開に、長者原が眉を潜めた

「おかしいですね。志布志さまに比べて名瀬さまの動きが軽快すぎます。あれは氷点下の世界における駆動ではございません。こほんっ、『名瀬さま。選挙管理委員会として説明を要求します。あなたは何をなさっておいでですか?』」

その言葉に、ぴくりと眉を動かす名瀬。彼女は長者原を…否、その場に存在する人間全てを嘲笑い、

「おいおい、漠然とした聞き方するなぁ長者原くん。簡単な事だ。『対策』を練ってきたんだよ。黒箱塾時代に行われた戦挙、全ての文献漁って予習して予想して『対策』を練ってこの書記戦に望んだんだよ。当然てめぇがどの戦挙を選んでも対応出来るように４０種近くのルール全てにな!そして――」

臨っ!!と効果音を背負い、彼女にしては珍しい決めポーズ。まるで良く出来た工作を親に自慢するような子供のように、嬉々として彼女は語る

「そうして作られたのがこの『黒鬼／ブラックオウガ』ッ！！低温高温低湿度高湿度北極南極砂漠高山！ありとあらゆる環境に耐え、防弾防刃対衝撃対熱対毒っ！あらゆる不安要素を排除する全方位型実験服！白衣ならぬ、黒衣！さすがに強度は『白虎／スノーホワイト』には劣るが、非力なてめぇにこの防護服は破れねぇ！」

「…っ！！」

自信満々――まさに『異常／プラス』と言わんばかりのその姿に、志布志は声にならない驚き、そして嫉妬の感情を滲ませる

これでは…これではまるで、自分は目の前の女に負けるのが当然、みたいではないか

『過負荷／マイナス』だから『異常／プラス』に負ける？ヒーローが名乗ってる間に攻撃していれば勝てるはずの怪人が、あっさりと避けられるであろう攻撃をいやいや食らって爆発するように、様式美的に負けてしまうのか？

――そんなの、ごめんだ

ゆらり、と志布志は立ち上がった。ガクガクと電撃に痺れた膝から下は力無く揺れ、指先はだらりと下げられている。電撃を食らったのなんか、初めてじゃない。長年苛められ続けた記憶が、あと数十秒ほど回復にかかると教えてくる。だからその数十秒を稼ぐために、志布志は痺れる指の間に剃刀を挟む。震える指先が何度も剃刀の上を走り、ぼたぼたっと血が零れた。だが、それもすぐに止まる。凍りつく。身体が冷えて動かなくなることにも慣れてはいる。慣れてはいるが…これればかりは、慣れなど何の役にも立たない

――姉の頼もしい姿に、内心で胸を撫で下ろすめだか。そして、チラリ、と変わらぬ薄い笑みを浮かべた球磨川を睨む

「…球磨川、約束を忘れるなよ。このまま志布志1年生がくじ姉に敗れれば、貴様は箱庭学園から手を引くのだぞ」

…それに、球磨川は口元に笑みを浮かべて答える

「『…約束？』」

すぅ…と球磨川の目が、面白いモノ見たかのように細められる

「『…さぁて、どうしよっかな～』」

「！？」

あまりにも厚顔無恥。つい先程言ったばかりの台詞を忘れたかのような傲慢さに、めだかの額に井桁が浮かぶ。だが、球磨川は変わらずニヤニヤした笑みを浮かべたまま

「『約束を破るも守るも僕の気分次第、ってのは気分がいいよねぇ…。約束は守られて当然だ、そう考えている幸せな人間とした大事な大事な約束を…あえて、破る。当然相手は…君は、愕然とするだろう。そして約束を破った相手を…僕を呪うだろう。蔑むだろう。――そしてそんな時、』」

ぐりん、と感情の見えない、ガラスのような無機質な目が、めだかの目を覗き込む。急接近してきた球磨川に、喉を鳴らして後退りするめだか

「『【普通】も【特例】も【異常】も…皆、同じ顔をするんだよ。みぃんな、『過負荷／マイナス』と同じ…【何か】を呪う、そんな表情をね』」

「…っ、ぁ…」

喉が、妙に乾いていた。声にならない声が口から漏れて、手錠を引きちぎってでも目の前の男を殴り飛ばしたいような、そんな衝動の波かろうじてそれを自制していたら、「『ふぅん…』」と楽しそうに口元を歪めた球磨川が、「『まぁ』」と肩を竦めて笑った

「『冗談冗談、約束は守るさ。…でも、ね？』」

にたり、と笑いながら球磨川が視線を戻した、その瞬間

「さぁて、そろそろさっき撃ったノーマライズ・リキッド（無痛タイプ）が全身に回った頃だろ？てめぇの能力の正体はわかんなかったが…わかんねぇならわかんねぇなりの戦い方をすりゃあいい。手足も痺れてるみてぇだし、優しくいやらしく淫らに先輩が裸にひん剥いてやろうじゃ――」

言いながら近付いた名瀬の顔中に、ゆっくりと、何も無いのに裂傷が走り――

バクッ！と音を立て、鮮血を吹き出した

「な、にっ…！？」

封じたはずの正体不明のスキル。それの威力に、そして意識の隙を突かれた驚愕に、膝を付く名瀬

その姿に――球磨川は、にまり、と口元を歪めて笑った

「『約束は破られない。というより…破る必要がない。何故なら…飛沫ちゃんは君にも勝てる【可能性】がある、最悪で最高の『過負荷／マイナス』だからね』」

その言葉に応えるように、へらへらと舌を出して笑う志布志

「わかってねぇなぁ名瀬先輩。『異常』と『過負荷』を一緒くたにしてんじゃねーよ。
あたしの過負荷／マイナスは、封じも殺されもしねぇ」

「くっ…てめぇ…」

吹き出す血液に顔を歪めながら、それでも立ち上がる名瀬。そしてその視線は、名瀬自身の身体に注がれていた

「おっと気付いたみたいだな。さすがだなぁ！その通り。
他人の古傷を開く。それがあたしの過負荷／マイナス…『致死武器／スカーデッド』だ」

理不尽すぎる。

言ってしまえばそれに尽きる、圧倒的なスキル。

ただそこに存在するだけで、彼女の近くに寄るだけで、生きるために苛め続けた身体が反旗を翻す。アスリートならば身体を鍛えるた

めに、アスリートでなくてもただただ「成長」するために傷付いた身体が、一気に反旗を翻す

ただ生きてるだけで全てを「なかったこと」にしてしまう大嘘憑き。ただそこに存在するだけで、周り全てを腐らせてしまう荒廃した腐花

どれもこれも凶悪なスキルだが、その中でもとびきりに「ひどい」

まるで全生物の敵を体現しているかのようなスキルに、そんなスキルを保有するからこそ彼女が『英雄』を打破することが出来た、という事実に、驚愕しつつも納得せざるを得ないめだか

「『例えどんなに鍛えていても、それは『マイナス』にしかならず、どんなに頭が良くても無力で、どんなに優秀で【異常】であろうとも無情――生きている限り飛沫ちゃんの過負荷からは逃げられない。…名瀬ちゃんは、ここで終わりかな？』」

頬に指先を当て、んー？と楽しそうに唇を歪める球磨川

全員の視線が、倒れ伏す名瀬に集まる

ぴくり、と視線に応えるように、名瀬の腕が、身体が持ち上がる

「へぇ…まだ動けんのか。さっすが、それも主人公補正か？だけど無理無駄無謀だぜ。今の話聞いてたら…って、聞こえてないのか？鼓膜破れてるとかですかー？」

後頭部に手を当て、退屈してます。と言わんばかりの表情で名瀬を見下す／みくだす志布志。ガクガクと震えていた手足は正常な機能

を取り戻し、逆にようやく、といった様子で身体を起こした名瀬の手足が震えている

「勝てない、ことは…諦める理由にはならない」

ギリッ…と歯を食いしばりながら、名瀬は烈火のごとき視線で志布志を睨み付ける

「可能性も、勝率も、関係ねぇ。例え全部が全部マイナスだろうと…俺は！絶対に諦めない！！」

…そう、断言した名瀬の目前に

志布志の掌が、差し出された

「そうかい、じゃあ折れとけよ」

――苛めた。ひたすらに自分を苛め続けた。素晴らしいものを生むために己の境遇を地獄に変えた。親を捨て兄を捨て妹を捨て幸福を捨て怠惰を捨て安らぎを捨て孤独に苦痛に悲痛に耐えながら全て全て全て全てひたすらに己をいじめ己を高めそれで尚まだ足りないと己を責めて。ひたすらにひたすらに地獄の底へ底へ底へと沈んだ先に見つけた計画すら自分が捨てた妹に止められて

がくっ、と膝が折れた。心が欠けた

あの日、あの時。球磨川姉弟に指摘されなければ気付かないでいれた己の、そしてフラスコ計画関係者の「不幸」。自分はそれよりも大事な古賀を失いそうな恐怖があったから良かった。いや、むしろ古賀を失うべきだったのか？何故？何故？何故だ、名瀬　夭歌。お

前はお前は不幸を苦痛を悲痛を全て受け入れた上で「素晴らしいもの」を生むために生きているんじゃなかったのか？

トラウマと共に蘇る余計な思考。がくがくと震える力の入らない手足を動かしていた気力が根こそぎ奪われていく

「そういりゃ、どうよ、記憶喪失さん？――「不幸／トラウマ」を思い出した気持ちって」

ひひひひ、と厄い笑みを浮かべながら、ボロボロと涙を溢し、呆然と震える名瀬に向かって一歩、二歩、近付き

「あたしのそばにいるってのは、そのまんま嫌な思い出を思いだし続けるってことだ。手間いらずの精神攻撃って感じかねぇ！」

「ひっ、ひぃ…っ！？ひいいいいいいいっ！！」

恐怖のあまり、四つん這いのまま凍った床を這いずって逃げ惑う名瀬。そのあまりの不甲斐なさに、深い溜め息を吐く志布志

「だらしねーなーおい？さっきまでの先輩面はどこにいったんだよ…。あいつ辺りは何回ぶちこんでも壊れたみてぇーに笑ってたのによぉー。お前も年上面すんならもうちょい頑張れよなぁ」

呆れ顔で、あっという間に部屋の隅まで逃げた名瀬を追う志布志。はぁ…と溜め息を吐くと、「…とっとと終わらせてあいつで遊ぶかぁ」とガリガリ頭を掻く

だが――その歩みが、止まる。部屋の隅まで逃げ延びた名瀬が、壁に手を付きながら薄く笑い、振り返る

そして彼女の手の先には…何年前に作られたのかもわからない、古くさいデザインのレバー

「しまっ…ブレーカー！…？」

驚愕する志布志に、頷き――名瀬は、レバーを下ろす

辺りは暗闇に包まれ…勝負の決まりかけた戦いは、最終局面へと移行する

―11　書記戦　Bパート（後書き）

流＞…せーの

流＞釣りだクマー！！

流＞球磨川さんだけに！（ドヤァ

流＞…ってやるつもりだったんだけど…、予想外に3人も来てくれたから…

流＞えっとえっと…木下さん！

流＞私のツインテ解いていいのはみーくんだけなんだね！ごめんね！私がほしかったらみーくんに勝つことだね！…過負荷の絶対値的な意味で！喧嘩はみーくん勝てないから！

流＞鱗斗さん！

流＞…ひ　ん　　にゅ　う　じゃ　な　い　っ　！！

流＞普乳だよ！断固普乳だよっ！貧乳じゃないよっ！むしろメインキャラが常軌を逸した巨乳ばっかだから貧乳に見えるだけだよ！？嘘じゃないよっ！？

流＞ナギさん！

流＞…サウンザンドマスター？じゃなかった。みーくんは私の婿だよ！あげないからねっ！？…あげないよっ！？

流＞以上です！ありがとうございましたっ！

流＞ってかほとんど原作と違いないよねぇ。本格的に原作解離するのは会計戦からですっ、て作者から言い訳来てるよぉ～

―11　書記戦　Cパート（前書き）

――なぁ、あんた。なんでこんなにまでされてもあたしに構うんだよ？

え、それ理由いる？それはもちろんしぃちゃんが大好きだからだよ！

――…あり得ねぇー。っつうかさ、頭おかしいんじゃ…『過負荷／マイナス』で頭まともな訳ねぇか。傷開き過ぎて脳ミソ血だるまなんだな？

ひーどーいー！んーんーんー、そうだなぁ…何て言うんだろ。でも、多分しぃちゃんには分かんないかな！

――んだよ、それ…

んー、んー、んー、…しぃちゃんが目指してるのが、他人が傷つくのを楽しめる人間、である限りは理解できないよ。でもそのままのしぃちゃんでいてね！どんなしぃちゃんでも私はしぃちゃんのことが大好きだけど、無理に自分を変えたっていいことないんだから！

――…なぁ

うん？

――あたしが…あたしが、他人の痛みを理解出来るような人間なら…あんたの気持ち、理解出来んの？

…どうだろうねぇ？でもしぃちゃんは無理しちゃダァメ、しぃちゃ

んが他人の痛みを理解したらダメ。心が耐えらんないよ。しぃちゃんがしぃちゃんでいられるのは、他人の痛みに鈍感さんだったお陰なんだから、ダメ。…他人の痛みなんか、知っちゃダメ

――ハッ！なにマジになっちまってんだよ！このあたしがんな面倒くせぇことするわけねぇだろ！

うんうん、それでいいの。しぃちゃんがしぃちゃんでいてくれるなら、流さんはそれで満足。例え嫌われてもねぇー…しくしく

――相変わらず鬱陶しい…。泣くな！剥ぐぞ！

しぃちゃんがやりたいならどうぞ！

他人の痛みなんか、分かりたくないし分からなくていい

けど、あんたがなに考えてんのかが

あんたがなんであたしなんかに構うのかが、理解りたい

だから、あたしは…

―11　書記戦　Cパート

明かりが、戻る。闇に慣れかけた瞳が強い光に晒されて、舌打ちしながら志布志はまたたきをする

「停電の内に逃げた、か…。頑張るねぇ、どうも…」

逃げ出した名瀬。そしてつまらなそうな顔でそれを追い詰める志布志

志布志の手には脱ぎ捨てられた『黒鬼』。そして心が、体が折れかけた名瀬は荷物の影で寒さに身体を震わせる

応援しようにも両手を手錠で固定され、動くに動けないめだか。その隣で、とても楽しそうにガラスに寄りかかって冷凍庫内をニヤニヤと見下ろす球磨川

「――やれやれ、可哀想だなぁあんた」

酷くつまらなそうな志布志の声に、名瀬の身体が強張る

「不幸と不幸ごっこを勘違いして、幸せ捨てて不幸ごっこして…その上こうやって叩き潰されんだ。同情すんよ、マジで」

志布志は酷く緩慢な動作で冷凍庫内を歩き回る。飽きたように、呆れたように

「だから、あんたの不幸ごっこはここでおしまいだ。安心して幸せになっていいぜ？あたしがその手伝いをしてやる。証明してやるよ」

志布志の足が、止まる。倉庫に点々と残る血の跡が、名瀬の居場所を示す

「所詮、『異常／アブノーマル』のあんたじゃ、『過負荷／マイナス』の不幸を理解出来ねぇってことをな」

――その言葉が、名瀬の心に火を着けた

分からない？この俺に？ああ、確かに分からない。だが、それなら簡単だ

【理解るようにすればいい】

折れかけた心に油を巻き、火種を散らした志布志に対する怒りが、名瀬の心を、燃え上がらせる

気が付けばその手には、【愛用品】

浮かぶ表情は、悪鬼の如く

一歩一歩、やたら時間をかけて近付いてくる志布志の足音に焦りながらも、その手には、一切の失敗はない

――だが、名瀬は気付かない

【逆境／ピンチ】から生還出来るのも、一重に己が『異常／プラス』だから、ということに

それすらも、己が『過負荷／マイナス』でないことを証明していることに

『プラス』の名瀬は、気付けない

「名瀬先輩、見ィーつけた。これでしまいだ。『過負荷／マイナス』史上初の大勝利だ！祝ってくれや球磨川さんよぉ！」

叫びと共に振り下ろされた手が

ビキビキビキっ！

と音を立てて凍り付いた

「…なァーるほど。そうくるかぁ…。さっすが『異常／プラス』はちげぇわ」

凍り付いた手に驚愕しながらも、不適に笑う志布志の前に、物影から現れた名瀬は全身に布を巻き付けた姿で凄んで見せる

「おーよ。てめぇが俺にマイナスを理解出来ねぇって言うのなら、理解出来るように『堕ちて』きてやろうじゃねーか。幸い俺の『異常』は『改造』だ。予想以上に『馴染み』やすいぜ」

右手から伸ばした氷柱で志布志の拳を固めながら、名瀬はギロリと志布志を睨む

「この氷点下／マイナスの驚異から生き残るために、『過負荷／マイナス』のことを理解するために産み出したこの『異能／マイナス』を、俺は『燃える氷柱／アイスファイア』と命名する」

「〜〜〜〜っ！！！」

驚愕し、口を半開きにして名瀬を指差す志布志。声にならないその叫びに、より一層凄みをましたその瞳で志布志を睨む名瀬

「てめぇの間違いは、失敗は…俺の研究者魂に『火』を着けた。言ってしまえばそれだけだ！」

言葉と共に放たれた名瀬の蹴りが、志布志の身体を持ち上げる。同時に放たれた氷撃は、〝ピキピキ〟と志布志の服を凍らせ、砕く

「こん、の…『致死武器』！！」

砕け散り、唯でさえへそ出しのセーラー服の裾が砕けたことでこぼれ落ちそうになる胸元を押さえながら放つ『過負荷』の一撃

バンッ！と凄まじい音と共に名瀬が身体を仰け反らせる――が、その身体に出血はない

「馬鹿な…！確かに傷口は開いた！なのに何故！？」

「……『古傷を開く』ってのは防御できねぇ、なら、重要なのは開いた傷口のを『どうするか』だ。だから対処させてもらったぜ…。こうやってピキピキ凍らせてよおー」

「…嘘、だろ…！？ばっかじゃねぇのかてめぇ…！んな、変態染みた…畜生が！」

当たり前のように『異常』な行動で、『異常』な結果を出す。そしてそれが『理に叶っている、叶ってしまう』ことに、苛立ちを隠せない志布志

そんな2人の、一気に形成が変わった戦いを見ながら観覧席では

「『…困ったなぁ。このままじゃ志布志ちゃんが負けちゃうよ。負けたら撤退、守るも守らないも決めてないけど、なんとなく後ろめたい気分になるよねぇ…。にしても少年ジャンプみたいなご都合主義はやめてほしいよねぇ。バトル内容だけならヤングジャンプのくせにさぁ…』」

「そんなこと言ってる場合ですか球磨川さん。これは流石に不味いですよ。相手が『過負荷』に目覚めるなんてイレギュラーにも程があります。…志布志さんも呆けてないで『心の傷』を開いてしまえば…」

強化ガラスに阻まれ声が届かない中、『過負荷』2人の声が響く。

――しかしその言葉に、反論する瞳

「――残念だけどね球磨川くん。こういうのご都合主義って言うんじゃないのよ。必然…ううん、『当然』よ」

薄く口許に笑みを浮かべ、慈愛の表情で語る瞳に――球磨川は、目を細めて酷薄な笑みを浮かべる

「『…ふぅん。…その言葉、この戦挙全部終わった後に言えなかったら…、そうですねぇ。僕とデートしてくださいよ。勿論ディナーとその後まで』」

「人の母親を平然口説いてんじゃねーっ!!」

瞳の身体を抱き締めて球磨川から距離を取る善吉。「善吉くん可愛

い…、あ、やだ！私ったらお義母様になんの挨拶もしてない！どうしよう、どうしたらいいかしら蝶ヶ崎くん！」「とりあえず黙ってニコニコしてたら如何です？」とかほのぼのしいやり取りをする江迎と蝶ヶ崎

善吉の腕の中でこの子ったら結構逞しくなったわねーとか和みつつも瞳は不適に笑い

「構わないわよ？だって私は負けないもの」

「『よっし言質取った！ごめんねお姉ちゃん僕一足先に大人になります！』」

「球磨川さん、ちゃんと括弧つけてくださいお願いですから。そのキャラはまだ早いです」

ハレルヤ！とばかりに目をキラキラさせて脳内で瞳を剥く球磨川に冷静に突っ込む蝶ヶ崎。過負荷唯一の良識派さんご苦労さまっす

それはともかく、原作と違い球磨川からの助言なしで名瀬を相手にしなければならなくなった志布志。腕と言わず顔と言わず、全身に冷や汗をかくたびにそれが凍り付く。目の前の『馬鹿』の暴挙に戦慄し驚愕し「後悔」する彼女が選ぶ選択肢

「……フゥー…」

大きく息を吸って、肺の中の全ての空気を吐き出す。温もった息が白く染まり、急に冷静になった志布志に名瀬が眉を潜める

「なんのつもりだ?自分のスキルが役に立たなくなったの理解した土下座外交ってか?最初に言っておくが物語はもうクライマックスだ。てめぇの身ぐるみ完膚なきまでに剥きに向いて全裸で放り出せば俺の勝ち。…とはいえ、同じ女としてオトコのコの前でオンナのコを真っ裸に剥くなんざ――

気乗りしないぜ。」

にたぁり、と満面の笑みを浮かべる名瀬に、「ノリノリだーっ!?」と驚愕する観覧席一同。ガタッ!と物音を立てながら球磨川がビデオカメラを回し始めたが、スルー。やったね禊くん!オカズが増えるよ!

志布志はそんな――自信満々で勝利を確信した名瀬に、ぼんやりとした視線を向ける

そして再び溜め息を吐いて…腕を広げた

「好きにしな」

――『!?』

驚愕が広がる。なんの迷いもなく「敗北」を選んだことにも、スキルが通じなくなった程度で『過負荷/マイナス』が、産まれて初めて得られるかもしれなかった勝利を諦めたのにも

だが、取り分け動揺していたのは――他でもない、球磨川　禊だった

確かに志布志は勝てないだろう、という確信はあった

だから負けても構わないと、いっそ『バズーカー・デッド』で全て「台無し」にさせるつもりで彼女を送り出した

だというのに彼女が諦めてしまっては…

人知れず、いつもと同じ表情で、それでも人生で二度目の大混乱。言い様のない感情に襲われる球磨川の前で、腕を広げた志布志の前に、名瀬が立つ

「――いいんだな？」

剥くぞ？と、わきわきと動くその指が語る

「おー、ただし

――出来んなら、な？」

ぱんっ！と

名瀬の全身が、弾けた

志布志の全身が、弾けた

『！？』

再びの驚愕。球磨川すらも理解できない。志布志のこんなスキルは、知らない。そもそも『致死武器』は封じられた。だというのにどうやって？何が起こった？

『燃える氷柱』で封じたはずの『致死武器』が、通じなかったはずの『致死武器』が、名瀬の身体を、心を折る

一度目の致死武器で、そして二度目――今の謎のスキルで再び心を折られた名瀬が、驚愕の表情で、氷の涙をボロボロと溢しながら天井を見つめる

志布志もまた、ボロボロと涙を溢しながら――それでも、血塗れになった全身を引き摺り、呆然と天井を見上げる名瀬に近寄る

「これがあたしの切り札…『哀の鞭』…『スカーレッド』だ。効いただろ?自称『過負荷／マイナス』にゃあ、効果抜群…ってな」

ふらふらと立ち上がる志布志を前に、名瀬は反応を示さない。ただ、ほんやりと天井を見つめた、親友――古賀の名を呼ぶ。元家族――めだかの名を、兄の名を呼ぶ

「…ここで使いますか」

「『!?。知っているのかライ…蝶ヶ崎くん!?』」

球磨川の問い掛けに、こくり、と頷く蝶ヶ崎。つぅ…とその頬を伝う汗の意味は、彼にしか分からない

「…流さんの「せい」で産まれてしまった、『致死武器』の派生スキル…さしづめ、『致死武器・還り血ｖｅｒ』。あのスキルは、今まで彼女が使っていた「相手の古傷を開く」スキルではなく…

――今まで人を傷付けた分だけ、自分も傷付く

因果応報のスキルです」

「『――!?』」

そんな馬鹿な、と

叫びたい衝動を抑えて球磨川は顔を歪める

――それは一種の奇跡

球磨川　流が注ぎ続けた「愛」が、志布志　飛沫の、『過負荷／マイナス』を僅かに、大きく変えたことの証明

そしてその奇跡は――人の身体を弄くり回し、心を折り、様々な人間を堕としてきた『異常／アブノーマル』・『改造』を持つ名瀬とも他人の傷を開く『過負荷／マイナス』を持つ志布志自身とも、相性が最悪であり――

両者は、重なりあうようにして倒れ、気絶する

お互いの傷から流れ出た大量の血液が、パキパキと凍り付く中、呆然とそのさまを見つめることしか出来なかったためだかの声が響く

「不味い！あのままでは2人とも凍死してしまう！長者原三年生！」

「…しかし、ルール上、凍死しようが何が起ころうが戦挙を中断する訳にはいきません。どちらかが早く目覚めることを祈るしか…」

「『めだかちゃん』」

球磨川の不意の呼び掛けに、びくりと身体を震わせるめだか。対して球磨川は、にたり…と口許に笑みを浮かべながら告げる

「『とある条件を飲むなら、ここから2人の服を「なかったこと」にして真っ裸に剥いて引き分けにしてあげないこともないよ？大事

なメンバーを損なうこともなく、黒星をつけることもない…中々いい取引じゃないかな？』」

「くっ…」

名瀬の、そして志布志の命を人質に取った「脅迫」。あからさまといえばあからさまな「それ」に、唇を噛むめだか

「――分かった。要求を呑む。ただし私個人で出来る内容にしろ」

「『商談成立ぅ！』」

楽しそうに笑い、嬉しそうに手を振るう球磨川。同時に重なりあって倒れた志布志の、そして名瀬の衣服が傷と共に消え去り、長者原の書記戦終了の声が響く

そんな中、球磨川はびしりとめだかを指差して言った

「『めだかちゃん！君は次の会計戦で――――――』」

－11　書記戦　Cパート（後書き）

流＞お久しぶりですの流お姉ちゃん参上！またまた久々の次回予告！

禊＞『僕がめだかちゃんにした謎の要求――明確に狂い始める原作の物語！』

流＞果たしてお姉ちゃんはその波乱の物語を受け入れることが出来るのか！

禊＞『ここでめだかちゃんに次回はスク水ニーソで観戦すること！！――みたいな要求したら駄目かな？』

流＞みーくんそのキャラ早い、早いから。悪平等編のキャラでしょ？多分

みーくん＞『僕の本質は変わらない…！つまり僕はこの極寒！女子高生脱がし合いキャットファイト～ポロリもあ・る・よ♪～ですでにｗｋｔｋだっのさ…！』

流＞餅つこうよみーくん。それにそんなに好きなら私が裸エプで…

禊＞『そんな「がっかりー」とか「ザンネーン」みたいな擬音の付きそうなサービスにならないサービスシーンとか需要ないから』

流＞傷付いた！深く傷付いた！

禊＞『次回、ながしシスター　－12、会計戦』

流＞むーちゃんと善吉くんの絡みがあるよ！

―12　会計戦　Aパート（前書き）

――君は次の会計戦に「サブプレイヤー」として参加すること！

球磨川の出した条件はそれだった。

当然、長者原は抗議した。「生徒会戦挙」において、サブプレイヤーの参加する試合形式は存在しない――訳ではないが、ほんの極僅かだ。次の試合でそれを江迎が引き当てる可能性といえば、それこそ通常であれば「あり得ない」

だからこそ、ここに至って現生徒会メンバーは確信した

――過負荷チームの中には、未来視が可能な「過負荷／マイナス」が存在する、と

となれば、そこからは推察だ

球磨川　禊――大嘘憑き／オールフィクション…除外

志布志　飛沫――致死武器／スカーデッド…除外

そして球磨川　流…巨大なカナヤスリや金槌を使い、一撃で都城を殴り飛ばしていた「怪力」使い…除外

…消去法で江迎　怒江

あるいは蝶ヶ崎　蛾々丸

…このどちらかが、「未来視」の持ち主のはず

しかし善吉が言うには、「江迎　怒江」に色々あって抱き着かれた（この説明の際に一悶着あったが、割愛）際に、「制服の生地が腐っていた」そうだ

ならば、「江迎　怒江」の「過負荷」は「腐らせる」あるいは「微生物を操り発酵を進ませる」、の類いだと推測される

そこで名瀬は考えを話す

「もし仮に、江迎　怒江の過負荷が「問答無用であらゆるものを腐敗させる」、だとしたら――球磨川の旦那は、無敵の生徒会長、黒神　めだかの性根を「腐らせる」つもりなんじゃねぇの？」

と

その上で戦闘能力の低い「未来視」の過負荷の持ち主である蝶ヶ崎は、不戦勝が予想される副会長戦に置くことで損害を出さずに勝利するつもりなのではないか、と

――戦争に置いて、相手の指揮官の思考を読みきった方が勝利するのは自明の理だ

ならばこそ、現生徒会チームは確信と余裕をもって、会計戦に当たることが出来た

――過負荷の「思考」を読みきることなど本当に可能なのだろうか、

と

内心で、大きな不安を抱えながら

ー12　会計戦　Aパート

「あ、あ、あああーっ!!触手が!触手が!私のみーくんをうぞうぞってするー!」

「だからそこでブーメラン使うんですよお。攻略ダンジョンで手に入れたアイテム使うのは基本ですう」

「ブーメランってなんだっけ!?」

「『え、そこから?お姉ちゃんもうゲームやめて。あとゲームの主人公の名前に僕の名前付けるのやめない?』」

「このお姫様ムカつく!なんでこんな偉そうなの!?魚人じゃん!ただの魚人じゃん!魚人海賊団にでも入っててよ!」

「…新生徒会チームさま?もうそろそろ生徒会戦挙第三試合　会計戦『火付兎』を初めてもよろしいですか?」

「待って待って待ってあーっ!死んだ!はい死んだ!みーくんが死にました!えーんむーちゃん慰めてぇー!」

「下手なんだからゲームしなければいいのに…」

呆れ顔の江迎に頭をよしよしと撫でられながら、ゲームをぶん投げる流。哀れなゲーム機はくるくると宙を舞い、コンクリート製の柱に衝突してぱっくり割れた。金持ちだからこそ出来ることだろう

――箱庭学園が誇る一大植物園『木漏れ日』。四季折々の草花のみ

ならず地球上の植物の半分以上を展示する、国宝級といっても過言ではない施設

その南口前に、現生徒会、並びに新生徒会メンバーは集まっていた

「…えー、では球磨川　流さまにゲームをやめて頂いたところで、江迎さまが選ばれた『卯』の試合形式、『火付兎』のルールを――」

「その前に少しいいか、長者原三年生」

…説明をしようとした直後に水を差され、僅かに沈黙する長者原。…が、許可しない訳にもいかない。「どうぞ」と言い、一歩下がる。口を挟んだめだかが、「すまんな」と一声かけると、一歩前に出た

「球磨川…いや、戦場ヶ原三年生と呼ばせてもらおう。学校名簿にはそう書かれているのでな」

めだかはじっと流を睨み付ける。江迎の胸に半分顔を埋めながら、「んー、んー？」と首を傾げる流。「揉まないでくれませんかあ…？」と困った顔の江迎

「夏休み中とはいえ携帯ゲーム機の持ち込みは校則違反だ！風紀委員に見つかれば厳罰だぞ！」

「でも雲仙ちゃんもゲーム持ち込んでるわよ？」

「他人がやってるからといって自分がやっていい道理はない！以後気を付けるように！」

「はぁ～い…」と不満そうに唇を尖らせる流。その返答に一応満足

したのか、笑みを浮かべて引き下がるめだか。その後ろでは「それ今言うことか…!?」と頭を抱えている善吉がいるが、スルー。苦笑気味の合法ロリお母さんもいるが、まとめてスルー

「…えー、今回は候補者の他に一名ずつ、サブプレイヤーとして競技に参加していただく、タッグ戦…だったのございますが…」

「『…そう、既にサブプレイヤーは決まっている』」

妙にカッコつけた腕組みポーズで長者原の台詞を引き継ぐ球磨川。

「…へ?え?なに?」と首を傾げる流と、その正面に立つめだかの視線が交錯した

「『前回の書記戦での取引の結果…。現生徒会チームは「黒神めだか」、新生徒会チームは「球磨川流」がサブプレイヤーに――』」

瞬間、流が動いた。普段の彼女からは想像すら出来ないような速度で球磨川に詰め寄る流。いつもニコニコと笑っている流が険しい表情をしていることに、驚きを隠せない江迎

「――どういうことかな、みーくん」

「『…』」

球磨川の胸ぐらを掴んで引き寄せる流。同じ顔が、ニヤニヤと、そして厳しい表情でキスでもするのかという距離で睨み合う。睨み付けて尚、無言で笑みを絶やさなかった球磨川は、ようやく口を開いた

「『大したことじゃないよ、会長戦にそなえてめだかちゃんの手の内を探って――』」

「みーくん」

へらっと笑いながら答えようとした球磨川の言葉を遮り、流はじっとその目の奥を睨み付ける

「私に、かっこつけても無駄だよ」

――僅かに空気が凍る。じっと、その光景を見詰める瞳。そして、瞳は確信する

（球磨川　流…間違いなくこの娘は球磨川くんのアキレス腱。間違いなく流さんから切り崩せば、球磨川くんの本心を探れる…）

しかし、同時に疑問も沸いて出る

（…なぜ、私には「球磨川　流」さんを診察した記憶がないの…？まるで、そう…「人吉瞳と球磨川流が出会った現実」が、なかったことにされてしまったような――）

物思いに耽っているうちに、球磨川が困ったように息を吐いた。ポリポリと頬を掻きながら、そっと流の手を胸元から外す

「『――単純に、善吉ちゃんと江迎ちゃんが戦うのを避けたかっただけだよ』」

「その理由は？みーくんには話したよね？この戦いがなきゃ、むーちゃんは善吉くんに想いを分かって貰えないよ？」

「『その辺りはちゃんと考えてあるよ』」

…しばし無言で視線がぶつかり合う。おろおろと慌てた江迎が2人に声をかけようとした所で、流の表情が…くしゃり、と歪む

「…ごめんね?痛かった?ごめん、ごめんね…」

大粒の涙を流しながら、すがり付くように球磨川に抱き付く流。球磨川は表情を変えずに小さく溜め息を吐き、そっとその頭を撫でる

「『長者原くん、説明の続きしていいよ。すぐ宥めるから』」

涙する流の頭をぽんぽん、と軽く撫でながら、球磨川は長者原を促す。心配そうな顔でその隣に立つ江迎

「…了解いたしました。では説明をさせていただきます」

頷き、懐から趣味の悪い、メタリックな外見にタイマーと装飾のついた腕輪を取り出しながら説明を始める長者原

「参加なさるサブプレイヤー。「黒神めだか」さまと「球磨川流」さまはこのブレスレットを装着して頂きます。このブレスレットは時限爆弾内蔵式であり、作動させてから丁度1時間後に爆発する仕組みになっております」

『!!』

しれっと何でもないことのような説明に驚愕する一同。当然、それに噛み付く現生徒会メンバー…古賀

「爆弾って…冗談でしょ!?そんなの腕がぶっ飛ぶくらいじゃ済ま

ないよ！？」

「ええ。ですから急いで外して差し上げないといけませんね。それがこの会計戦のルールでございます。
江迎さまと人吉（母）さまにはそれぞれ敵対チームのブレスレットを外す鍵をお渡しします。
どのような手段を用いても構いません。相手の持つ鍵を奪い、パートナーの腕輪を外し、『先にパートナーを救った方の勝利』となりましてございます。
鍵を持つプレイヤーはそれが所有しているものでも奪ったものでも、肌身離さずよく見えるようにお持ちください。捨てたり隠したり鍵を破壊することも反則となりますので、江迎さまは鍵を破壊しないようお気をつけください」

「はぁ～い」とうっすら笑みを浮かべたまま気合いを入れる江迎。
そんな彼女をどこか複雑そうな目で見る現生徒会チーム

…先程から見ている限り、江迎は――『過負荷』らしくなさすぎる。
『普通』に流を心配し、『普通』に流を慰め――『普通』に幸せになりたがり――そして…

視線に気付いたらしい江迎が、はっとしたように現生徒会チームに視線を向ける。そして――善吉が自分を見つめていたことに気付くと、小さく、嬉しそうにはにかんで…手を振ってきた

…それに思わず手を振り返せば、それだけで花の咲くような笑みを浮かべる江迎

――『普通』の恋する乙女のような視線で、善吉を見つめている

それが嬉しくもあり、複雑でもあり…悔しくもある。何とも言えない混沌とした感情。…自分はどうすればいいのかわからない。めだかは内心で苦悩しながら、長者原の説明に意識を戻す

「即ちこの会計戦において留意すべき点は以下の４つ。
１、制限時間内に
２、鍵を守りながら
３、鍵を奪い
４、パートナーを助ける
ただそれだけの実にシンプルな競技でございます。勿論、片方の爆弾が解除された時点で会計戦は終了。もう片方の爆弾の時限装置も連動して同時に停止されますので、相手に勝てないと思った場合は相手に鍵を渡せば、パートナーの死亡は回避出来るでしょう」

「…っ、」

だが、それは違う

球磨川の『大嘘憑き』は死んだことすらなかったことに出来るのだ。万が一、億が一…球磨川が実の姉の死すら許容するような人非人だったのなら…例え一度姉を殺してでも、引き分けに持ち込む可能性がある

自分は炸裂弾の直撃を受けて生き残った実績がある。たかが爆弾ごときで「黒神めだか」を亡き者に出来るとは思っていないだろう。ならば、球磨川の目的は――『過負荷／マイナス』の思考が分からない。理解できないからこそ、めだかは苦悩する

「ＯＫ、前振りは終わったかな？おばさんは立ち話ならともかく、ながーい話を一方的にされるのは苦手なのよね」

苦笑い気味に前に出る瞳。それに応じるように、江迎も一歩前に出る

「今日はよろしくおねがいしますう」

「はいよろしくね、いい試合しましょ」

「はぁい」

にこやかに、これから人死のかかった試合をするとは思えない軽さで会話する2人。…僅かに、球磨川は面白そうに眉をぴくりと跳ねさせた

「『さっすが人吉先生。自信満々ですねぇ、てっきり目論見が外れて残念がってると思ったのに』」

「あらやだ、気付いてたの?だったらデートのお誘いにくらい乗ってくれてもいいのに」

――本来であれば、瞳はこのバトルを通して球磨川と接触／診察するつもりだった。だというのに肝心の球磨川が、流の影に隠れてしまってはどうしようもない――と、いうわけでもない。流を、あるいは江迎を突破口に球磨川に辿り着く。それは、難しいが…不可能ではない。だからこそ、瞳は朗らかに笑った

「『デートとその後までの約束はもうしてますからねぇ。次は婚姻届けに判を押す約束でもしま』」

「その話詳しく」

ギリリ…と目を吊り上げた流が球磨川の首を絞める

仲睦まじい姉弟に苦笑しつつ、瞳は続ける

「人妻だっつーの。…でもそうねぇ、前みたいにこの勝負でも賭けましょうか？
もしも私がこの会計戦で勝ったら――流さんの診察をさせてもらえないかしら？」

瞳が、そう言った瞬間、

「『…』」「う？」

球磨川が、表情を凍らせた

密かに全員がその表情の変化に驚く中、球磨川の表情はいつもの薄ら笑いに戻る

「『――いえ、やめておきましょう』」

『？！』

球磨川が、明確な『逃げ』の手を打った――その事実が、その場の全員を…流も含めて、驚愕させる

対して瞳は…逆に、嬉しそうにうっすらと笑った

「そ、じゃあ諦めるわ。じゃあ江迎ちゃん、またあとで会いましょう」

「では人吉（母）さまと黒神さまは西口、江迎さまと球磨川（姉）さまは東口から館内に入っていただきます」

長者原の声に従い、移動しはじめる一同。球磨川に抱き付いて離れない流に皆が苦労する中、そっと江迎は目当ての人物に声をかけた

「あ、あの…善吉くん」

「え、あ？お、おう…」

頬を染め、もじもじと、ぐじゅぐじゅと、スカートの前面を腐らせながら話し掛けてきた江迎に困惑する善吉

何せ、会話は二回目だ。しかも一回目はいきなり抱きつかれて意味の分からない告白（？）を垂れ流してきた相手だ。そりゃ警戒する。誰だってする

「あ、あの、あの…ね…？」

「あ、ああ…落ち着いて話せよ、な？」

いまいち『敵』っぽくない『過負荷』の少女に調子を崩されながら、人の良い善吉は江迎を宥める。「はぅ…」と耳まで真っ赤に染めた江迎は、上目遣いに善吉を見上げた

「つ、伝えたいことは三行で、言いたいことは三行で…
試合が終わったら、
伝えたい想いがあります
終わったらまたここに来てください
…だ、駄目ですか？」

話してる途中からどんどん涙目になる江迎に、善吉がＮＯと言えるはずもない。「あ、ああ。分かった。必ず来る」と返事すれば、途端に嬉しそうな顔で、

「な、何時間でも何日でも待ってます！」

と言い捨て、走り去っていく江迎

その後ろ姿を呆然と見送る善吉

――だが、元気に走り回る彼女を見るのが、これで最後なんて…その時の俺は想像すらしていなかったんだ…

「なんてことにならなきゃいいな」

「名瀬師匠…。洒落にならねぇっす…」

ちょっと想像して、ぞっとした善吉だった

－１２　会計戦　　Ａパート（後書き）

流＞復刻版面白いよねぇ…。古きよき時代のゲームだよ…

江迎＞…（↑ちょっとやりたい）

流＞…やる？

江迎＞い、いいですよお。腐らせちゃいますし…

流＞大丈夫大丈夫！こんなもんいくらでも買い直せるから！むしろむーちゃんのために買い占めちゃうから！

…その日、市場からそのゲーム機が消えた

―12　会計戦　Bパート（前書き）

「まさか貴女と肩を並べて戦える日が来るとは想像すらしていませんでした」

口元にうっすら笑みを浮かべて言うめだかに苦笑いで返す瞳

「寂しいこと言わないでよねー。おばさんは若い娘がここまで来てくれるのわくわくしながら待ってるんだから。…ま、肩を並べる暇なく追い抜かしてやったぜ！って意味ならその通りかもだけど」

「ご謙遜を。…未だ人吉先生の域に達した、などとと不相応な自惚れなど持ち合わせていません」

「…ま、いいけどね」

もはや苦笑する以外に道はない瞳。しかし…そこは年の功。従者のように黙して付いて来るめだかを一瞥し、話題を変える

「それに…多分だけど、まともな戦いにはならないもの」

「？。それはどういう…？」

首を傾げるめだかに、瞳は不適な笑みで応える

「ちょーっとばかし昔の血が騒いでてねぇ…。４２歳女子高生女医として頑張っちゃおうかと」

えへっ、と軽い笑みで言う瞳。あまりにもカオスな称号に引きつる

めだかの笑み

「切って並べて揃えて整えて縫う。誰でも出来る簡単なお仕事だから…手伝ってね、めだかちゃん♪」

…有無を言わせぬ迫力の籠もったその微笑に、めだかは僅かな間もなく頷いた

「全力で応えてみせます」

―12　会計戦　Bパート

「さぁーってどうしよっかなぁ…」

困ったように頬を掻く流。明らかに原作にない展開。ほとんど覚えてはいないが、あの女医（幼）が自分の天敵レベルに相性が悪いことだけは覚えている

「どうかしましたかあ？」

きょとん、とした表情で、女の子座りで土いじりをしていた江迎が振り返る。それに「なんでもないよー」と返しながら――ぎょっとして振り向いた

「ちょっ！？むーちゃんそれなに！？」

「デクナッツですう」

そういうことじゃない

地面に手を付けた江迎の周りでくるくると動き回る手のひらサイズの木人。ゼ〇ダファンには見慣れたおちょぼ口となんか光って見える目。いつの間にそんな過負荷に目覚めたー！？と驚愕する流

「土を腐らせ植物を操る…。これが私の新しい過負荷の形…らしいですよお？球磨川さんに教えて貰ったんですけど…あんまり役に立たなさそうですねえ。人間サイズのを複数動かすのが限界っぽいですう」

くつくつくつ、と目が笑ってない笑みを浮かべながら身体を震わせる江迎。流は「んーんーんー…？そういや千年杉とかあったような…？」と頼りにならない原作知識を思い出しながら、踊るデクナッツたちを眺める

――流は気付いていないが、江迎の言葉の中には正しく明確過ぎる「原作解離」が存在している

消耗が激しくともタイプ：千年杉という大技…もとい、『巨大技』を使うことすら可能だったはずの江迎が、人間サイズ植物人間を複数操ること「しか」出来ない――それは江迎がここに至るまでに『過負荷／マイナス』としてマイナス成長を遂げていないことの証明であり、江迎自身に「己は愛してもらっている」という自覚が僅かなりともあるということの証明。

過負荷：『荒廃した腐花』は江迎自身が愛されていない自分を正当化するために生まれた『過負荷』

…球磨川　流という己／江迎　怒江を愛してくれうる者が存在し、己自身が人を…人吉　善吉に恋心を抱いているが故に――『江迎怒江』は、己の『過負荷』の成長を殺し、せっかくの成長性も、『過負荷／マイナス』としての許容量も無駄にしているということ

何よりも己の『愛』でもって『過負荷』を愛することのみを理想とする流が知れば、気付けば…はたして、どんな反応をするだろうか？

「んーん～んー…。困ったなぁ…。正直ここまで無理ゲーって久々じゃない？あんしんいんさんとバトッた時以来って感じー？黒神めだかと人吉先生のタッグとかなにそれこわい」

けれど流は気付かない。気付かないし気づけない。

それが『球磨川　流』という存在だから

「しかも負けろとも勝てとも引き分けろとも言われてないんですよねえ。負けは無理でも引き分けられるようがんばりましょお」

「…遠回りにおねーさんに死ねって言ってない？さずかのにゃがしおねえたんも爆弾相手は無理無理よ？」

「気のせいですよお」

くつくつと笑い、立ち上がる江迎。デクナッツが急速に腐り落ちるのを眺めながら、スカートに付いた土埃を流が払い落とす

「…しゃあない。切り札を一枚切りますか」

言いながら流はスカートの中から黒い全身スーツと白い上着を取り出す。それを見て、驚いたように口元に手をやり江迎

「それって確か…」

「そ、名瀬くんの『黒鬼』と風紀委員の『白虎』。２つ合わせて流お姉さん式『賊刀・鎧』ってね。みーくんがどさくさ紛れに盗ってきてくれました！」

てへぺろっと舌を出す流。愛嬌はあるが可愛くはない。っというか可愛くとも許されない。窃盗は犯罪です。銃刀法違反？爆薬不法所持？『異常』ならセーフでも『過負荷』じゃアウトだ

「長者原ちゃーん！覗かないでねー！」

大声で叫びながらぽいぽいっと軽いノリで服を脱ぐ流。白いシンプルなスポーツブラがサービスにならないサービスシーンしたところで「あわわ…こんな場所で脱いだら駄目ですよお！」と注意しながら草木を操って生け垣を作る江迎

「装着完了！フルアーマー流お姉ちゃん！」

などと叫びながら、明らかにサイズが合っていない『黒鬼』を強引に纏い、その上から『白虎』（女子用Ｓサイズ）を着た流が生け垣から飛び出してきて

「お？」「あれ？」

江迎と共に全く同時にぴたりと動きを止めた

「縫合格闘技『狩縫』２の技『意図捲』」

――極細の糸によって空間に固定された2人が、指一本動かせないことに驚きながら、目だけ動かして声のした方向に視線を向ける

「なんにせよ、『過負荷』を自由にさせておくとお話にもならないもんね。動きは止めさせて貰ったわよ」

「…お見事です。ますます腕を磨かれたようで」

針と糸を片手に木々の間から姿を見せる瞳と、その後ろに執事かメイドのように侍るめだか。「うげぇー…」と嫌そうな顔をする流と、

「さっすが善吉君のお義母様…間違った。お母様…」とニコニコ笑う江迎

「まず質問していいかしら？」

まるで主婦が路上で立ち話をするかのように。気軽に気さくに軽く話しかけてきた瞳。それに冷や汗を浮かべ、焦りと困惑を表情に出しながら流はブラフの笑みを浮かべる

「…バトル中なんですケドー」

「なに、そんなに時間はいらないわよ。江迎さんは動けないし、私は攻撃する気は今はない。少しくらいおばさんに付き合ってくれてもいいでしょ？」

「や。年寄りと話すと老けるから」

「まず一つ目。貴女たちのどちらかは分からないけど…私たちに何かした？」

流の言葉をさくっと無視して真剣な表情で流…いや、流と江迎を見つめる瞳。その質問の意図が掴めず、困惑の色を濃くする2人に、瞳は言葉を重ねる

「私達…あなた達を見つけようと思ったわけでもないのに、自然と、まるで当たり前のように「ここ」に…「貴女達2人のいる場所」に向かっていたわ。無意識に、当たり前のように、ね…。最近の女子高生はいつから意識誘導が出来るようになったのかしら？」

にこにこと微笑む瞳――けれど、その目は笑っていない。警戒心と

猜疑心。探るような視線が己に突き刺さるのを感じ――『トラウマ』を刺激された流が、その視線から逃れるように声を張り上げる

「大したことじゃありませんーっ！『過負荷』ってのは『メリット』を生むものじゃないんだよ。『大嘘憑き』は世界を消してしまいかねないプレッシャーを常に背負い、『致死武器』は人を傷付ける罪悪感を常に背負う。そしてそれは、私の『愛し恋し／ラブアレルゲン』も例外じゃないのです！」

誇らしいものを自慢するように、嬉しそうに、我が子を見せびらかすように、穏やかな笑顔で流は薄い胸を張る

「私の『過負荷』の『デメリット』は、『過負荷／マイナス』を、『異常／プラス』を惹きつける。
無意識に『過負荷』は、『異常』は、私に出会うための道を選択する。
知らず知らずに私を、『愛し恋し』を求めるの」

――『過負荷』は、そして極一部の『異常』は無意識に、あるいは自覚しつつも他人との繋がりに餓えている

『普通』と『特例』ばかりの世界で排斥され『区別』されるが故に、同類の『異常』や『過負荷』との繋がりを求める

そして『愛し恋し』。これは『異常』でも『過負荷』でも関係はない

例え『殺人衝動』を、『認識されないほどの強さ』を、『他心受信』を、『他人と触れ合えない程の反射神経』を持っていようとも、『愛し恋し／ラブアレルゲン』はそれを受容し受け入れ愛するだろう

愛するために。受け入れるために。『愛し恋し／ラブアレルゲン』は彼らを惹きつける

『過負荷』については言わずもがな

故に求める。無意識に。その能力を駆使してアンテナを張り、『愛し恋し』の居場所を探り当てる

流がいつもふらふらと移動し続けている大きな理由がこれだ

常に『異常』に、そして『過負荷』に狙われる

『メリット』に繋がる『デメリット』。不自然過ぎるエンカウント率の証明

最も――例え相手がどんなに悩み、苦しみ、他人に餓えていようとも…。どんなに『球磨川　流』の存在が求められていようとも、相手に『過負荷』の芽が無ければただの『異常／アブノーマル』。『異常』嫌いの流は見かけはしても話しかけすらしなかったが…

「…最も、たまぁに洒落にならないのが釣れちゃうけどね。あんしんいんさんとかあんしんいんさんとかあんしんいんさんとか」

遠い目で語る流の様子に内心で首を傾げつつ、瞳は笑顔の仮面を着ける

「んー、こういうこと言われたら嫌かもしれないけど、うちの病院にいてほしかった感じねー。貴女がいるだけで患者が入れ食い状態じゃない」

「病院としてそれはどうよ」

「大事の前の小事よ。大したことなーい大したことなーい」

とりあえず笑い、疑念が解けたところで――代わりに『怪力』系の過負荷で何故人を惹きつけるのか…という疑問が生まれたが――会計戦だけでも終わらせられるようにしとこう、と瞳は江迎に近付く。鍵さえ奪ってしまえば、いつでも終わらせられる――そんな思考で、完全にその場に縫い止めた江迎に歩み寄り――

「ちなみに私の過負荷は『荒廃した腐花／ラフラフレシア』」

にっこりと笑う江迎の表情な総毛立つ

「まず――っ！？」

咄嗟の判断で背後のめだかに指信号。それを正確に読み取っためだかが瞳の体を背後に引っ張るのと

「手で触れたもの全てを腐らせる性質（たち）の悪い過負荷です☆」

過負荷2人を拘束していたワイヤーが、一気に腐り落ちるのは全くの同時だった

「くっ…！？」

グズグズに腐った糸巻きを投げ捨て、懐から針を取り出す瞳。その眼前に立つ流

「サブプレイヤーによる妨害は禁止されてないもんねー！『迫刀・

針』っ！」

スカートの中から取り出した１ｍはありそうな巨大な縫い針。糸を通す穴を持ち手に、レイピアのように構えられたそれに冷や汗を垂らす

だが――その直後に真横に殴り飛ばされる流。「く…ぅ…！？」と顔を歪め、背中を植物園の木に埋めながら自分を殴り飛ばした人物――黒神めだかを親の仇を…いや、弟の仇を見るような目で睨む流。いや、弟の仇なわけだが

「良いことを聞いた。実は私も参加したくてたまらなかったのだ。それにその服はお姉さまと風紀委員の…成る程。『乱神』や『改神』を使わなければ何度か本気で殴っても問題なさそうだな」

僅かに嬉しそうな顔をするめだかを前に、流は顔を歪めながら立ち上がり、べっと血混じりの唾を吐く。殴られた際に口の中を切ってしまったらしい

「…本っ当に！あんただけは大嫌い！」

巨大針を片手に逃げ出す流と、

「連れないことをいうな！少しくらい後輩と遊んでくれ！」

それを追うめだか。生け垣や草木の奥に消えていく２人を見送り、江迎はゆっくりと瞳に向き合う

「うふふふ…。倒して結婚、善吉くんと結婚…。愛の試練ってやつよねこれを越えて私達は結ばれるのよだってそうでしょう？ロミ

オとジュリエットも最初は敵同士から始まったんだもの障害があればあるほど愛の炎は燃え上がるって流お姉さんも言ってたものうふふふふああ間違っちゃったまずは告白してデートしてあはっ、やっぱり初めては善吉くんの部屋がいいなってそうするとやっぱり…」

ぐりん、と首を回し――ぐるぐると腐った感情が渦を巻く目で瞳を睨む

「母親とか、邪魔ですよねえ」

「…親不孝な娘もいたもんだこと…」

苦笑い気味に…しかし緊張を滲ませながら、ランドセルを下ろす瞳

――残り時間、４７分２３秒

―12　会計戦　Bパート（後書き）

禊：『リア充は死ね』

善吉：な、なんだいきなりっ!?またなんかやる気か!?

禊：『いや善吉ちゃんはいいよ。不知火ちゃんとか江迎ちゃん名瀬ちゃんとかいるけど…まぁがんばって』

善吉：どういう意味だよ!?っつかなんでそこで名瀬師匠!?

禊：『高貴ちゃんが後輩の女の子とイチャイチャしてる予感がする』

ギリッ…

善吉：はぁ?後輩っつうと…喜界島か?ねぇよ。デビルねぇよ。ありえねぇよ

禊：『…そうじゃなくて…いや、そうなのかな?…くそっ、なかったことに出来ないかなぁ…』

善吉：…いや!スルーしてたけどお前嫉妬とか怒りとか見せたらダメなキャラだろ!?

禊：『後書きだからいいんだよ』

善吉：メタいんだよいちいちお前は!

―12　会計戦　Cパート（前書き）

コポコポ…と、琥珀色の液体がカップに注がれる。江迎の両手の事を気遣ったのか、わざわざストローまで付いていた

「えっ、と…」

困惑したまま所在なさげに包丁両手に右往左往する江迎。人間を警戒する小動物のようなその反応に苦笑しながら、ぽんぽん、と自分の隣を叩く瞳

「座ったら？それと、包丁の持ち方間違えてるわよ？」

そんな持ち方じゃいいお嫁さんになれないぞー、と続けると、江迎は眉間に皺を寄せて仏頂面

「…バトル、しないんですかあ？」

「しないわよ？」

あたしは医者だもん。患者増やしてどうすんのよ。と笑えば、江迎は本格的に困ってしまったようで、「あー、うー…」と小さく呻く

――江迎　怒江。性格は愛増型。

もっとも扱いやすく、もっとも扱いにくい、そんな性格。当事者でなければ、あるいは当事者の関係者でなければそれとなく意識を誘導することで制御は可能――だが、残念ながら今回江迎　怒江の「

救」愛対象は我が息子。思いっきり関係者だ

――だが、それならそれでやりようはある。むしろ、切れる手札が増えたのは僥倖

瞳は科学者のような冷静な思考で、少しだけ「大切なモノ」を切り捨てる

紅茶の入ったカップを傾け、ちょっぴり奮発した高級茶葉の香りを楽しみつつ、「にっこり」と笑った

「善吉くんの子供のころの写真、見たくなーい？」

「何でもお申し付けくださいお義母さま♪」

――食い付いた…っ！！

一瞬で隣に座ってニコニコ…いやニマニマ？…むしろギラギラとした笑顔で自分を見下ろす江迎の姿に、内心でニマリと笑う瞳

「腐らせちゃうとアレだし、わたしがめくってあげるわね？」

「ええ！ええ！」

ランドセルから取り出したアルバムをキラキラした目で見つめる江迎

江迎　怒江という少女にとって、人吉　善吉という少年は初めて「自分を見てくれる異性」という存在だった

球磨川も、蝶ヶ崎も…、同性であるはずの志布志や流。他の過負荷

の少年少女と会話を交わしたこともある、仲良くカラオケに行ったりショッピングに行ったこともある

――だが、それは自分が、江迎　怒江という少女が『過負荷』だからこそ生まれた友情、絆なのだ

果たして自分が過負荷でなかったら?他の過負荷の少年少女は自分と紛いなりにも同じ空間にいてくれただろうか。側にいるだけで空気を腐らせてしまうような面倒な女の子の相手をしてくれただろうか

…答えは、否だろう

それを、誰よりも分かり易く、誰よりも大胆に表現している、球磨川　流という存在を知っているからこそ、その結論はあっさりと導き出された

『過負荷』にとっては『普通』も『特例』も『異常』も、一切合切区別なく『敵』なのだ。『敵』と仲良くしてくれる存在なんか、江迎は知らない。出会ったことがない。あらゆる『過負荷』を受け入れる包容力を持った流すらも、『過負荷』以外には敵意を向けている

――けれど、善吉は違うのだ

彼が見ている江迎　怒江は、『過負荷』である前に、『敵』である前に、『人間』で、『江迎　怒江』なのだ

それが、たまらなく嬉しい

『普通』なのに、『普通』のくせに、わたしが『過負荷』だと知る前も、後も、わたしを見る目が変わらない。困ったような目でわた

しを見る彼の視線には、困惑はあっても恐怖や敵意がない

――わたしは、彼の「目」に惚れさせられてしまった

だからこそ――彼の全てが知りたい。彼の全てを脳裏に焼き付けたい。彼の全てが欲しい。彼に全て知ってほしい。彼の頭を江迎　怒江でいっぱいにしたい。彼に全てを貰ってほしい。彼の未来を、過去を、現在を、わたしに譲ってほしい

だからまずは語らせる

彼の過去をお義母さまから譲ってもらおう

…その後は、その後は、その後は…

彼の過去を知るのは、わたしだけで充分

人吉　瞳も、黒神　めだかも…必要ない。だってわたしは彼がいれば充分だから。彼の全てをわたしで満たしたいから

くすくすくすくす…と笑う江迎。グルグルギュルギュルギュルと渦巻く目玉が瞳を写す

――そんな江迎の思考がその視線から伝わってくるようで、瞳は背中から吹き出す汗に苦笑いする

江迎ちゃんは善吉くんのことしか考えていない――それは裏を返せば、「それ以外が疎かになっている」ということに他ならない

「ほら、これが善吉くんが二歳の頃の写真よ？可愛いでしょ？」

「…っ！…っ！！」

鼻血を垂らしながらバンバンビニールシートを叩く江迎。鼻を押さえたいだろうに、下手に押さえれば自分自身を腐らせてしまいかねないのだろう。…それをほんの少しだけ哀れに思いながら、瞳は江迎の鼻にティッシュを詰める

「…こ、これ…これ…！くださいっ！！」

「ネガ残ってるから焼き増ししてあげるわよー。…そういえば」

喜びに打ち震える江迎を尻目に、瞳はごくり、と喉を鳴らす

開いたページは、酷く不思議なページ

たったの1枚しか写真の貼ってないページ

他の写真も貼ってあった痕跡がある。――けれど、まるで他の写真が「なかったこと」になってしまったような…そんな、不思議なページ。まるでその写真だけを意図的に残したような、そんな写真

「…え？」

しかし、江迎もまた表情を凍らせる

まるで愛する夫の浮気が発覚してしまった新婚ほやほやのラブラブ夫婦の奥さんのような表情で、目を見開いて江迎はその写真を見つめる

「この写真について…何か、知らないかしら？丁度、あなたが入院していたくらいの時期の写真だと思うんだけど」

――そこには

左側に、仏頂面をしながら大きなうさぎの耳をいじくり回す小さな白髪の男の子と

右側に、2歳前後で、満面の笑顔を浮かべながら、ピースサインを作る善吉と

「…流、お姉さん…？」

――1目で分かる、困ったような、嬉しそうな、照れたような表情で微笑する、善吉のことを抱き締める

球磨川　流の姿があった

―12　会計戦　Cパート

「うりゃりゃー！！」

逃げ続けるかに見えた流。木々が開けたある程度動き回れる程度の空き地を見つけた瞬間に反転、振り返りながら「迫刀・針」をめだかに向けて投げつける！

「コースが甘い！」

鼻先数ミリの位置まで迫った巨大針を「がぎり」と歯で止め、めだかは接近。強靭かつ綺麗な歯で鋼鉄の針を噛み砕きながら腕を振り上げた！

「胸を借りるぞ戦場ヶ原三年生！」

「それはお姉さんが貧乳だっつー遠回しな皮肉かな！？怒ったよ！」

被害妄想である。だがそんなことは関係ない。流は目の前に迫る剛腕にちびりそうになりながらも「くいっ」と指先を動かす

「むっ！？」

瞬間、ぎちりとめだかの動きが止まる。以前にも食らったことのある、肌に食い込む極細の鋼糸…「アリアドネ」！投げつけた巨大針はただの囮。本命はこの糸！

「ちなみにこの植物園にはデリケートな国宝級の植物もあったりす

るよ！動かない方がおすすめ！」

以前、めだかが校舎を引っ張って歩いたように、「アリアドネ」による拘束では完全にめだかを封じることが出来ないのは理解っている

ならば、人質…否、植物質を取る

めだかが力付くで脱出しようものなら、アリアドネの支柱となっている植物も無事ではすまない。生徒会長として「冷静な」頭で考えれば、生徒会長が校舎を破壊したり植物園の大切な木々を破砕するなど言語道断である。この間はちょっと頭に血が上ってたのだ。ほら、爆弾で怪我してたし

しかし、そこは「完全無欠の生徒会長」。自身を拘束する鋼糸を鬱陶しそうに見つめ――

「ふんっ！」

ぶちっ、と

あっさりぶち切った

「…へ？は？え、はあ！？なんぞそれっ！？」

「なんだ知らないのか？糸を切るときは何本かまとめて絡めて断ち切ってしまえばいいのだ！」

凛！とした立ち姿で当然のように言うめだかに頭を抱えたくなる流。つまりそれは――目に見えないくらい細くて堅くて切りにくい糸を、「黒神めだか」は自由に操作出来るってことだ

「ほんっとチート…！小手先で勝負してる流ちゃんが可哀想だと思わないの…？」

口の中でぶつぶつ呟きつつ、腰の小型ボックスのスイッチを押す。強力なモーターが一気にアリアドネの糸を巻き取っていく――本来なら動きを封じた後にスイッチを押して、擬似「ジグザグ」…なんて考えていたのに、そもそも捕まえられないのではどんなに強力なモーターでも意味をなさない。ちなみに罪口製アリアドネ内臓式「ジグザグ」再現用モーター付きワイヤーボックスお値段据え置き９７００万円

「出し惜しみしてる余裕はなさそうねー…。ちょっと泣きそう」

一応鋼糸も並みの『異常』だったらそれだけでチェックをかけられる切り札の１つだったわけだが…。だからこそ、流はショックを隠せない

「切り札も隠し札も鬼札も使えるもん全使用で行くんだから！」

言いながら流が取り出したのは、蛍光グリーンの薬液が入った試験管。生理的な嫌悪感を覚えさせる薬液にめだかは顔をしかめ、流はにやりと笑う

「『害悪細菌／グリーングリーングリーン』…っ！！これは色々キッツイよ！！」

パリン！パリン！と地面に叩きつけられた注射器が割れ、あっという間に異臭が広がり、薄い緑色の霧が広がる。――蹴りの風圧で吹き飛ばしても良かったのだが、めだかはあえてその考えを封じる

「戦場ヶ原三年生」

霧の向こうにいるだろう年上の少女に話しかける。カチャカチャと何かを操作するような音に混じって、「…なによ?」と返事が聞こえた

相手は自分の呼び掛けに応えてくれるし、明確に、分かり易いほどに、笑い出してしまいそうなほどに「黒神めだか」が嫌いだと見えるならば――これほど「やりやすい」相手もいないだろう

「貴様のすべてを知りたい。貴様の全てを教えてほしい。貴様の全てをぶつけてほしい」

『過負荷』のトップに立つ球磨川　禊。その姉である球磨川　流。彼女のことをほんの少しでも理解することが出来たなら

「私は、貴様ら『過負荷／マイナス』も幸せにしてやる」

幸せにしてやる。幸せに出来る。ハッピーエンドを目指せるのだ

万感の思いを込めて霧の向こうにいる流を見つめるめだか。流の小手先の手段も、全身全霊を込めた必殺技も、全てを受けきる「覚悟」を決め、凛とした表情で流を見つめる

対して、流は

「…へぇ」

すぅ…と空気が変わる。どこかくぐもったように聞こえる流の声。
そこに含まれる、濃密な――敵意

「あんたが、黒神めだかが、最強で最高で無敵で素敵で皆に愛されてる生徒会長さまが」

ギチギチギチギチギチギチ。何かが軋む音。キリキリキリキリキリと甲高い、歯車が軋む音。そして奈落の底から響く怨叉の声に…ツゥーっ、と、めだかの頬を汗が滴り落ちる

「…まさか、これほどまでとはな」

これほどまでに「恨まれている」なんて、想像すらしていなかった。
だからこそ、頬を伝う雫を隠せないめだか

「みーくんを、球磨川　禊を、『過負荷』を、【二回】も見捨てたあんたが、戯れ言をほざくなぁあああああああっ！！！」

怒りの絶叫と共に詰め寄ってくる流。『反射的』にその顔面を凹ませようと拳を振り上げるめだか

しかし――――

「っ、な…！？」

かくん、と唐突にその膝から力が抜ける。つい先刻まで通常通りだったはずの視界がじんわりと歪み、ガンガンと鉄鍋を被せられて何度も頭をぶん殴られているような頭痛に、全身に感じる倦怠感。身体が内側から燃やされているかのような「発熱」に、めだかの反応が遅れる

「『媚刀・簪』…！『少女趣味』ｖｅｒ！！」

その隙に接近した流の手の中には、先端が鋭く尖った、藍色の花飾りで装飾された可愛らしい簪。それを思いっきり振り上げて――ほんの僅かに反応を遅らせためだかの腹部に突き刺す！

「殺った！」

確実な手応えに流は狂気的な笑みを浮かべながら、簪を操作。簪の中にたっぷりと満たされた特濃の「媚薬」がめだかの身体に流れ込む

「くっ…！？」

痛みと、急激に先程とは違う意味で火照り始めた身体に顔をしかめながらも、めだかは身体を回転。笑顔で動きを止めていた流の脇腹に蹴りを入れる。

めきぃ…！と骨が、肉が、『白虎』が軋む音が、流の体内で妖しく響く

「ぐぷっ…！」

と口から血泡を吹きながら吹っ飛び、植物園の木々を粉砕する流。あまりにも「飛びすぎた」流の身体に驚愕するめだか

「っ、くっ…こ、れは…っ！？ゴホッ！ゴホッゲホッ！くちゅんっ！ゲホッゴホッ！」

髪色が、違う。ごっそりと色素が抜け落ちたような髪。なにもして

いないのにゆらゆらと蠢くそれは――「乱神モード」と呼ばれる形態のソレ

意味不明な倦怠感に発熱。頭痛、関節痛に吐き気に悪寒。おまけに腹痛や咳、くしゃみまで出る

「き、さま…一体、何を…！？」

ふらつく身体を意志の力で支えながら問えば、頭から木やら花やらを生やしたボロボロの姿の流がふらふらと歩み出る

「…あー、しんど…説明、しなきゃだめ…？ちょっと今…喋れ…ごぼっ…」

無理矢理喋ったせいだろうか。言葉の途中で血を吐く流。四つん這いでえづく流の姿に、めだかも木を背にして腰を下ろす

「げほっ…あー、もう、胃液も出ない…」

胃液とよだれと涙と血を拭いて、流はふらっと身体を起こす。ゼェゼェと荒い呼吸で流を見上げるめだか。…しかし、今のめだかは立ち上がることができない

「…どお？散々お金と時間を掛けて開発した、どんなに「完璧」な人間だろうと克服出来ない「不治の病」に犯された気持ちは？」

「なっ…！？」

平然と

平然と言葉にされたその事実に、めだかは驚愕する

およそ黒神　めだかという少女は、１６年もない人生だが…それでも１６年間、たったの１度も「病気」というものを経験したことがない

怪我はあったが文字通り『異常』な回復力を持つめだかにとって、それはすぐに治るものだったし、免疫力や体力、病原菌への抵抗力もまた『異常』であり、『完璧』な体調管理を妹に押し付けるシスコン兄貴のお陰もあって、全く病気というものに縁が無かった

無論これは『異常』全員に言えることだ。『異常』な人間が病気になるわけがない。そういうものだ。そういうもののはずだ

だが――事実として明らかに体調不良を訴える身体が、ぼんやりして全く回らない思考が、自分が「病気」であるという事実をめだかに突きつける

「くっ、だ、だが…病気、といっても…何故、こんな、いきなり…！？」

「さっきの『害悪細菌』よ？即効性と持続力、繁殖力に特化したウィルス…。粘膜に接触することで感染し、数十秒ないし数分で第５世代まで繁殖する凶悪ウィルス。どんなに『完璧』で『完全』でも『人間』である限り、この病からは逃げられない」

病名――感染性発熱症

別名、風邪

およそ人類が存在する限り、ウィルスという存在がいる限り、根絶不可能な不治の病

「いくらあんたでも、数秒で次代に進化するウィルスに対応出来る抗体を作るには、５日はかかるでしょっ」

キャピピッとぶりっこする流。それを憎たらしく思いながらめだかは木に手を付いてどうにか立ち上がる

「ちょっ、動けるの？私で実験した時は一週間は寝込んだのに…。ならだめ押し！」

パリンッ！と新たな蛍光グリーンの薬液がめだかの足下で割れる。薄緑色の煙がめだかを包み、どさっと重いモノが倒れる音

…煙の向こうでめだかが動かないのを確認して、流は深い息を吐く。その際にまた上ってきた血を吐き、流は泣き笑いの表情でその場を去る

充分に距離を置いてから、流はぐったりとその場に倒れ込む

それも当然だ。いくら『白虎』と『黒鬼』、二つの鎧を挟んだとはいえ、熱で制御の効かない『乱神モード』のめだかの蹴りを思いっきり食らったのだ。『普通』の人間よりも脆弱な『過負荷』の流では、一撃食らっただけでも充分過ぎる致命傷である

「……引き分け…にもなってない、かなぁ…」

本来なら会長戦で使う予定だった文字通りの「鬼札」『害悪細菌』。一度でも感染してしまったらもう抗体がストックされてしまうから

使えない、たった一度だけの切り札だ。それを使ってまでこの会計戦に力を入れる必要があったか、と言われれば答えはＮＯ。「大嫌い」な女を目の前に、短慮で行動してしまっただけ

「うぅ～、みーくんごめん～…いやこうなったのもみーくんのせいだし怨むよみーくん?…あ、だめおなか痛い」

腹痛に負けて、そのまま胎児のように身体を丸めて眠り始める流。起きているときは騒がしい流なのに、目を閉じているとまるで死体なのではないか、と邪推してしまいそうなほどな生気がない

――そんな流の姿を見下ろしながら、黒神めだかは熱に犯された頭で考える

「…私は…見捨てたのか…?…球磨川を、…過負荷の人々を…?」

答えは、出ない

答えは、出せない

生まれついての勝者である黒神めだかは、

生まれついての敗者である過負荷の気持ちや、事象の受け取り方が…理解出来ないから

「…くそっ、風邪とは、こんなにも辛いのか…。その内根絶してやる…」

ふらふらとした足取りで、それでもしっかりと流の身体を抱き上げながら、めだかは怪しい記憶を頼りに人吉　瞳の元を目指す

――残り時間、２７分１４秒

―12　会計戦　Cパート（後書き）

禊＞『善吉ちゃん、一狩行こうぜ！』

善吉＞イヤだよ！なんでだよ！真面目にしてろよ！お前の姉ちゃん戦ってる最中だろ！？っつうかなんでお前俺にばっかからむんだよ！？

禊＞『人見知りなんだ』

善吉＞はいっ！嘘っ！！

禊＞『嘘はともかく友達いないから一緒にやる相手いないんだよ』

善吉＞……ちっ、ソフトなんだよ？俺、ハード持ってねぇぞ

古賀、名瀬＞（やっちゃうんだ…）

※注、本編中にあるのかないのか分からない会話です

―12　会計戦　Dパート（前書き）

めだかが朦朧とする意識をつなぎ止めながら、虚ろな記憶を頼りに瞳の所に戻ってみれば、可愛らしい少女趣味なマットを引いてお茶している少女が2人。当然のことのように『過負荷』とピクニック気分でお茶を楽しめる瞳に更なる尊敬の念を募らせながら、めだかはその背中に声をかけようとして――

「っ」

ぴっ！とその頬が裂ける。同時に肩に担いでいた流が飛び跳ねるような動きでめだかから離れ、めだかに背中を向けたまま動かなかった江迎の首根っこ掴んで林の中に駆け込む

「案内ご苦労！ではでは逃げさせてもらっちゃうからっ！！」

にぱっと笑いながら江迎の手を引いて林の中に駆け込む流。その背中に向けて、瞳が手を伸ばす

「ま、待ちなさい！！今――」

「待てと言われて待つ阿呆がいるかーっ！」

べーっ！と舌を出しながら、人一人抱えて瞬く間に駆け抜けていく流。おおよそ非力な『過負荷』とは思えないような俊敏かつパワフルな動き。先程まで痛みに泣いて崩れ落ちていた少女の行動には見えない動作に、呆気に取られるめだか

「めだかちゃん！不味いことになったわ！追うわよ！」

「…はい？それは、どういう…？」

妙に焦った…いや、鬼気迫る様子の瞳に面食らうめだか。幼いころからこの幼い容姿の女医と交流しているが、彼女がここまで狼狽している姿をめだかは今まで一度も見たことが無かった

「早く流さんを助けにいかないと――江迎さんが人殺しになっちゃう！」

「――え？」

―12　会計戦　Dパート

「あっぶないあっぶない。素で気絶してたよー。むーちゃんだいじょーぶだった？あのロリ医に変なことされてない？」

一歩歩くだけでミシミシと悲鳴を上げる身体に笑顔を消しながら、普段通りのトーンで江迎に問いかける流。女の子にその持ち方はどうかと思うが、肩に担がれた江迎は口の中でぶつぶつと何かを呟くだけで大きなリアクションを示さない

あちゃー、こりゃちょろっと不味いかなぁ？完璧にトリップしちゃってるよ。と困った表情で笑いながら、大きな木の根元にもたれかけさせるように江迎の身体を下ろし、自分は服の内側をごそごそと探る

「うーん、半分くらい壊れちゃってるなぁ…。うぁ、注射器割れてる…。いてて、ちくちくする。いっそ脱いじゃおうかなぁ？でもなぁ…」

ちらり、と時計を見る流。残り時間は約15分。その間に襲われかねない以上、『鎧』を脱ぐにはリスクが高すぎる。仕方なくそれはそれと放置し、無事だった注射器を取り出す流

「まっすいーまっすいー♪みーくんなら天然で持ってる痛み耐性～♪」

調子っぱずれの歌を歌いながら琥珀色の瓶から薬液を吸い上げ、ぺろん、と黒鬼を捲り上げて腹部に針を突き刺す

「うなー、変な感じぃー。ＢＪ先生ってか手塚先生は凄いねぇ、自分で自分手術しちゃうんだもんねぇ。発想がすげぇ！手塚ゾーンで漫画好きーホイホイだね？」

ねぇー、凄いねぇーと笑顔の流が江迎に笑顔を見せ

その両目に腐りかけた包丁が突き刺された

「……いったぁ……いきなりなにするのよぅ…」

ぼだぼだと血を流させる右目から突き出た包丁。左目は無事だが、ほんの少し逸れたせいか、目尻から横顔にかけて真っ直ぐ走り赤い傷。拗ねたように困ったように笑う流

江迎はぎゅるぎゅると困惑と嫉妬と苦悩に眼球を精神を脳髄を腐らせながら、包丁をずるりと引き抜く。こぽっ…と小さな音と共にまぶたを貫通して吹き出たどす黒い血液が、植物園の土に吸い込まれた

「なんでなんでなんでなんでなんで神様って本当に意地悪ですねなんでなんで流お姉さんが善吉くんと一緒に一緒に一緒に子供の頃会ったことがあるんですねずるいずるいずるい善吉くんはわたしのなのにわたしは善吉くんのモノなのに善吉くんの子供のころにわたしは会ったことないのになんでなんでなんでなんで流お姉さんが駄目駄目駄目駄目駄目駄目駄目駄目な事ですこれはダメですこれはダメなんですだから修正しなきゃ正しい形にしなきゃしないと駄目だってじゃないとわたしだめ善吉くんがわたしじゃないとだめ善吉くんと一緒にいたいんですだからやめて取らないで大好きです大好きなんですだからやめてお願い分かって流お姉さんわたし善吉くんだからこんなこと大好きだからお願いだから

いなくなってわたしどうしたらいいのか分かんないです流お姉さん
こんなときどうしますかどうすればいいんですかわたしわたし
しわたしわたしわたしわたし貴方が流お姉さんが球磨川先輩たちが
あなたたち姉弟が過負荷のみんなが大事なのにわたしだめだめだめ
だめお願いだから善吉くんはとらないでそれ以外ならなんでもあげ
ますなんでもしますだから善吉くんだけはわたしにください神様お
願いしますわたしは何をすればいいのかもう分かりません流お姉さ
ん教えてください」

流の身体を軽く押し、そのまま地面に押し倒す。不思議と流は一切の抵抗もせず、なすがままに江迎にマウントポジションを取らせた

流の腹部にそのまま座る江迎。こぽっと右目と口から僅かな血が溢れ、流はそれに不愉快そうに顔を歪めた

江迎は前髪で目が見えないくらいに顔を伏せ、両手で忙しなく包丁をぐじゅぐじゅと腐らせながら、じっと前髪の奥から流の顔を凝視した

「わたしは何をすればいいんですか？」

「殺せばいいんじゃないかな？」

――余りにも早い返答に、江迎の身体がぴたりと動きを止める

「よく分かんないけど私がいるとむーちゃんは不安になっちゃうんでしょう？なら、いいよ？殺しても。私は貴女を見捨てない。何があっても見捨てない。殺されたって裏切らない。貴女の殺意も受け入れる。貴女の愛を受け止める。私の愛は、身体は、魂は、私の全ては貴女たち『過負荷』のものよ？だから殺したいならいいよ。殺

すのを躊躇ってるなら自殺してあげる。『過負荷』の子が私を死ぬほど嫌いなら二度と目の前に現れない。どんな理由であっても、貴女が私に殺意を覚えたのなら、もっと早く言ってくれたら良かったのに」

くすくすくすくすくす、と小さく笑いながら流はギュルギュルした瞳で自分を見下ろす江迎を見上げた

そっとその手を江迎の両手に添える。未だかつてないほどに『過負荷／マイナス』感情が逆っている江迎の『荒廃する腐花』は、手の甲に触れただけの流の両手を瞬く間に腐らせていく

「貴女の愛／『過負荷』で、私を殺して。流お姉さんは、それだけで充分幸せよ？」

心の底から嬉しそうに笑う流に、江迎もきょとん、と目を丸くして——花が腐り堕ちたような、毒々しい爽やかな笑顔で応えた

「ありがとう、大好きです。流お姉さん」

「私も大好きよ。むーちゃん」

そして、そっと流の首に江迎の手が添えられて——

ここでヒーローが間に合うのは、ジャンプ漫画の世界だけだ

めだかと瞳がぼんやりと空を見つめて立ち尽くすピンク髪の少女を
見つけた時、既にそこに球磨川　流の姿はなかった

「…江迎一年生。戦場ヶ原三年生は…」

めだかが緊張と発熱に汗を流しながら、江迎に一歩近付き
――かつん、と足下から小さな音
首を傾げながら足下に視線を向けためだかは、そして絶句した

グチュグチュに腐りはてた地面。その腐った地面の形は紛れもない
人型で

あまつさえころりと転がった…そしてめだかの足に引っかかった、
会計戦の勝敗を決める腕輪が――腐りきったどす黒い肉らしき破片
の中に沈んでいる

「…江、迎さん…貴女…」

遅かった…そんな後悔と苦痛に、そして腐臭に顔を歪めた瞳が、ぼ
んやりと背中を見せる江迎に声をかけた、刹那

かくん、と江迎の膝が崩れ落ちた

「え、江迎さ――」

「来ないでください」

思わず駆け寄ろうとした瞳を拒絶するように、江迎は小さく声を漏らした

地面にぽたぽたと水滴が吸い込まれ、握り締めた江迎の手からは赤い…いや、腐り腐った茶色い血が落ちる

「わたし、なにしてるんでしょうか」

ずるり、と植物が蠢いた

太い茨の蔓がめだかと瞳を、そしてその足下の流を拒絶するように間に入る

「大好きだったんです、流お姉さんのこと」

弱いものの気持ちが理解出来ないめだかは、何故江迎が流を■せたのかが理解出来ずに混乱し

弱いものの気持ちを理解出来過ぎる瞳は、江迎の心中を思えばこそ、原因が自分にあるからこそ、何も出来ずに動けなかった

「なのに、なのに…しちゃって、どうしようどうしようどうしようど

…わたしなんか、死ぬべきだ」

「やめろっ！！」

叫びながら走るめだか。だが、その必死さを嘲笑うかのようにめだかは高熱によろけ、そのまま倒れ込む。そこでようやく瞳もめだかの異常に気付くが、余りにも遅すぎる。茨は江迎の身体を抉りながら巻き付いていく。江迎の血を吸いながら、腐りながら巨大に生い茂る。茨の戒めは江迎をひたすらに傷付け、大きく小さく球体に育っていく

――『荒廃する腐花／ラフラフレシア』狂い咲きｖｅｒ、タイプ・『茨姫』

どす黒い腐った茨に包まれた江迎を前に、めだかと瞳は悔しさに唇を噛む

「…めだかちゃん。江迎ちゃんを傷つけずに茨だけ切る…なんてこと出来る？」

瞳の問い掛けにめだかは僅かな間だけ目を閉じて考え込む。そして心底悔しい、と言わんばかりの顔で、涙を流しながら答えた

「――普段の、私なら可能…です」

「つまり今は無理、と。…風邪かしら？見るからに調子が悪そうよ」

「ええ、風邪と言われました」

「…そう」

茨の檻は今なお育つ。丸く、コンパクトに、大きくではなく、ひたすら自分を締め付けるかのように、固く堅く江迎の身体を締め付ける。これではチェーンソーは勿論ナタですら江迎ごと切り裂きかねない。その上そのどす黒い茨は、触れた者の手を腐らせてしまうのだろう。空気すら腐らせる腐臭が風に乗って届く

自分自身を人質に取った籠城…とでもいうのだろうか。めだかは相対すればするほど、拳を交えれば交えただけ、自分が『過負荷』とは相容れないと言われているようで…どうしようもなく悲しくて、悔しくて、涙を流す

瞳もまた、予想以上に、予想外に、『過負荷』の突破口…『球磨川

流』という存在を侮っていた自分に気付く

いくら『過負荷』でも、自ら死ににいくはずがないと。江迎に殺されかけても抵抗はするだろう、と。もし流がほんの少しでも抵抗してくれていたら、或いは流が殺される前に、江迎が『こう』なってしまう前に間に合ったかもしれないのに…！八つ当たりだと、ないものねだりだと分かっていても、それでも思ってしまう

そして思ってしまうのだ、2人とも

『過負荷』なんかを本当に理解出きるのか…？と…

意気消沈した2人。ともに無言のままに、対抗策を考えながら荊を前に苦悩する。何かを考えれば考えるほどに『過負荷を理解出来ない』という言葉が頭を過ぎり、そのたび苦痛に耐えるように表情を歪め、思考が鈍麻する状態に臍を噛む。動こうにも躊躇が、戸惑いが、手足の動きを収めてしまう

そして、気が付けば――

「…人吉先生、離れていてください」

爆弾のタイムリミット。無言のままに顔を伏せ、暗い顔のままに離れていく瞳

けたたましい爆発音。全てを吹き飛ばすような爆風に煽られ、一瞬でボロボロになりながら吹き飛ぶめだかの身体。どさりと地面に落ちて尚、至近距離で爆発をくらっても、むくりとすぐに身体を起こせる彼女の『強さ』が、余りにも空虚に思えた

そして、その場の皆の耳にアナウンスが響く

『選挙管理委員会副委員長の長者原です。会計戦は引き分けです。尚、参加者である球磨川流さまの死亡が確認されておりますが、腕輪の破損もなく、ルール状の問題はありません。尚、名瀬さまからその後の江迎さまの荊の中に引きこもった件について、『鍵は常に見える位置に置く』というルールを破っている、という指摘がありましたが、隠れたのは植物の中であり、江迎さまは鍵を身に付けたまま『隠れていただけ』と見なし、ルール状の問題はないものとします』

長者原のアナウンスが響く中

めだかは、爆発の威力でぼろぼろになりながら、ほんの少しだけ濁った目で未だに茨の中に引きこもる江迎をぼんやりと見つめていた

―12　会計戦　Dパート（後書き）

「よろほー。あんしんいんちゃんおっひさしぶりー」

「やぁ、なっちゃん久しぶり。相変わらず清々しいくらいカスっぽいクズだね」

「んにゃんにゃ、あんしんいんちゃんの外道っぷりってか人間のクズっぷりには負けぎゃんっ！ちょ！ここではいくら殺しても大丈夫だからって最近手加減ないよ！？」

「君のせいで大好きな球磨川くんに会えないんだぜ？少しくらい八つ当たりさせてくれよ」

「球磨川姉弟の弟の初ちゅーフラグをへし折る方のなーがしーです。キリッ！」

13　『過負荷』（前書き）

「んぁ？」

「『おはよう、お姉ちゃん。久々に安心院さんと遊んできたみたいだけど…どうだった？』」

「…みーくんによろしくだって。あと、『返して欲しいならいつでもおいで。優しく厳しく躾てあげよう』ってさ」

「『…ああ、『却本作り』のことかな？それは残念だね』」

「なにがー？」

「『今の僕に『却本作り』は必要ないって話さ』」

「んー？んー？んー？あれ？あれれ？…もしかして原作崩壊…？」

13 『過負荷』

「『いやいや大変なことになっちゃったねぇ』」

試合が終わった直後、駆けつけてきた現生徒会メンバーと新生徒会メンバー。現生徒会メンバー全員の顔色が悪いのに対し、いっそどうしようもないくらい新生徒会メンバーは軽いノリで現れた

「球磨川…っ！」

そのあんまりにも不謹慎な球磨川の態度に、イラつきを隠そうともせずに彼を睨み付ける

「『おいおい、そんなに睨まないでくれよ。こればっかりは僕らにもせよ予想外なんだぜ？僕は悪くない。ちっとも悪くない。欠片も悪くない』」

へらへらと彼が笑えば、その隣で立つ『球磨川流』もけらけら笑う

「んーんーんー？あれなんか空気重くなーい？私が死んでる間になにがあったのん？」

死んだことを『なかったこと』にされた流が首を傾げれば、それに顔色の悪いめだかが食らいつく

「何かあったのではないだろう！？貴様は殺されたのだ！何故笑っていられる！？何故そんなに…何故貴様は…っ！？」

そんな悲痛な叫びに、けれど流はつまらない物を見るかのような目でめだかを見上げる

「人を好きになるってね、『愛』ってね、凄い複雑で、難しくて、大変なことなの。…だから、

あんたには、分からないよ

人を好きになったことがないあんたには、絶対に分からない」

言い切り、言い捨て、流は江迎が今尚育て続ける茨の檻に歩み寄る。瞳が何か言い掛けたが、躊躇なく茨の棘で傷を作り、その傷を腐らせる流の姿に何も言えなくなる

「私はね、大好きで大事な過負荷の子たちになら殺されても幸せ。あなたには分からないでしょ?他人を幸せにすることを生きがいにしているくせに、アナタは他人というものを理解出来ていない。人の幸せをあなたの価値観で決めるから、正しすぎる幸せを目指すから、アナタは他人と思いを分かち合えない。あなたが他人といれるのは、あなたが他人に『受け入れて貰ってる』からなのよ。ねぇ、善吉ちゃん」

ぶちぶちと茨を引きちぎりながら、くるりと流は振り返り、笑顔で善吉に問い掛けた

「あなたの言ってた『他人の幸せを手助けする女の子』は…果たして今の黒神めだかみたいな女の子だったのかな?」

善吉はその問い掛けに、僅かに沈黙し、瞑目した

そして、『目の色』を変えて、静かに言葉を放つ

「……めだかちゃんは、いつだって正しい。正しすぎるくらいに…な…」

静かな声音だというのに、どこか血を吐くような悲痛さを秘めた声音に、その場にいた全員がショックを受けたように目を見開く。常にめだかの側にいて、だれよりもめだかを理解しているだろう少年の言葉に秘められた重み。それを理解出来ない全員が一斉にめだかに視線を向ける

「ぜん、きち…？」

当のめだかもまた、縋るように善吉に視線を向け――

「『そっかそっか。善吉ちゃんはめだかちゃんのことを『理解』した上でそう言ってるんだね、なら、僕から余計なことを言う必要はないかな』」

唐突に2人の間に割って入った球磨川にたたら踏む。球磨川はつまらなそうに欠伸をかみ殺しながら、両手を真紫になるまで腐らせた流に問い掛ける

「『おねーちゃんまだー？』」

「眠そうなみーくんきゃわわ！ってかちょっと待って両手が腐って動かし辛いっていうか…あ！顔見えた！むーちゃん久しぶり！」

腐った両手からボロボロと肉をこぼしながら土下座の体勢で気を失った江迎をずるりと引きずり出す流。気を失い、苦痛に顔を歪めた

江迎の身体を腐った両手で愛おしそうに抱き締める流の姿に何とも言えない気味の悪さを感じた者たちが視線を逸らすなか、べちゃべちゃと頬を叩く腐った手にか、それとも腐臭のせいか…江迎の瞼が、僅かに開かれる

「おはよー、むーちゃん。ちょっとはすっきりした?」

「ぁ…ぅ…?なが…し、おねーさん…?…!?わ、私!わたし…っ!!」

流の笑顔を見た瞬間、ガタガタと震えだす江迎。その身体を抱き締めながら、流はよしよし、とその背中を撫でる

「だいじょーぶ。おねーさんは生きてるよ。ぜぇんぶ無かったことになってるから。むーちゃんはなぁんにも悪くないの。恐かったねー。よしよし。だいじょーぶ。だいじょーぶ」

まるで母が娘をあやすように、優しげに江迎を慰める流。それにほっとしたように、江迎の目から涙が溢れ

「『そうだよ、本当に恐いのはこれからだぜ?』」

『えっ？』

全員が呆気に取られて首を傾げる中

どずっ！

っと、

江迎の身体に無数の螺子が突き刺さった

「球磨川っ！？」「みーくんっ！？」

江迎の盾になるように、その間に立ちふさがるめだかと流。しかし球磨川は指先で螺子の鋭い先端を支えながら、不思議そうに首を傾げた

「『ん？どうかした？』」

「どうかした？なんて可愛い顔しても駄目なんだから！なんでむーちゃん苛めるの！だめだめだめだめー！！」

両手で大きくバッテン印を作る流に、球磨川は少しだけ悲しそうに顔を伏せた

「『決まってるじゃないか、お姉ちゃんを苛めたからさ』」

「えっ…あ、えと、その…そ、それでも駄目っていうか…」

いつになく真剣な表情の球磨川に、流は頬を赤くしてごにょごにょと何かを呟く。球磨川は彼にしては珍しく、少しばかり眉尻を釣り上げながら…怒ったような顔で、全身に螺子を突き立てられ、苦痛に顔を歪めた江迎を睨む

「『いくら同じ『過負荷』でも、お姉ちゃんを殺しちゃうのはいただけない。傷つけるだけなら我慢出きる。でも同じ『過負荷』だからこそいただけないぜ。分かるかい、江迎ちゃん、君は僕を怒らせた。だから、』」

彼は息も絶え絶えな江迎を見下ろしながら鋭い視線で突き付ける

「『君から『過負荷』を奪わせてもらった。君は、もういらない』」

「…ぁ」

衝撃に大きく見開かれた目から、涙がこぼれる。ぼろぼろと止めなく流れる涙すら視界に移さず、球磨川は肩をすくめて踵を返す

「『ってわけだからめだかちゃん。その娘の今後はよろしくね？既に君の大好きな『普通』の女の子だからさぁ、適当になんかしてあげてよ。任せるからさ』」

「待て球磨川っ！！貴様…貴様はそんなにも簡単に共に戦った仲間を切り捨てるのかっ！？」

手を振りながら去ろうとした球磨川が、肩越しに振り返って、落胆のため息を吐いた

「『お前が言うなよ。敵を仲間にしたがって、仲間が敵に回ったら喜ぶような人間のくせに』」

『――――――っ！？』

それは、

それは正しく黒神めだかという女の子の真実で

だからこそ、誰も言い返せずに、言葉に詰まるしかなかった

全員が球磨川に注目する中、流はぼんやりとその背中を見つめ…小さく、荒い息を繰り返す江迎のすぐ横に座る

「なが…ねぇ…さ…わた、し…わたし…」

ぽろぽろと涙を、そして口から血を零す江迎の手に触れ、そこにもう『荒廃する腐花』がないことに気付く流。腐った両手を見下ろし、見捨てないでと首を振る江迎に、流はにっこりと、満面の笑みを浮かべた

「ばいばい。『江迎ちゃん』。幸せになってね？」

「…っ！？」

今日何度目になるか分からない衝撃に、涙すらこぼせずに泣く江迎

そんな彼女に一瞥すらせずに、球磨川　流もまた、球磨川の背中を追って走り出す

「ぁ…ぁぁ…ぅあああ…うぇえええええん…うぁあああああん…あ、あ、ああ…い、や…いやぁあああああ…いやぁあああ…」

江迎の悲痛な叫びに全員が顔を歪め、無言で瞳が彼女を抱き締める。
瞳の胸に抱かれ、子供のように涙する江迎と、苦虫を噛んだかのような苦々しい顔をする現生徒会メンバー

「…私は…あんな奴らを救わねばならんのか…!?あんな奴らを幸せにできるのか…っ!?」

めだかの言葉に、応える者はいない

皆、ただただ江迎の泣き声を背景に苦汁を舐めることしか出来なかった

「どういうおつもりですか?球磨川先輩」

「『ん?なにが?』」

蝶ヶ崎の問い掛けにこてん、と首を傾げる球磨川。そんなとぼけた

反応にイラつきながらも、無表情のまま蝶ヶ崎は再度問い掛けた

「江迎さんの話です。一体どんなおつもりであのようなことをなさったんですか」

質問…というよりは詰問だ。志布志もまた球磨川を睨み付ける

「返答次第によっちゃ、いくらあんたでもわかんねぇぞ」

「『…君たちそんなキャラだっけ？やめてくれよ、仲間愛なんか寒いだけだぜ？』」

やれやれ、と言わんばかりに肩をすくめて手を広げる球磨川だったが、２人の視線は苛烈さを増す。今にも球磨川に襲いかかりそうな形相の２人に、球磨川は苦笑しながら

「『悪いのは江迎ちゃんだろ？僕は悪くな――』」

「とかいいながら偽悪ぶってむーちゃんを『被害者』にするみーくんが大好きーっ！！」

――いぃいぃっ！？』」

横合いから抱きついてきた流に笑顔のままぶっ飛ばされた

そのまま押し倒した球磨川の背中に乗っかったままハートマークを

乱舞させる流。呆気に取られる過負荷2人は置いてけぼりだが、球磨川は困ったように笑う

「あ、2人とも、誤解しないでね？みーくんだって好きでむーちゃんフルボッコにしたわけじゃないんだから。みーくん風に言うなら…『江迎ちゃんは悪くない。悪いのは全部僕だ』キリッ！って奴がやりたかっただけなんだと思うよ？みーくんの中二病！中二病みーくん影羅かわいい！」

「『くっ…やめるんだお姉ちゃん…！早くそこをどけ…どうなっても知らんぞーっ！！』」

勢いよく立ち上がる球磨川に、背中から落ちた流が「きゃーっ」と嬉しそうな悲鳴を上げる

ともあれ、力が抜けてしまった過負荷2人は顔を見合わせ、ため息を吐く

「…ま、あいつは『普通／あっち』寄りだったしな、別にいいんじゃねーの？」

「…そうですね。あの娘がいると空気が腐って酸っぱ臭かったですし。むしろ丁度いい機会だったんでしょう」

肩をすくめながら、力の無い笑みで、寂しそうな声音で話し合う過負荷2人を愛おしそうに見つめながら笑い、流は「それよりも！！」と声を張り上げる

「これで実質的な『過負荷』メンバーズの勝利が確定しますた！やったねみーくん！初勝利だお！！」

流の唐突な言葉にはぁ？と全員が首を傾げる中、どこからともなくメガネを取り出した流がキリッ！とした表情で指を振る

「現生徒会メンバーは副会長不在…つまり副会長戦に出れる人材がいないってことだからね！これで一勝は稼げるし、仮に会長戦で負けたとしても一勝一敗三分けでドロー！生徒会戦挙で引き分けになった場合、挑戦者側…つまり私たちの勝利になります！やったねみんな！おれたちがせーとかいだぁー！！」

と嬉しそうに流が騒ぎ、「マジか？そいつぁめでたいな」と志布志が笑う中、球磨川と蝶ヶ崎の表情は予想以上に固い

「…なんて、流さんは言ってますが？」

蝶ヶ崎の探るような目線に、球磨川はニヒルな笑みを浮かべて応えた

「『まず、有り得ないだろうね。僕たちには思いつかないような、ウルトラCの対抗策が待ってるだろうよ』」

「理由は？」

はっ！と鼻で笑い、球磨川は言う

「『黒神めだかがこの程度の障害、乗り越えられないはずがないだろ』」

－１３　『過負荷』（後書き）

流＞１ヶ月以上振りの次回予告ー！！いぇーい！

禊＞『いぇーい』

流＞ついに追い詰められた現生徒会メンバー！彼らは…あれ？

禊＞『どうかした？』

流＞…ぇと、んーんーんー？なんぞこれー？なんぞこれー？次回予告白紙だよー？ちょっとー台本用意する人はなにしてんのー？

禊＞『…なるほど、ね』

禊＞『誰も気付かない内に始まり、いつ終わったのかも覚えていられない副会長戦。次回、あなたは覚えてられるかな？』

流＞よく分かんないけどこうごきたい！

―14　副会長戦（前書き）

数日後。生徒会室の中には重苦しい雰囲気が漂っていた

――副会長戦を不戦敗に終わらせてしまえば、過負荷との戦いでの負けが確定してしまう。だというのに、副会長戦に代わりに出てくれそうな人材の心当たりもない

あと数日もしない内にやってくる副会長戦。圧倒的なまでにマイナスな彼等との戦いに一般生徒を巻き込む訳にもいかず、また、生徒会と関わりの深い人物にあの『過負荷』に対抗出来そうな人材はいない

「……」

だからこそ、めだかも、善吉も、名瀬も、古賀も、ただただ沈痛な表情で目を伏せる

やがて沈黙に耐えきれなくなったかのように、善吉が口を開いた

「そういや、めだかちゃん。もう風邪はいいのか？」

まるで世間話のような軽い話題。だからこそ、この重すぎる空気の中でもフラットな話題として好まれた

めだかもどこかぎこちない、力の抜けた笑みを返す

「ああ、くじ姉と馬鹿兄のお陰ですっかり快調だ」

「…とはいえ風邪は治りかけが一番気ぃ抜けやすいんだ。俺も『異常』相手に風邪治療やったのなんか初めてだしよー。ちゃんとてめぇで予防策取れよ」

「分かってますよ。勿論です」

名瀬の言葉に静かに微笑むめだか。名瀬もまた、柄にもない他者を心配するような台詞を吐いて照れてしまったのだろうか。口をへの字にして明後日の方向を見つめる

しかし――そこでまた話題が途切れてしまう。重苦しい沈黙が続くよりは、と古賀は努めて明るい調子で話題を投げる

「そいや人吉！あのピンク髪の女の子はどうしたん？」

「……」

ぴくり、と善吉の肩がはねる。その瞬間にこの話題が爆弾だったと古賀は気付くが、善吉は大きな溜め息と共に眉尻を吊り上げる――強い怒りを見せる

「今は、家にいます」

その視線の先には何もないし、何もいない。けれどこの場にいる者たちには、学生服の少年が薄ら笑いを浮かべている姿が頭に過ぎる。ギリ…っと音がするほどに拳を握り締めながら、善吉は怒りと気炎を吐く

「お母さんがカウンセリングとか色々やってるみたいですけど、どうにも駄目っすね。江迎自身が心閉ざしちまってるらしくて…せっかく『過負荷』がなくなったのに、あの娘も『普通』に生きられるはずなのに…。ほんとにもう、人形みたいになんの反応もしなくって…。付きっきりでお母さんが面倒見てますけど、このままでいいわけがない…っ！！」

善吉の憤怒の形相に、けれど誰も何も言えない

「俺、思ってたんすよ。『異常／アブノーマル』とか、『特例／スペシャル』とか『普通／ノーマル』とか…『過負荷／マイナス』とか…そんなん全然関係ねぇって。嫌いな奴は嫌いだし、好きな奴は好きだ。どんな奴だろうと友達になれるって

…でも、球磨川だけは無理だ！！

俺たちと同じモノ見て、同じ価値観で行動してるはずなのに、あいつだけは理解出来ねぇ！！

あいつの『視点』で見れば見るほど、あいつが意味わかんなくなってく！

なんで一緒に戦ってきた女の子をあんな風に突き放せるんだ！？

俺は…俺は…『過負荷／マイナス』なんか…！！」

「おっと。それ以上はやめとけ」

全員に走る静かな驚愕。「やれやれ、しょうがねぇ後輩だぜ」と朗らかに笑いながら、巨大すぎる彼は善吉の肩に手を置いて静かに肩を竦めた

「日之影前生徒会長…!?何故あなたが…」

「おう。この前ていたらくを晒しちまったからな、顔真っ赤にして引きこもってようかと思ったんだが…」

ちらり、と一様に表情の暗い生徒会の面々を見渡して、ぼりぼりと頭を掻く

「可愛い後輩共のピンチだ。ちょっとばかし先輩らしく良いとこ見せてやろうと思ってな」

「っ!?じゃ、じゃあ…っ!?」

善吉の声にも嬉しそうな色が混じる。あからさまに表情を変える善

吉の素直さに破顔しつつ、日之影は自分を指差しながら言う

「応。副会長戦は『英雄』に任せな」

力強いその宣言に、にわかに明るくなる生徒会チーム。分かりやすい後輩たちに嬉しそうに笑い、日之影はぴっ、と指差した

「ただし、黒神。名瀬、人吉」

唐突な名指しに首を傾げながら日之影を注視する三名。そんな彼等に、日之影は真面目な表情で告げる

「俺の『戦い』を絶対に忘れるな。お前らが俺の『戦い』を忘れちまったら…『過負荷』相手に『勝つ』のは不可能だ」

『知られざる英雄』の、忘れられる男の真剣な声音に、全員が言葉を亡くした

一14　副会長戦

「それでは皆様。お盆の真っ只中というこの時節にお集まりいただきありがとうございます。時間になりましたのでこれより生徒会選挙副会長戦を執り行いたき存じます」

長者原の言葉ににこにこ笑いながら2人で本を読んだり聞かせたり球磨川姉弟が立ち上がり、無言で静かに文庫本をめくっていた蝶ヶ崎や座ったままうたた寝していた志布志もめだかたちに向き直る

「出馬されるのは新生徒会からは蝶ヶ崎さま。そして、現生徒会からは黒神さまということよろしいですか？」

「いや、違う」

長者原の言葉にゆっくりと首を振るめだか。僅かに怪訝そうな顔をする蝶ヶ崎と、ぴくり、と反応する流

「では、どなたが？それとも不戦敗になさいますか？」

「いや、出場しとくれる選手ならば――――」

「もう来てる」

『！？』

その人物の存在に気付けなかった者たちが一斉に驚きに目を見開く中、静かに流は呟いた

「ひさしぶり、日之影ちゃん」

言葉が返ってくるとも思っていない呟き。口の中だけで発せられた音の無い呼び掛け。しかし――

「おぅ、久し振りだなぁ戦場ヶ原。いや球磨川か？元気だったかー？」

にこやかに笑いながら、日之影はぽふんっとその巨大すぎる手で流と――そして球磨川の頭を撫でた

「「『――っ！？』」」

目を見開く球磨川姉弟。彼らがまともな思考を取り戻す前に離れた日之影は、まるでさっきの様子など無かったことのように長者原に話しかける

「お前も久し振りだなぁ蝶ヶ崎くん。わかりあいに来たぜ」

「……はて？どこかでお会いしましたか？」

首を傾げる蝶ヶ崎に、「覚えてるわきゃねーか」とくつくつ笑う日之影

その後ろで動揺を隠せない現生徒会チームはこそこそと話し合う

「…な、なんかやたらご機嫌じゃねーか？日之影先輩」

「…っつーかよー。俺は戦闘能力ないだろう蝶ヶ崎の野郎に日之影先輩をぶつける鬼畜っぷりにびっくりだわ」

「…いや、気を抜かない方がいいでしょう。姉上は覚えてらっしゃいますか？日之影先輩が昨日言っていたことを」

真面目な顔で話し合う現生徒会チームの目前で、長者原が進行する

「…それでは出場者も揃ったようですし、早速皆様を副会長戦の会場へと案内させていただきます」

着いてきてください。といって背を向ける長者原。その後ろにぞろぞろ付いていくメンバーズ

そんな中、チラチラと日之影に視線を向ける流

（んー？んー？黒くないよ？なんで？えーっとえーっと…だめ！思い出せない！っていうかなんでなんでなんで親しげ！？次会うときは敵って言ったじゃん！？なんか優しいよ！？フレンドリーだよ！？）

内心で混乱しながら、心細くなって球磨川の制服の裾を握る。大して球磨川は平然と、いつもと変わらない笑顔のまま――静かに、手の中でネジを弄ぶ

「『…すこーし予想外、かな？』」

日之影の態度に察しが付いた球磨川はにやりと唇の端を吊り上げ笑う

何故なら――

「『そっちの方が、好都合だぜ』」

全ては未だに、彼の『脚本通り』に進んでいるのだから

「蝶ヶ崎さまが選ばれた『戌』の試合形式。『狂犬落とし』でございます。

ご覧の通り校庭に設置された木製の特設ステージが舞台となります。ルールは単純明快――相手を地面に突き落とした方の勝ちでございます。もちろん参加者の安全を第一に考えセーフティネットを張ってはおりますが、そのセーフティネットは当然地面の一部と見なされますのでご注意ください」

今までの試合形式も派手だったが、これはレベルが違う。わざわざ家一軒分の木材を使って作られた骨組みだけの巨大櫓。それに少しだけ気圧されながらも、善吉は笑う

「へっ、ルールなんてなんであろうと関係ねぇ！日之影先輩が出るってだけで俺らの勝ちだ！！俺達はお前らになんか『負け』ねぇぞ『過負荷／マイナス』ぅ！」

むき出しの敵意をぶつけてくる善吉。その姿に球磨川はけらけらと笑った

「『おいおい善吉ちゃん、そう興奮するなって。っていうか今までの戦いだって一度として負けてないじゃないか。あんまり熱くなると大事なモノを見逃すぜ？めだかちゃんのぱんつとか！』」

「カッ！そんなもん見慣れてらぁ！そうやって余裕ぶってられるのも今のうちだけだ！」

睨み合いながら火花を散らす…というより、一方的な敵意を撒き散らす。そんな光景を見て、流は妙に母性に溢れた笑みを浮かべた

「…今の善吉ちゃん、「僕たちの親分はすっげぇんだぞぉ！」って言って去ってくバトル漫画の下っ端っぽい…」

やだ、可哀想…、と哀れなモノを見る目で見られ、顔を真っ赤にする善吉。しかし、再び口を開こうとした直前。今まで黙っていた志布志が口を開いた

「…あんまウチの蛾々丸を舐めない方がいいぜ。それこそ――」

にやり、と獰猛な猛禽類の笑みを浮かべながら志布志は善吉を嘲笑う

「死にたくなけりゃ、逃げとけよ」

そのどこか小馬鹿にするような…しかし底知れぬ笑みに気圧され、一歩後ずさる善吉

そうこうする間に選手二人は大きな丸太を組み合わせただけの櫓に向かい合って立つ。ほとんど風のない今日ならともかく、もし強風が吹いていたらと心配するだけで心労になってしまいそうな――

「……あ！まずいぞ人吉！このステージはとてもまずい！つーか江迎のときも思ったが…こいつは偶然じゃねぇ…っ！間違いねぇ！あいつの『過負荷』は『未来予知』だっ！」

「なっ…！？どういうことですか名瀬師匠！？突き落とせば勝ちなんてルールみしろ日之影先輩に有利なんじゃ…」

振り向く善吉に、しかし名瀬は苦い顔で唇を噛む

「足場が、まともだったらな…。学園最強ともいえる日之影先輩の強度はあの身体の大きさに基づいている。しかし身体が大きいってことは体重はより重い…つまりバランスが悪いってことだ！あんな丸っこい丸太の上じゃ足がすべってまともに動けねぇ…！立ってるのもやっとのはずだぜ…！」

「『まぁうちのお姉ちゃんよりはマシなんじゃない？この人何もないところで転ぶくらいバランス感覚ないし』」

「重すぎるくらい重い想いを抱いてるから仕方ないんですぅー。もぉー、みーくんの意地悪ぅー」

ぽかぽか球磨川の背中を叩きながら頬を膨らませる流と「『ごめんごめん』」と笑いながら逃げる球磨川。イチャつく姉弟はともかく、櫓に立つ蝶ヶ崎はモノクルを抑えながら慇懃無礼に肩を竦める

「まぁそういうことです。我々過負荷も馬鹿じゃない。むしろ進ん

で苛められるような、負けるような真似は避けたいのです。なので小細工させて頂きました。…ああ、そうそう」

にやり、と蝶ヶ崎は無言でファイティングポーズを取る日之影を、見上げながら見下す

「いつから私の過負荷が『未来予知』なんてモノと勘違いされたのか知りませんが…。勝手な思い込みで『不慮の事故』にあっても私は責任取りませんからね。ああ、違った――私は、悪くない。でしたか？」

決して日之影の腕の届く範囲には近づこうとせず、大袈裟に肩を竦める蝶ヶ崎

そんな彼の様子に――今まで沈黙を保っていた日之影は顔を上げた

「ああ、お前は悪くない」

「……は？」

「え？」「あ？」「『…へぇ』」

まさか肯定されると思っていなかった蝶ヶ崎の顔からモノクルがずり落ち、まさかの返答に流がぽかんと口を開け、予想外の日之影の言葉に志布志が呆然とし、予想以上の日之影の反応に球磨川が息を吐いた

そしてそれは現生徒会も変わらない。まさかの事態に…、あの学園を愛する英雄が、学園を破壊しようとする『過負荷』に肩入れする。そんな事態に、全員が硬直した

「まぁ、座れ」

あーやれやれどっこらしょっ。そんな言葉と共に丸太に座る日之影。そしてそんな反応に困惑するしかない蝶ヶ崎

「お前いくつだっけ？」

「え、あ、はい。に、二年です」

「ああ、年下か。んじゃ俺の後輩だな。別にタメ口でも構わねえがよ」

ぼりぼり頭を掻く日之影と、所在なさげに両手をポケットにいれたままチラチラと流や志布志を見る蝶ヶ崎。見られても困る2人はそっと視線を外した

「あー、俺は『知られざる英雄／ミスターアンノウン』。ちっとばかし人より強すぎてな、お陰様で誰にも認識されねぇ、友達もいねぇからなってくれると嬉しい」

にかっと笑いながら手を差し出す日之影。そんな屈託のない笑顔に、蝶ヶ崎の額に青筋が浮かぶ

「…大した自信ですねぇ！人に自分のスキルを明かしても何の問題もないっていう自信の表れですか！とんだ思い上がり――」

「じゃあなく、明かしたところで数分もすりゃあ確実に忘れちまうんだわ」

あっけらかんと返された言葉に気勢を折られた蝶ヶ崎の勢いが急速に萎む。一気に元気をなくした後輩に、日之影は「大丈夫か？」と心配そうに声をかけた

「…くっ！！なんなんですかあなた！敵を前にしてそんなのほほんと呑気にお喋りに興じようだなんて――」

「だからだよ」

蝶ヶ崎の言葉を遮って、日之影はじっと蝶ヶ崎を見つめる

「俺は今まで『敵』と相対したとき、この拳骨で全部どうにかしてきた。ぶん殴って矯正して強制して構成してきた。けどな、ようやく分かったぜ。てめぇら『過負荷』相手にゃ拳骨振り上げるだけ無駄だ。お前らは殴れば殴るほど歪んで歪に壊れていっちまう。お前らに拳骨は必要ねぇ。こうやって手のひらを差し出してやりゃあいい。拳で語り合って友情を深めあうのは、ジャンプの中だけだ。それになにより――」

日之影は、未だにポケットに納められたままの蝶ヶ崎の両の手を見つめる

「お前がその手で俺を殴ってくれなきゃ、『語り合えねぇ』。そして分かり合えねぇ」

「――――っ！！」

驚愕する蝶ヶ崎に、日之影は笑顔を向ける

「お前がちゃんと向き合ってくれなきゃどうしようもねぇんだ。お前は悪くねぇ、悪くねぇが、『駄目』だ。駄目なことは悪いことじゃねぇ。だが、良いことでもねぇ」

大きな、巨大な手が、蝶ヶ崎の頭に乗せられる。自分のアイデンティティが破壊されるような恐怖にびくりと身を竦ませる蝶ヶ崎。しかし日之影は優しく、その頭をぐしゃぐしゃと撫でる

「まぁ、今すぐ俺と仲良しこよし思いの丈をぶつけ合おうぜ、とは言わねぇや。だから――――」

瞬間。２人の姿が『消えた』

「今度ゆっくり、飯でも食いながら語り合おうぜ。『過負荷／マイナス』」

次の瞬間には、誰一人として気付かれることなく、彼は――彼等は、地面の上に立っていた

凡そその場にいた人物の視点からするならば、『全く同時に、地面にいるところを認識した』

…それに気付いた長者原は、無言でめだかに、そして球磨川に問い掛けた

「…恥を晒すようで申し訳ありませんが、どちらでも構いませんので勝敗を認識出来た方はいらっしゃいますか？」

…無言で首を振るめだかと、肩を竦める球磨川。その２人の反応から察しのついた長者原はしばし黙考し、結論付けた

「…選挙管理委員の身ながら大変申し訳ないことに、私は今、どちらが先に地面に付いたか確認出来ませんでした。映像記録も残らなかったようです。よって、この試合は引き分けでよろしいですか？」

と

そして『過負荷／マイナス』は笑うのだ

「『ほらね、なんとかなっちゃった』」

－１４　副会長戦（後書き）

日之影＞ながしシスターの『異常／アブノーマル』な主人公日之影　空洞でっす！お前ら飯喰ったか！？歯ぁ磨いたか！？風呂入ったら足の指の間も洗えよ！

流＞フレンドリー通り越した！敵発言なんかなかったんやー！

日之影＞日之影　空洞のおはお母さんのおだ！！

流＞『お』がないっ！？『お』がないよ日之影ちゃん！ついでに面白くないよ日之影ちゃん！！

日之影＞あ、わりっ！『知られざる英雄』で認識できねーんだ。俺ってばドジっ子さんっ☆てへっ

流＞その図体でやられると殺意が湧くほどむかつくー！プラチナむかつくー！

日之影＞え、ブラチラ？どこ？あ、薄い

流＞セクハラさんだよっ！？ってか触んにゃ！私のおっぱいはみーくんのなの！名前書いてあるの！

日之影＞実は身長差とかお前が大きめの制服着てるからわりと頻繁にスターブラチラしてた…。ありがとう

流＞お礼言われてもーっ！？そんなことキメ顔で言われても！でもお礼言われると『過負荷／マイナス』的にウレシイ！不思議！

禊＞『お姉ちゃんと日之影ちゃんの高校生活ってそんな感じだったの？』

流、日之影＞＞いやいやいや。ないないない。あとがきは治外法権だから

―15　し（前書き）

完全に『過負荷』を手玉に取った英雄が、ゆっくりと笑いながら現生徒会チームに帰還する

その英傑の顔を見ながら、無表情で腕を組むめだか

そんな後輩らしくない偉そうな態度に苦笑いしながら、日之影は口を開いた

「分かったか、黒神？勿論これは俺なりの答えだ。お前が『過負荷』相手にどんな感情を持ってるのか俺は知らねえ。だから、俺と全く同じような道を歩く必要はねぇ。…だが」

ぱちり、と片目を閉じて茶目っ気に溢れた笑みを浮かべる日之影

「参考には、なったろ？」

対してめだかもまた、ふっと小さく笑いながら、そっと手を差し出す

「見事な対応でした。貴方が私の先代であることを、誇りに思う。この誇りを胸に刻み、決して忘れないことを誓います」

日之影は「おう」と軽く笑いながら、めだかの手を取る。固い握手を交わす2人

ただ側にいるだけで相対したくなくさせる『過負荷』を相手に、とことんまで真っ向から『向き合う』ことを選択した日之影

それは間違いなく日之影　空洞という男の『強さ』から来るものだろう

『強い／プラス』だから、『弱い／マイナス』を受け入れる。『過負荷／マイナス』に屈しぬよう、戦い続ける。成る程、間違いなく彼は英雄だ

――しかし、そこでほんの少しだけめだかの心に引っかかりが出来る。ほんの少しの疑問。疑心、あるいはこれは――

しかし、その疑問を言葉にするよりも早く、ぱぁんっ！と乾いた音が鳴り響いた

―15　し

「……すいません。勝てる試合を、落としました」

真っ赤な顔で、熱病に浮かされたような足取りでふらふらと新生徒会チームに戻ってきた蝶ヶ崎。自分よりも、自分と同じくらい『過負荷／マイナス』な彼らだからこそ、どんな言葉の槍で心を抉られるか不安だった

しかし――戻ってきた彼を迎えたのは、心底嬉しそうな笑みを浮かべた流の姿で

「がーくんがーくんっ！しゃがんでしゃがんで！！」

「…はぁ、まぁ、構いませんが」

そんな流の様子に疑問を持ちつつ、しかし逆らう気にもなれず、大人しく従う

片膝を地面に付けて流を見上げようとした蝶ヶ崎の頭が、なにやら柔らかいモノに包まれる。伝わる温かい体温と、僅かに香る少女の匂いに、呆然とする蝶ヶ崎

頭を胸に抱え込むように抱きしめられている。と気付いた時には、更に意識が空の向こうに飛んでいった気がした

「良かったねぇ…。がーくん。ほんとに…良かったねぇ…」

ぴちゃり、と蝶ヶ崎の頭に水滴が落ちる。驚いて顔をあげれば、いつもの気味の悪いへらへらした笑みではなく――心底嬉しそうな顔で、ぽろぽろと涙を流す――いつも鬱陶しいと思っていた、少女の顔

「な、なんで泣いて…！？」

「今ね！今、がーくん。胸がぽわぽわしてるでしょ！？顔が熱いでしょ！？なんだかすっごく足下が不安定な感じがするでしょ！？」

「…っ！？」

それは、

それは確かに、日之影の言葉で蝶ヶ崎が陥った謎の症状で。それを言い当てられたことに、言い様のない恥ずかしさがこみ上げる

咄嗟にその恥ずかしさも、胸の内に広がる奇妙な感覚もまとめてどこかの誰かに『押し付け』ようとして――ばちん！と頬を挟み込むように叩かれ、驚きでスキルの発動をやめてしまう

「だめっ！！それはだめっ！！それだけは誰かに押し付けちゃ駄目っ！」

鬼気迫る流の様子に、スキルの発動も忘れてぽかん、と口を開けたまま呆けてしまう。そんな蝶ヶ崎に、「ふふっ、」と慈愛に溢れた笑みを浮かべ――流は、再び蝶ヶ崎の頭をその薄い胸にかき抱く

「それはね――『し

――――パァン！

と、けたたましい音を立てて
球磨川が流の両頬を、挟み込むように叩いた
「～～～～～～にゃにふんにょふぃーふゅん!?」
しっかりと紅葉を作った両頬の痛みに涙目で後ろを振り返る流。けれど球磨川はいつもの底知れぬ笑顔を浮かべたままむにむにと流の頬を揉む
「『ごっめーん、嫉妬しちゃったー』」
「目が笑ってにゃ…にゃ～っ!!いふぁいのぉ～!がーふゅんはふへへ～」
ムニムニぐにぐにと指先が白くなるほど力を込めて頬を抓り揉み伸ばしする球磨川に、さすがの流も悲鳴を上げる。我に返った蝶ヶ崎が球磨川の両腕を拘束して引き離せば、「うぇえ～んしぃちゃぁん、みーくんが私のこと初めて苛めたぁ～」と志布志のたわわな胸に飛び込む流
「『さて、阿呆なお姉ちゃんが後輩に逆セクハラしていた件はともかく。めだかちゃん、気付いてるかい?』」
くるり、と振り返りながら球磨川が視線を向けるのは、先程の茶番で過負荷たちに注目していためだかたち
「『次の戦い…会長戦が正真正銘、僕たちの運命を決める戦いになるってことさ』」

目を細め、どこか挑発するようにめだかたちを見つめる球磨川。めだかはしばし瞑目し、しかしにやりと笑った

「――望むところだ球磨川。喜べ、私はお前を…お前たち姉弟を、負かす」

なんの気負いもなく放たれた言葉。流は顔の半分を志布志の胸にうずめながら、あれ？と首を傾げた

――なんで私まで含まれてるのん？

そんな純粋な疑問。ここまでこの生徒会戦挙に関わっておきながら、『これは最終的に自分には関係ない話。みーくんがちょっぴり幸せになって、この話はおしまい。だから私は皆を愛してあげなきゃ』…そんなことを考えていた流にとって、まるで自分まで『メインキャラクター』のように扱うめだかの言葉は、青天の霹靂だった

しかし――球磨川にとっては違う

待っていたのだ。その言葉を

「『へぇ…

なら、僕も』」

両手を顔の前に。めだかたちから見えないよう。志布志にも、蝶ヶ崎にも、流にすらも見えぬよう。しっかりと顔を隠す。そして――

彼が再び顔を晒した時

「括弧付けてる場合じゃないね」

道化の仮面は消え去り、真剣な表情で、けれど冷たい笑みを浮かべた球磨川　禊は、ついにめだかたちと真っ正面から向き合った

「…みーくん？」

違和感。違和感。強烈なまでの異物感。大事で大切で特別な弟の変化に、流は首を傾げる

「やぁ、めだかちゃん。改めていい試合をしてね。応援してるよ」

口元に笑みを浮かべたまま。気障ったらしい気取った動作で数歩踏みだし、静かに手を差し出す禊

「ああ、球磨川先輩。正々堂々真っ向から迎え撃たせて貰う」

めだかもまた、口元に微笑を浮かべたままその手を握り返す。がしっ…ギリギリギリギリ…典型的な仲の悪い者同士の握手に、更なる疑問符を頭の上に浮かべる流

「ん、んー？ん～…ん？…なんか、違う…。あ、れ？えっと…違う…あれ？あれ？…あれ？」

このままじゃ、不味いんじゃないだろうか

流は今更ながらに、ようやく、既に遅すぎるというのに、事態が自分の手に余る位置まで転がってしまっていることに気が付いた

彼女の覚えている原作知識は既にあってなきが如しだが、それでも

その結末は覚えている

相対するめだかと禊。全力で戦う2人。めだかが主人公パワーとヒーローエコーで勇気１００倍元気満タン！。善吉ちゃん「めだかちゃんは敵すらも仲間にしちゃうんだぜ！すごいんだぜ！」。みーくん「僕の負けだ…。でも満足！ちょっぴり幸せ！」

大体こんな話の流れだったことは間違いない。けれど、気付いた。気付いてしまった

――みーくん、会長戦に出るつもりないんだ

流自身、「括弧つけてない」禊と相対した数は多くない。けれど分かる。生まれてからほとんどの間一緒にいたのだ。だからこそ流にはわかる

例え括弧つけていようといまいと、禊の本心くらい察してやれる。家族愛？異性愛？姉弟愛？そんなものではなく、あるいはそれら全てのお陰で、相手が禊だから、流はなんとなく禊の考えていることが分かる

そして今の禊には――戦意が、ない

既に禊はめだかと戦うつもりがないことに、気付いてしまった

理由は分からない。流は自他共に認めるほどに頭が弱い。権謀術数は勿論、現代社会を生き抜く上での単純な損得のものさしすらも壊滅的だ。禊がどんな理由で、どんなつもりで今までの奇策を取り仕切ってきたのかなんて想像することも出来ない

けれど、分かる。禊が次に何をしようとしているのかが

禊は、愛しい弟は――会長戦で、自分／球磨川　流を黒神　めだかにぶつけるつもりなんだ、と

なぜ？なぜ？なぜ？ぐるぐるぐるぐるぐる回る疑問質問不可思議不可解。理解できないし察せない。なぜ原作から外れてしまったのか、何故球磨川　禊と黒神　めだかが戦わないのか。なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？

何故、球磨川　禊は幸せにならないのか？

だって黒神　めだかと戦わなければ球磨川　禊は幸せになれないのに分からないし理解できない。けれど禊が戦わないつもりなら自分が何をしようと無駄だ。けれど、でも、なぜ、どうして、

「姉さん」

「ふぇいっ？！ら、らっしぇい！？なんにいたしやしょう！」

聞き慣れた声に聞き慣れない響き。混乱に混乱を重ねた流が弾かれたように志布志から放れ、自分を見下ろす禊と視線を合わせる

禊はゆっくりと、静かに。口元に小さな笑みを浮かべたまま、流の髪を撫でる。そんな慣れない禊から与えられる優しさに、目を白黒させる流

「姉さん、後は任せてもいい？」

――笑顔。微かに微笑を浮かべながら、優しく自分に問いかけてくる禊の姿に、流の目が点になる

「――――――にゃ」

最初は放心。ふわふわと浮き足立つ気持ちを必死につなぎ止めながら、気が付けば踊り出してしまいそうな身体を押さえ込む。足下が不安定で胸がドキドキと高鳴る。ああ、ああ、あああああああ。悦びに喜びに歓びにカタカタと震える身体をかき抱くようにして――流は、笑った

「――任せてみーくん。私が、お姉ちゃんが、お兄さんが、流さんが、どんなことでもしてあげる。みーくんの望み、ぜぇんぶかなえてあげる…」

うっすらと紅潮した顔で、とろんと表情をとろけさせながら笑う流。そんな扱いやすい姉に、くっ、と喉の奥で笑う禊

「なんでもするよ。みーくんのしたいこと、なんでもしてあげる。ねぇ、私はなにをすればいいの？何ができるの？私なんかでよかったら、何でもあげる」

最愛の弟に甘えられた――そんな甘美なシチュエーションに酔った流が、ポケットに両手を突っ込んだまま立つ禊の胸にすりすりと頬を擦り付ける。既に流の頭に先程までの疑問なんか欠片もない。アレほど大きかったはずの混乱や疑念疑問疑惑は月よりも遠くへと跳び去り、今の彼女の頭にあるのは「愛」しい弟に、どうすれば自分の内からどろどろと溢れる「愛」を彼に伝えられるのか。と言うことだけ

だからこそ、禊は笑うのだ。にやり、と。へらへらと。底知れぬ笑みを浮かべながら、あたかも使える道具を賞賛するかのように

「会長戦、どうにかして？」

「うん。分かった。私、絶対に『勝つ』よ」

――『過負荷／マイナス』全開――同類たる志布志や蝶ヶ崎すら嫌悪感を抱く毒々しい笑顔を浮かべながら抱き合う姉弟。『過負荷／マイナス』らしいと言えば『過負荷／マイナス』らしい光景だが、それでも志布志と蝶ヶ崎は小さな違和感を覚える

『過負荷／マイナス』は――

「だから、安心して待っててみーくん。私は、あんな女／黒神　めだかなんかに負けたりしないから」

『球磨川　流／マイナス』は――――

――自分から勝利宣言するような、『強さ』に溢れた少女だったか？

毒々しくも花咲くように笑う流に、不安や疑念を抱えながら、志布志と蝶ヶ崎は静かに息を呑んだ

―15　し（後書き）

流＞さって。最後のお仕事くらい真面目にしよっか

禊＞物語の終わりはもうすぐさ。気取った台詞も、気障ったらしい言い回しも必要ない

流＞倒すか、倒されるか。勝てないとか勝てるとか、そういう次元の話じゃありません

禊＞がんばってね、姉さん

流＞うん！私、絶対に勝つから応援しててね！

禊＞うん。精一杯応援するよ

禊ノ……別に『勝って』とは言ってないけどね

―16　会長戦　Aパート（前書き）

7月17日　リコール発動　及び生徒会戦挙開催決定

7月25日　庶務戦

8月1日　書記戦

8月8日　会計戦

8月15日　副会長戦

そして8月22日――会長戦当日

新生徒会。球磨川流。不知火半袖。球磨川禊。蝶ヶ崎蛾々丸。志布志飛沫。

現生徒会。黒神めだか。人吉善吉。黒神くじら。古賀いたみ。人吉瞳――そして、瞳に付き添われた江迎怒江

選挙管理委員副委員長、長者原融道を挟んで向かい合う二つのチームの戦いが、ついに最終幕を上げた

「それではお時間になりましたので生徒会戦挙会長戦を執り行います。生徒会側から出馬されるのは黒神めだか様。新生徒会側から出馬されるのは不知火半袖様の代理、戦場ヶ原流（偽名）様でございます。どちら様も悔いの残らぬようベストを尽くしてくださいませ」

長者原の言葉に一歩前に出る流とめだか。球磨川は傍らでむっしゃむっしゃと焼き鳥をかっ喰らう不知火を見下ろす

「…良いのかい、不知火ちゃん？僕は君の戦いをぜーんぶ無かったことにするつもり満々なんだけど」

どこか挑発的な問いかけに、けれど不知火はきゅぽぽんっ、と軽い笑みで

「い～えいえ！あたしはどうせ戦うつもりなんかありませんから。太刀洗さんとの問答はともあれ、あのお嬢様のターゲットから外れるなら何でもいいんですよぉ。…っていうかぁ、」

にやり、と意地の悪い笑みを浮かべながら、馴れ馴れしく球磨川の顔を見上げる不知火

「球磨川先輩こそいいんですかぁ？あの人が負けて、それで終わりって納得できるんですかぁ？あたしにはとてもじゃないけど球磨川先輩がそんな素直に敗北を受け入れられるとは思わないんですよねぇ…」

その質問に、

球磨川　禊は

「…くはっ」

もう耐えられない、と言わんばかりに、破顔一笑した

「不知火ちゃん、君は少し僕という男を勘違いしているようだけど

――」

球磨川禊の満面の笑みに、つまらなそうな顔をする不知火を見下ろしながら

「僕は姉さんが負けるだなんて思ったまま死地に送り出すような、性格が厄い弟じゃあ、ないんだぜ？」

もっとも――

「姉さんが負けても、別に構わないとは思ってるけどね」

底知れぬ球磨川の思惑に、不知火はつまらなそうに吐息を吐いた

―16　会長戦　Aパート

――向かい合ったその時既に、球磨川　流は全ての準備を整えていた

身にまとうのは最愛の弟の学生服。箱庭学園指定制服のスカート。

足下には膝下まで隠す鉄板入りのブーツ。両手を隠す革の手袋。肌を露出しているのはスカートとブーツの間の僅かな空間と、顔だけ。

いつもツインテールにしていた髪は一本の太い三つ編みにまとめられ、目を閉じたまま陶酔するように、目を閉じて思いを馳せる流

『兄』で『姉』で『弟』で『妹』で『母』で『父』で『祖父』で『祖母』で『幼なじみ』で『親友』で『悪友』で『恋人』で『夫』で『妻』で『愛人』で『玩具』で『奴隷』で『主人』で『所有物』で『所有者』で――凡そ上げていけばキリのない、彼女が他者に向ける【愛】の種類、その立ち位置。それら全てに対応しながらそのどれにも属さない。そんな格好で、表情で、精神状態で、うっとりと流は頬に手を当てながら、悩ましく「はぁん…」と熱い息を吐き出した

全身に満ち溢れ零れ落ちんばかりに沈澱していくこの感情に、狂おしいまでの激情に、いまかいまかと流は開戦の時を待つ

「こんなの、はじめて…」

満ちる。満ち溢れる。体の奥底から懇々と湧き出るその感情。あえてそれに名前を付けるなら、誰かはし＊＊＊と言うんだろう

じっと自分を探るように見つめるめだかの視線にすら気付かずに、

流はどろりと蜜を垂らすような甘い声で長者原に問い掛ける

「ねぇ……まだぁ…？」

甘ったるい強請るようなその声に、しかし長者原は顔色を変えることなく頷いた

「…了承いたしました。それでは恒例のくじびきでございます。会長戦のルールを決めていただきますので、用意された十三枚からお好きなカードをお選びください」

言われてようやく生徒会戦挙のルールを思いだし、カードに視線を向ける流。――どれを選んだところで大差ない。だから流は、特に確固たる理由もなく、ただただ1つだけ色が違うから。そんな雰囲気で、「じゃあその黒いの」と無造作に『人』のカードを選んだ。図らずも、原作通りに

「『人』のカードでございますね？では」

長者原が流の選んだカードを手に取り、皆に示す――が、そこに書かれた文字は白紙。無言で首を傾げるメンバーに長者原は説明する

「『人』のカードは所謂ジョーカー、ワイルドカードでございます。生徒会戦挙は性格上常に挑戦者に有利なレギュレーションで行われてきましたが、会長戦の『人』のカードに限り現生徒会長――この場合は黒神さまに、『自由に』選挙のルールを決めていただくことになるのでございます」

言って、一歩下がる長者原。つまり、この時点で選挙管理委員会の仕事は終わり――後は結果を見届けるのみ。そう言っているのだろ

う。そんな長者原の無言の促しに、めだかは一歩前にでる

「そういうことだ、戦場ヶ原…いや、素直に球磨川と呼ばせてもらおう。球磨川三年生。異論ないか？」

「うん。ないよ。ないから、はやく…ね？わたし…わたし、みーくんにいいとこみせないといけないの…」

少年のように舌足らずに、しかし娼婦のようにイヤらしく。およそ普段の彼女とはかけ離れたとろけた声に、過負荷チームから、そして生徒会チームから不審げな視線が注がれる

だが、それすらも一切気にせずに――ただただ、球磨川　流はぶるり、と愛に身を震わせる

――おおよそ、初めてなのだ

「初めて私――『お願い』されたの…」

――球磨川　流という存在が、『過負荷』に、愛する者たちに、この世界に必要とされたのは

とろりととろけた笑みを浮かべながら、ぺろりと唇を舐める流。唾液で濡れた唇がてらてらと輝き、火照った頬が、上気した肌が、汗を浮かべる。童顔で、小柄で、幼児体系で、色気絶無な流にはあり得ない、色気『女性』の挑発

めだかはその様子を注意深く観察しながら、小さくも厳かな声を発する

「異存がないなら、会長戦のルール。好きに決めさせてもらう」

――公平に、わかりやすく。正しすぎる彼女らしい、正しすぎる決着を目指し

「名付けて『人徳比べ』。ステージは箱庭学園全域。スタートはたった今この場所から。反則はなし。武器も凶器も細菌も毒もウィルスもなんでもありだ。タイムアップもなし。決着が付くまで永遠に戦い続ける」

――そしてルールはただ1つ

「仲間に『降参された』ら負けだ」

言い切るめだかに小さく首を傾げる流。その視線が、球磨川――禊を捉えた

襖は肩をすくめて応える

「随分ずるいルールだね、めだかちゃん。成る程『人徳比べ』。分かりやすいじゃないか――ただし、」

人徳があればあるほど、負けやすくなるルールだが

誰だってリーダーだと慕う人間が傷ついていく姿は見たくないだろう。傷付くリーダーを救ってやりたい。そんな心を押し殺し、リーダーが敵を倒すことを信じ続けなければいけない。互いのチームのリーダーが慕われていれば慕われているほどに、泥沼化していくであろうこのゲーム

しかしそのゲーム――『過負荷』相手に通じるのだろうか。とその場の『誰か』が思ってしまう

互いに互いを信用せず。互いに互いを見下しあい、互いが互いを警戒しあう『過負荷／マイナス』が――果たして『球磨川　流が死ぬ』程度のことで、すんなり負けを認めるだろうか。と思ってしまった

誰かが考えたその思いは黙殺され封印され、思考の奥深くに沈めるそれよりもそれよりも。球磨川　流は内に溢れる熱量を熱い吐息と共に吐き出しながら、嫣然と笑った

「了解、了解。分かったわ。分かりやすすぎるくらい分かったわ。だったら言いましょう、やりましょう。戦いましょう。殺りあいましょう。犯りあいましょう。愛し愛しょう。ねえ、黒神めだか」

うっすらと、球磨川　流は笑い

「あなたは、わたしを愛してくれる？」

ごろごろごろっと大量に、その袖口から雲仙愛用の炸裂弾を部屋中に撒き散らした

「――っ！」

めだかの対応は余りにもはやかった。早かったし、速すぎた。目にも止まらない速さで、流が火器を用意するより早く流の身体をひっつかみ、通路側へと投げ捨てる

「アッハハハハハ！いたいなぁ！痛いのが好きなのかなぁ黒神めだか！なぁら私の愛も痛いのでいかないとねぇ！！」

木製のドアを破壊しながら通路に投げ出された流は、それでも笑いながら後退逃走闘争拒否。これまた雲仙愛用のスーパーボールを大量に壁に投げつけながら通路を駆け抜ける

「残念ながらありがたいことに貴女の愛は私が受け取るには身に余る！」

笑いながらそれを追いかけるめだか。狭い通路の中を縦横無尽に跳ね回るスーパーボールの一撃を持ち前の胴体視力と体裁き、『反射神経』で避けながら、いつの間にやらローラーブーツ（モーター付き）で逃げ惑う流を追うめだか

――それを見送り、呆然とする一同

いきなり仲間も巻き込んでの自爆行為…炸裂弾大量放棄をする流の

頭のぶっ飛び具合に呆然とし、それを読んでいたかのように冷静に対処するめだかの手腕にも感心し、しかしいくらスタートは今この場所から～とか行ったからって移動すらせずにおっぱじめる非常識っぷりに頭を抱えながら、しかしルール上追わないわけにもいかないからこそ、ぞろぞろと連れ立って移動する2チーム

「やれやれ、姉さんってばはしゃいじゃってまあ…」

呆れたように酷薄な笑みを浮かべながら、流が撒いた炸裂弾や破壊されたドアを『なかったこと』にして修復していく球磨川。意外にも姉とめだかの暴挙のフォローをごく自然に行う球磨川の姿に、少しだけ彼を見直す善吉

「……ねぇ、球磨川くん。聞いていいかしら」

「はい、なんですか？瞳先生。大好きな瞳先生の質問なら、何なりと答えてあげますよ？」

にこりともせず視線も向けず。慇懃無礼な球磨川に、瞳は苦笑し――その隣で、江迎はびくびくと身を震わせる

「――どうしてその必要もなかったのに、江迎ちゃんを切り捨てたのかしら？」

その質問に、全員が首を傾げる

まるでその言い方だと、気まぐれで適当で無責任で無自覚な球磨川の一貫性のない行動に、意味があるようではないか、と

「――あなたの目的、いい加減に教えてくれないかしら？」

――その言葉に
球磨川　禊は、

「いいですよ、別に」

わりとあっさり、答えてくれた

「巨刀――鏃っ！！」

巨大な金属ヤスリが翻る。ぶんっ！と空間を押しつぶすような風切り音と共に叩き込まれた巨大な鉄塊は、しかし僅かに右に避けただけのめだかにかわされ…「はっ！！」気合いの声と共に繰り出された掌打で、あっさりと砕け散った

「むぅ…！？双刀・鎚っ！えいやっ！」

次に取り出されたのは流の体より数倍はある巨大なハンマー。しかし振り上げると同時に流の懐に潜り込んだめだかの拳が、流の顎を捉えた。首がすぽんと抜けたような衝撃と共に吹き飛び、転がり、再びドアをぶち破って時計塔の屋上をごろごろと転がる流の体。当然その手に巨大ハンマーはない。どころか、首から下は――むしろ頭の天辺から爪先まで、あらゆる部位が力無く転がる肉塊と化していた。一瞬だけ

ゆらりと幽鬼のごとく立ち上がる流。――ぼんやりとした思考で、

「ついに、肌に触られちゃったなぁ」とぼんやりと思う

麻痺していた身体が暖かさを取り戻すと共に、ゆっくりゆっくり身体の内側で渦が回る。

自分の手には負えない『過負荷』の誕生に、『黒神めだか／ジエンド』と『愛し恋し／ラブアレルゲン』の愛し子が、ゆっくりと体内で形作られていくのに、流は出産の苦しみに耐えるように膝を付き、荒い息を吐きながら汗を垂らした

――そんな流を悠然と見下ろしながら、めだかは流を殴った己の右手をじっと見つめる

――その口が、ゆっくりと開かれた

「……少し前から、疑問に思っていた」

…ぴくり、と流の肩が跳ねる。嫌な予感に。ぎくりと心臓が早鐘を打つ

「貴女の力に、貴女の在り方に、貴女の思想に、疑問があった。その疑問は、貴女方を知れば知るほど深まっていく、膨れ上がっていく」

「――て」

「『過負荷』とはなんなのか、を考えたときだった。私は他人の心が分からないとよく言われる。だが、それでも知るための努力は惜しまないつもりだ。だからずっと『過負荷』を観察していた。考察していた。思考していた」

「――めて」

「『過負荷』は己を負け組だという。劣等感を抱いているという。思想も思考も『マイナス』で、在り方も行動も生き方も『マイナス』

に傾いているという」

「やめて」

「だが――貴女は、違う」

「やめてって言ってるでしょ！？」

激昂し、激情し、無理矢理立ち上がり、涙をぼろぼろとこぼしながら精一杯にめだかを睨み付ける流。しかしその目に力はなく、すがるような、懇願するような色しかない

「――人を愛する。誰かのために尽くす。誰かのために己を犠牲にする。一概には言えないが、それらの行動は――『プラス』に分類されるだろう」

今の流にはもはや先程までの威勢はない。張っていた虚勢は無理矢理破がされ、自己を保っていたアイデンティティすらも、少しずつ削られていく

「そしてこうして拳を合わせ、貴女に…『愛された』。だからこそ分かる。だからこそ確信した」

めだかはじっと流を見つめながら――その言葉を、吐き出した

「球磨川　流先輩。貴女は、『異常／アブノーマル』だ」

―16　会長戦　Aパート（後書き）

驚愕の真実、次週、球磨川　流の『異常／アブノーマル』に隠された過去が明かされる…っ！！

安心院＞期待してくれてる皆には悪いけど、この作品には僕の出番も裸エプロン先輩武双もないんだぜ？過負荷編で激動の最終回なわけさ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2529s/

ながしシスター

2011年12月22日00時44分発行